

満韓ところどころ

夏目漱石

青空文庫

南満鉄道会社なんまんでつどうかいしゃ っていったい何をするんだいと真面目まじめに聞いたたら、満鉄まんてつの総裁も少し呆あきれた顔をして、御前おまえもよっぽど馬鹿ばかだなあと云った。是公ぜこうから馬鹿と云われたって怖こわくも何ともないから黙もくつていた。すると是公が笑わらいながら、どうだ今度こんだいっしょに連れてつてやろうかと云い出した。是公の連れて行いつてやろうかは久ひさしいもので、二十四五年ぜん前ぜん、神田おがわていの小川亭おがわていの前まえにあつた怪あやしげな天麩羅屋てんぷらやへ連れて行いつてくれた以来時々連れてつてやろうかを余あまに向むかつて繰返くりかす癖くせがある。そのくせいまだ大おほした所ところへ連れて行いつてくれた試ためしがない。「今度こんだいっしょに連れてつてやろうか」もおおかたその格かくだろろうと思おもつてただろうと答こたえておいた。この氣きのない返事を聞いた総裁は、まあ海外かいがいにおける日本人にっぽんじんがどんな事ことをしているか、ちつと見て来るがよい。御前おまえみたように何にも知らないで高慢こうまんな顔かほをしていられては傍はたが迷惑めいわくするからとすこぶる適切てきめいた事を云う。何でも是公に聞きいて見ると馬関ばかんや何かで我々の不必要ふじやうと認しんめるほどの御茶代おちやだいなどを宿屋へ置おくんだそうだから、是公といっしょに歩いて、この彪ほうだい大おほな御茶代が宿屋の主人下女男しゅじんかよめにどんな影響えいきやうを生うずる

かちよつと見たくなつた。そこで、じゃ君の供をしてへいへい云つて歩いて見たいなど注文をつけたら、そりやどうでも構わない、いっしよが厭いやなら別でも差さ支しえないと云う返事であつた。

それから御供をするのはいつだろうかと思つて、面白半分に待っていると、八月半なかばに使が来ていつでも立てる用意ができてゐるかと思つて押した。立てると云えば立てるような身し上じやうだから立てると答えた。するとまた十日ほどしていつ何日いつかの船で馬関から乗るが、好いかと云う手紙が来た。それも、ちゃんと心得た。次には用事ができたから一ひと船ふね延ばすがどうだと云う便りたよがあつた。これも訳なく承知した。しかし承知している最中に、突然急性胃カタルでどつとやられてしまった。こうなるといかに約束を重んずる余も、出発までに全快するかしないか自分で保証し悪にくくなつて来た。胸へ差し込みが来ると、約束どころじやない。馬関も御茶代も、是公も大連もめちやめちやになつてしまう。世界がただ真黒な塊かたまりに見えた。それでも御供旅行の好奇心はどこかに潜ひそんでいたと見えて、先へ行つてくれと云う事は一口も是公に云わなかつた。

そのうち胃のところがガスか何かでいっぱいになつた。茶碗の音などを聞くと腹が立つた。人間は何の必要があつて飯などを食うのか気の知れない動物だ、こうして氷さえ囓かじつ

ていれば清しようじ淨ようけつ潔ぱく白はくで何も不足はないじやないかと云う氣になった。枕まくら元もとで人が何か云うと、話をしなくつちあ生きていられないおしやべりほど情ない下賤げせんなものはあるまいと思つた。眼を開いて本棚ほんだなを見渡すと書物がぎつしり詰つてゐる。その書物が一々違つた色をしてそうしてことごとく別々な名を持つてゐる。煩わづらわしい事夥おびただしい。何の酔すいき興ようでこんな差別をつけたものだらう、また何の因果いんがでそれを大事そうに列ならべ立てたものだらう。実にしち面倒臭い世の中だ。早く死んじまえと云う氣になつた。

禎ていじ二ふとんさんが蒲団の横へ来て、どうですと尋ねたが、返事をするのが馬鹿ばか氣げていて何とも云う了りようけん見けんにならない。代診が来て、これじゃ旅行は無理ですよ、医者として是非止とめなくつちやならないと説諭たしたが、御尤ごもつともだとも不尤ふもつともだとも答えるのが厭いやだつた。そのうち日は容赦なく経たつた。病氣は依然として元のところに逗とまり留りゆうしていた。とうとう出発の前日になつて、電話で中村へ断つた。中村は御大事になさいと云つて先へ立つてしまつた。

小蒸氣こじょうきを出て鉄嶺丸てつれいまるの舷側げんそくを上るや否や、商船会社の大河平おおかわひらさんが、どうか総裁とごいっしよのように伺いましたかと云われる。船が動き出すと、事務長の佐治君さじくんが総裁と同じ船でおいでになると聞いていましたがと聞かれる。船長さんにサローンの出口でであ出逢うと総裁と御同行のはずだと誰か云つてたようでしたがと質問を受ける。こうみんなが総裁総裁と云うと是公ぜこうと呼ぶのが急に恐ろしくなる。仕方がないから、ええ総裁といっしよのはずでしたが、ええ総裁と同じ船に乗る約束でしたがと、たちまち二十五年来用い慣れた是公を儉約し始めた。この儉約は鉄嶺丸に始まって、大連から満洲一面に広がって、とうとう安東県あんとうけんを経て、韓国かんこくにまで及んだのだから少からず恐縮した。総裁という言葉葉は、世間にはどう通用するか知らないが、余が旧友中村是公なかむらぜこうを代表する名詞としては、あまりにえら過ぎて、あまりに大袈裟おおげさで、あまりに親しみがなくて、あまりに角かどが出過ぎてゐる。いっこう味があじわいない。たとい世間がどう云おうと、余一人はやはり昔の通り是公しゆうかてきは公と呼び棄すてにしたかつたんだが、衆寡敵しゆうかてきせず、やむをえず、せっかくの友達を、他人扱いにして五十日間通して来たのは遺憾いかんである。

船の中は比較的楽だった。二百十日にひゃくとおかの明る日に神戸を立つたのだから、多少の波風は無論おいでなさるんだろうと思つてちゃんと覚悟をきめていたところが、天氣が存外のんき香気

にできたもので、神戸から大連に着くまでたいいは鈍^{にぶ}り返っていた。甲板^{かんばん}の上に若い英吉利^{イギリス}の男が犬を抱いて穩かに寝ていたと云つたら、海のようにすもたいいは想像されるだろうと思う。

ありや何ですかと事務長の佐治^{さじ}さんに聞くと、え、あれは英国の副領事^{ふくりようじ}だそうだと、佐治さんが答えた。副領事かも知れないが余には美しい二十一二の青年としか思われなかつた、これに反して犬はすこぶる妙な顔をしていた。もつともブルドッグだから両親からしてすでに普通の顔とは縁の遠い方に違いない。したがって特にこいつだけを責めるのは残酷だが、一方から云うと、また不思議に妙な顔をしているんだからやむをえない。この犬はその後大連^ごに渡つて大和ホテル^{やまと}に投宿した。そうとはちつとも知らずに、食堂に入つて飯を食っていると、突然この顔に出食^{でつく}わして一驚^{いっきよう}を喫^{きつ}した。固^{もと}より犬の食堂じやないんだけれども、犬の方で間違えて這入^{はい}つて来たものと見える。もつとも彼の主人もその時食堂にいた。主人は多数の人間のいるところで、犬と高声に談判するのを非紳士的と考えたと見えて、いきなりかの妙な顔を胴ぐるみ脇^{わき}の下に抱^{かか}えて食堂の外に出て行つた。その退却の様子はすこぶる優美であつた。彼は重い犬をあたかも風呂敷包^{ふろしきづつみ}のごとく安々と小脇に抱えて、多くの人の並んでいる食卓の間を、足音も立てず大股^{おおまた}に歩んで戸の外に

からだ
身体を隠した。その時犬はわんとも云わなかった。ぐうとも云わなかった。あたかも弾力ある暖かい器械の、素直すなおに自然の力に従うように、おとなしく抱かれて行つた。顔はたびたび云う通りはなはだ妙だが、行状ぎようじように至つてはすこぶる氣高いものであつた。余はその後ごついにこの犬に逢う機会を得なかつた。

三

退屈だから甲板かんばんに出て向うを見ると、晴れたとも曇つたとも方かたのつかない天氣うちの中に、黒い影が煙を吐いて、静かな空を濁しながら動いて行く。しばらくその痕あとを眺めていたが、やがてまた籐椅子といすの上に腰をおろした。例の英吉利イギリスの男が、今日は犬を椅子いすの足に鎖で縛りつけて、長い脛すねをその上に延ばして書物を読んでいる。もう一人の異人はサルーンで何かしきりに認め物しめたものをしている。その妻君はどこへ行つたか見えない。亜米利加アメリカの宣教師夫婦は席を船長室の傍わきへ移した。甲板の上はいつもの通り無事であつた。ただ機関の音だけが足の裏へ響けるほど猛烈に鳴り渡つた。その響の中でいつの間にかうとうとした。眼が覺さめてから、サルーンに入つて亜米利加の絵入りの雑誌を引ひつ剥べがして見た。傍そばに

は日本の雑誌も五六冊片寄せてあつた。いずれも佐治文庫さじぶんこと云う判が押してある。これは事務長の佐治さんが、自分で読むために上陸の際に買入れて、読んでしまうと船の図書館に寄附するのだと佐治さん自身から聞いた。佐治さんは文学好と見えて、余の著書なども読んでいる。友人の畔くろやなぎ柳芥舟かいしゅうと同郷だと云うから、差し向いで芥舟の評判を少しやつた。

また室へやを出て海を眺めた。すると先刻さつき黒い影を波の上に残して、遠くの向うを動いていた船が、すぐ眼の前に見える。大きさは鉄嶺丸てつれいまるとほぼ同じぐらいに思われるが、船足ふなあしがだいぶ遅いのろと見えて、しばらくの間まにもうこれほど追つかれたのである。欄干らんかんに頬ほお杖えを突いて、見ていると鉄嶺丸が刻一刻と後うしろから逼せまつて行くのがよく分る。しまいには黄色い文字で書いた営口丸えいこうまるの三字さえ明あきかに読めるようになった。やがて余の船の頭が営口丸の尻より先へ出た。そうして、尻から胴の方へじりじりと競せり上げて行つた。船は約一丁を隔ててほとんど並行へいこうの姿勢で進行している。もう七八分すると、余の船は全く営口丸を乗り切る事ができそうに思われた。時に約一丁もあろうと云う船と船の間隔が妙せまに逼せまつて来た。向うの甲板にいる乗客じようかくの影が確たしかに勘定かんじようができるようになった。見るとことごとく西洋人である。中には眼鏡めがねを出してこつちを眺めているのもあつた。けれ

ども見るうちに眼鏡は不必要になった。髪の色も眼鼻立めはなだちも甲板に立っている人は御互に鮮あざやかな顔を見合せるほど船は近くなつた。その時は全く美しかった。と思うと、船は今までもよりも倍以上の速力を鼓こして刹那せつなに近寄り始めた。海の水を細い谷川のように仕切つて、営口丸の船体が、六尺ほどの眼の前に黒く切つ立つた時は、ああ打ぶつかるなと思つた。途端たんに向うの舳へさきは余の眼を掠かすめて過ぎ去りつつ、逼せまりつつ、とうとう中等甲板の角かどの所まで行つてどさりと当つた。同時に甲板の上に釣るしてあつた端艇ポートが二艘そうほどでんぐり返つた。端艇つなを繋つないであつた鉄の棒は無雑作むぞうさに曲つた。営口丸の船員は手を拍うつてわあと囃はやし立てた。余と並んで立つていた異人が、妙な声を出してダム何とか云つた。

一時間の後佐治のちさんがやつて来て、夏目さん身をおかわすのかわすと云う字はどう書いたら好いでしょうと聞くから、そうですねと云つて見たが、実は余も知らなかつた。為替かわせの替かわせると云う字じやいけませんかとはいはなはだ文学者らしからぬ事を答えると、佐治さんは承知できない顔をして、だつてあれは物を取り替える時に使うんでしようかとやり込めるから、やむをえず、じゃ仮名かなが好いでしょうと忠告した。佐治さんは呆あきれて出て行つた。後で聞くと、衝突の始末を書くので、その中に、本船は身をおかわしと云う文句を入れたかつたのだそうである。

四

船が飯田河岸いだがしのような石垣へ横にぴたりと着くんだから海とは思えない。河岸の上には人がたくさん並んでいる。けれどもその大部分は支那のクーリーで、一人見ても汚きたならしいが、二人寄るとなお見苦しい。こうたくさん塊かたまりるとさらに不体裁ふていさいである。余は甲板の上立って、遠くからこの群集を見下みおろしながら、腹の中で、へえー、こいつは妙な所へ着いたねと思った。そのうち船がだんだん河岸に近づいてくるに従って、陸おかの方で帽子を振って知人に挨拶あいさつをするものなどができて来た。宣教師のウインという人の妻君が、中村さんが多分迎えに来ておいででしょうと、笑いながら御世辞おせじを云ったが、電報も打たず、いつ着くとも知らせなかった余の到着を、いくら権威けんい赫赫かくかくたる総裁だつて予知し得る道理がない。余は欄干らんかんに頬杖ほおづえを突きながら、なるほどこいつはどうしたものかな、ひとまず是公の家うちへ行つて宿を聞いて、それからその宿へ移る事にでもするかと思つてうちに、船は鷹揚おうようにかの汚きたならしいクーリー団の前に横づけになつて止まった。止まるや否や、クーリー団は、怒おこつた蜂の巣のように、急に鳴動めいどうし始めた。その鳴動の突然なの

には、ちよつと胆力を奪われたが、何しろ早晚地面の上へ下りるべき運命を持った身体^{からだ}な
んだから、しまいにはどうかしてくれるだろうと思つて、やっぱり頼杖を突いて河岸の上
の混戦を眺めていた。すると佐治さんが来て、夏目さんどこへおいでになりますと聞いて
くれた。まあひとまず総裁の家^{うち}へでも行つて見ましようと答えていると、そこへ背の高い、
紺^{こん}色^{いろ}の夏服を着た立派な紳士が出て来て、懷中から名刺を出して叮^{てい}嚙^{ねい}に挨拶をされた。
それが秘書の沼田^{ぬまた}さんだったので、頼杖を突いて、いつまでも鳴動を眺めている余には、
大変な好都合になつた。沼田さんは今度郷里から呼び迎えられた老人を、自宅へ案内され
るために、船まで来られたのだそうだが、同じ鉄嶺丸に余の乗っている事を聞いて、わざ
わざ刺^しを通じられたのである。

じやホテルの馬車でと沼田さんが佐治さんに話している。河岸^{かし}の上を見ると、なるほど
馬車が並んでいた。力車^{りきしゃ}もたくさんある、ところが力車はみんな鳴動^{めいどう}連^{れん}が引くので、
内地のに比べるとはなはだ景氣が好くない。馬車の大部分もまた鳴動連^{めいどうれん}によつて、御^ぎせら
れている様子である。したがつていずれも鳴動流^{めいどうりゅう}に汚^{きた}ないものばかりであつた。ことに馬
車に至つては、その昔日露戦争の当時、露助^{ろすけ}が大連を引上げる際に、このまま日本人に引
渡すのは残念だと云うので、御叮嚀^{ごていねい}に穴を掘つて、土の中に埋^うめて行つたのを、チャン

が土の臭を嗅いで歩いて、とうとう嗅ぎあてて、一つ掘っては鳴動させ、二つ掘っては鳴動させ、とうとう大連を縦横十文字に鳴動させるまでに掘り尽くしたと云う評判のある、——評判だから、本当の事は分らないが、この評判があらゆる評判のうちでもっとも巧妙なものと、誰しも認めざるを得ないほどの泥だらけの馬車である。

その中に東京の真中でも容易に見る事のできないくらい、新しい奇麗なのが二台あった。御者が立派なりヴェリーを着て、光った長靴を穿いて、哈爾賓の肥えた馬の手綱を取って控えていた。佐治さんは、船から河岸へ掛けた橋を渡って、鳴動の中を突き切って、わざわざ余をその奇麗な馬車の傍まで連れて行つた。さあ御乗んなさいと勧めながら、すぐ御者台の方へ向いて、総裁の御宅までと注意を与えた。御者はすぐ鞭を執つた。車は鳴動の中を揺ぎ出した。

五

門を這入って馬車の輪が砂利の上を二三間軋つたかと思うと、馬は大きな玄関の前へ来て静かに留まつた。石段を上つて、入口の所に立つや否や、色の白い十四五の給仕が、頑

丈^{んじょう}な櫳^{かし}の戸を内から開いて、余の顔を見ながら挨拶^{あいさつ}をした。もう御帰^{ごき}りかと尋ねると、まだでございませうと云う。留守^{るす}では仕方がない。どうしたものだろうと思つて、石の上に佇^{たた}ずんで首^{かたむち}を傾^{かたむ}けているところへ、後^{うしろ}に足音がするようだからふり向くと、先刻^{さつき}鉄嶺丸^{てつりやう}で知^ち己^{かつぎ}になつた沼田さんである。さあ、どうぞと云われるので、中^{うち}に入つた。沼田さんは先へ立つて、ホールの突き当りにある厚い戸を開いた。その戸の中へ首を突つ込んで、室^{へや}の奥を見渡した時に、こりや滅法^{めつぽう}広いなと思つた。数字の觀念に乏^たしい性質^{ちやう}だから何畳敷^じだかといふと要領^{ようりやう}を得ないが、何でも細長い御寺の本堂のような心持がした。その広い座敷^{ざしき}がただ一枚の絨^{じゆうたん}毯^{たん}で敷きつめられて、四角^{よすみ}だけがわすかばかり華^{はな}やかな織物^{おりもの}の色と映^てり合うために、薄暗く光つている。この大きな絨^{じゆうたん}毯^{たん}の上に、応接用^{おうけつよう}の椅子^{いす}と卓^{すてーブル}がちよんぼり一^{ふた}所^{ところ}に並べてある。一方の卓と一方の卓とは、まるで隣家^{りんか}の座敷^{ざしき}ぐらい離れている。沼田さんは余をその一方に導いて席を与えられた。仰向^{あおもむ}いて見ると天井^{てんじやう}井^いがむやみに高い。高いはずである。室^{へや}の入口には二階がついていて、その二階の手摺^{てすり}から、余の坐つている所が一目に見下^{みおろ}されるような構造なんだから、つまるところは、余の頭の上が、一階の天井兼^{けん}二階の天井である。後^{のち}に人の説明を聞いて始めて知つたのだが、このだつ広い応接間^{おうけつかん}は、実は舞踏室^{みよだつしつ}で、それを見下^{みくだ}している手摺付^{てすりつき}の二階は、楽隊^{がくたい}の樂を奏す

る所にできているのだそうだ。そんなら、そうと早くから教えてくれれば、安心するものを、断りなしに急に仏様のない本堂へ案内されたものだからまず一番に吃驚した。余は大連滞在中何度となくこの部屋を横切つて、是公の書斎へ通つたので、喫驚する事は、最初の一度だけですんだが、通るたんびに、おりもせぬ阿弥陀様を思い出さない事はなかった。

室を這入つて右は、往來を向いた窓で、左の中央から長い幕が次の部屋の仕切りに垂れている。正面に五尺ほどの盆栽を二鉢置いて、横に奇麗な象の置物が据えてある。大きさは豚の子ほどある。これは狸穴の支社の客間で見たものと同じだから、一對を二つに分けたものだろうと思つた。そのほかには長い幕の上に、大な額がかかつていた。その左りの端に、小さく南満鉄道会社総裁後藤新平と書いてある。書体から云うと、上海辺で見える看板のような字で、筆画がすこぶる整っている。後藤さんも満洲へ来ていただけに、字が旨くなつたものだと感じたが、その実感心したのは、後藤さんの揮毫ではなくつて、清国皇帝の御筆であつた。右の肩に賜うと云う字があるのを見落した上に後藤さんの名前が小さ過ぎるのでつい失礼をしたのである。後藤さんも清国皇帝に逢つて、こう小さく呼び棄に書かれちゃたまらない。えらい人からは、滅多に賜わつたり何かされない方

がいいと思つた。

沼田さんは給仕を呼んで、処々方々へ電話をかけさして、是公の行方を聞き合せてくれたが全く分らない。米国の艦隊が港内に碇泊しているの、驩迎のため、今日はベースボールがあるはずだから、あるいはそれを観に行つてゐるかも知れないと云う話であつた。

そのうち広い部屋がようやく暗くなりかけた。じやどこぞ宿屋へでも行つて待ちましようと云うと、社の宿屋ですから、やつぱり大和ホテルがいいでしょうと、沼田さんが親切に自分で余をホテルまで案内してくれた。

六

湯を立ててもらつて、久しぶりに塩気のない真水の中に長くなって寝ている最中に、湯殿の戸をこつこつ叩くものがある。風呂場で訪問を受けた試しはまだかつてないんだから、湯槽の中で身を浮かしながら少々逡巡していると、叩く方ではどうあつても訪問の礼を尽くさねばやまぬという決心と見えて、なおのこと、こつこつやる。いくらこつこ

つやつたつて、まさか赤裸はだかで飛び出して、室へやの錠じようを明ける訳にも行かないから、風呂の中から大きな声で、おい何だと用事を聞いて見た。すると摺硝子すりガラスの向むこう側がわで、ちよつと明けなさいと云う声がある。この声なら明けても差支さしつかえないと思つて、身体からだ全体から雫しずくを垂らしながら、素裸すっぱだかでボールトを外はなすと、はたして是公ぜこうが杖つえを突いて戸口に立つていた。来るなら電報でもちよつとかければ好いものと云う。どこへ行つていたんだと聞くと、ベースボールを観みて、それから舟を漕こいでいたと云う挨拶あいさつである。飯を食つたら遊びに來なさいと案内をするから、よろしいと答えてまた戸を締しめた。締めながら、おいしいこの宿は少し窮屈ゆかただね、浴衣ゆかたでぶらぶらする事は禁制なんだろうと聞いたたら、ここが厭いやなら遼りようとう東ホテルへでも行けと云つて歸つて行つた。

例刻に食堂へ下りて飯を食つたら、知らない西洋人といつしよの卓テーブルへ坐らせられた。その男ごめんが御免なさい、どうも嚏くしゃみが出てと、手帛ハンケチを鼻へ当てたが、嚏の音はちつともしなかつたから、余はさあさあと、暗あんに嚏を奨しょう励れいしておいた。この男は自分で英人だと名乗つた。そうして御前は旅順りよじゆんを見たかと余に尋ねた。旅順を見ないなら教えるが、いつの汽車で行つて、どことどこを見て、それからいつの汽車で歸るが好いと、自分のやつた通くわりを委しく語つて聞かせた。余はなるほどなるほどと聞いていた。次に御前は門司もじを見

たかと聞いた。次にあすこの石炭はもう沢山は出まいと聞いた。沢山は出まいと答えた。実は沢山出るか出ないか知らなかったのである。

しばらくして、君は旅順に行つた事があるかとまた同じ事を尋ね出した。少々変だが面倒だから、いやまだだと、こつちも前同様な返事をしておいた。すると旅順に行くには朝八時と十一時の汽車があつて……とまた先刻と寸分違わないような案内者めいた事を云つて聞かせた。先が先だから余も依然としてなるほどなるほどを繰り返した。最後に突然御前は日本人かと尋ねた。余はそうだと正直なところを答えたようなものの、今までは何国人と思われていたんだろうかと考えると、多少心細かった。

余は日本人なりの答を得るや否や、この男が、おれも四十年前横浜に行つた事があるが、どうも日本人は叮嚀で親切で慇懃で実に模範的國民だなどときりに御世辞を振り廻し始めた。せつかくだとは思つたが、是公との約束もある事だから、好い加減なところで談話を切り上げて、この老人と別れた。

表へ出るとアカシヤの葉が朗らかな夜の空氣の中にしんと落ちついて、人道を行く靴の音が向うから響いて来る。暗い所から白服を着けた西洋人が馬車で現れた。ホテルへ帰つて行くのだろう。馬の蹄は玄関の前で留まつたらしい。是公の家の屋根から突出した細長

い塔が、瑠璃色るりいろの天空の一部分を黒く染抜いて、大連の初秋はつあきが、内地では見る事のできない深い色の奥に、数えるほどの星を輝きらつかせていた。

七

この間から米国の艦隊が四艘そう来ているので、毎日いろいろな事をして遊ばせるのだが、翌日あすの晩は舞踏会をやるはずになっているから出て見ろと是公ぜこうが勧めた。出て見ろつたつて、燕尾服えんびふくも何も持って来やしないから駄目だめだと断ると、是公が希知けちな奴やつだなど云つた。燕尾服は其上倫ロンドン敦留学中トテナムコートロードの怪しげな洋服屋で、もつとも安い奴こしらを拵おぼええた覚があるが、爾来じらい筆筒の底に深く蔵しているのみで、親友といえども、持つてるか持つてないか知らないくらいである。いくら大連がハイカラだって、東京を立つ時に、この古燕尾服が役に立とうとは思いがけないから、やっぱり筆筒の底にしまったなりで出て来た。じゃ、おれの袴羽織はかばわりを貸してやるから、日本服で出ろ、出て、まあ、どんな容子ようすだか見るが好いと、是公は何でも引き摺ひり出ずそうとする。いっそ出るくらいなら踊らなくっちゃつまらないから、日本服ならまあ止よそうと云いたかったが、是公は正直だから本當

にすると好くないと思つて、ただ羽織袴はいけないうと断つた。是公はそれでも舞踏会を見せる氣と見えて、翌日あくるひの午、社の二階で上田君を捕つえて、君の燕尾服をこいつに貸してやらないか、君のならちようど合いそうだと云つていた。上田君もこの突然な相談には辟へ易きしたに違えない。笑いながら、いえ私のは誰にも合いませんと謙遜けんそんされた。

舞踏会はそれですんだが、しばらくすると、今度はこれから倶楽部クラブに連れて行つてやろうと、例のごとく連れて行つてやろうを出し始めた。だいぶ遅いようだとは思つたが、座にある国沢君も、行こうと云われるので、三人で涼しい夜の電灯の下もとに出た。広い通りを一二丁来ると日本橋にほんばしである。名は日本橋だけれどもその実は純然たる洋式で、しかも歐洲の中心でなければ見られそうもないほどに、雅がにも丈夫じやうぶにもできている。三人は橋の手前ひとむねにある一棟れんがづくの煉瓦造りに這入はいつた。誰かいるかなと、玉突場のぞを覗いたが、ただ電灯が明るく点ついているだけで玉の鳴る音はしなかった。読書室へ這入つたが、西洋の雑誌が、秩序よく列ならべてあるばかりで、ページを繰る手の影はどこにも見えなかった。将棋歌か留多るたをやる所へ這入つて腰をかけて見たが、三人の尻をおろしたほかは、椅子いすも洋卓テーブルもことごとく空あいていた。今日は遅いので西洋人がいないからつまらないと是公が云う。是公の会話の下手な事は天品てんぴんと云うくらいなものだから、不思議に思つて、御前は平生こ

こに出入でいりして赤髯あかひげと交際するのかと聞いたたら、まあ来た事はないなと澄ましている。それじゃ西洋人がいなくってつまらないどころか、いなくって仕合せなくらいなものだろうと聞いて見ると、それでもおれはこの倶楽部クラブの会長だよ、出席しないでも好いと云う条件で会長になったんだと呑気のんきな説明をした。

会員の名札はなるほど外国流つづりの綴が多い。国沢君は大きな本を拈ひろげて、余の姓名を書き込ました上、是公に君ここへと催促した。是公はよろしいと答えて、自分の名の前に *proposed by* と付けた。それへ国沢君が、同おなじく *seconded by* と加えてくれたので、大連滞在中はいつでも、倶楽部クラブに出入しゅつにゅうする資格ができた。

それから三人でバーへ行つた。バーは支那人がやっている。英語だか支那語だか日本語だか分らない言葉で注文を通して、妙に赤い酒を飲みながら話をした。酔つて外へ出ると濃い空がますます濃く澄み渡つて、見た事のない深い高さの裡うちに星の光を認めた。国沢君がわざわざホテルの玄関まで送られた。玄関を入ると、正面の時計がちょうど十二時を打った。国沢君はこの十二時を聞きながら、では御休みなさいと云つて、戻られた。

ホテルの玄関で、是公ぜこうが馬車をと云うと、ブローラムに致しますかと給仕が聞いた。いや開いた奴ひらが好いと命じている。余は石段の上に立つて、玄関から一直線に日本橋まで続いている、広い往来を眺めた。大連の日は日本の日よりもたしかに明るく眼の前を照らした。日は遠くに見える、けれども光は近くにある、とても評したらよからうと思うほど空気が透すき徹とおつて、路みちも樹きも屋根も煉瓦れんがも、それぞれ鮮あざやかに眸ひとみの中に浮き出した。

やがて蹄ひづめの音がして、是公の馬車は二人の前に留まった。二人はこの麗うらちかな空気の中をふわふわ揺られながら日本橋を渡った。橋向うは市街である。それを通り越すと満鉄の本社になる。馬車は市街の中へ這入はいらずに、すぐ右へ切れた。気がついて見ると、遥向はるかむこうの岡おかの上に高いオベリスクが、白い剣つるぎのように切っ立って、青空に聳そびえている。その奥に同じく白い色の大きな棟むねが見える。屋根は鈍にぶい赤で塗ってあった。オベリスクの手前には奇麗きれいな橋がかかっていた。家も塔も橋も三つながら同じ色で、三つとも強い日を受けて輝いた。余は遠くからこの三つの建築の位地いちと関係と恰好かつこうとを眺めて、その釣合のうまく取れているのに感心した。

あれは何だいと車の上で聞くと、あれは電気公園と云って、内地にも無いものだ。電気

仕掛でいろいろな娯樂をやつて、大連の人に保養をさせるために、会社で拵こしらへてゐるんだと云う説明である。電気公園には恐縮したが、内地にもないくらいのものなら、すこぶる珍らしいに違ないと思つて、娯樂つてどんな事をやるんだと重ねて聞き返すと、娯樂とは字のごとく娯樂でさあと、何だか少々危あやしくなつて来た。よくよく糺きゆうめい明して見ると、実は今月末こんげつすえとかに開場するんで、何をやるんだか、その日になつて見なければ、総裁にも分らないのだそうである。

そのうち馬車が、電車の軌道レールを敷いている所へ出た。電車も電気公園と同じく、今月末に開業するんだとか云つて、会社では今支那人の車掌運転手を雇つて、訓練のために、ある局部だけの試運転をやらしている。御忘れものはありませんか、ちんちん動きますを支那の口で稽古けいこしている最中なのだから、軌道レールがここまで延長して来るのは、別段怪しい事もないが、気がついて見ると、鉄軌レールの据すえ方かたが少々違ふようである。第一内地のように石を敷かない計画らしい。御影石みかげいしが払底ふつていなのかいと質問して見たら、すぐ、冗談云つちやいけないとやられてしまった。これが最新式の敷方しきかたなんで、土台をどうかして、どうとかして、鉄軌と鉄軌の間を混合金属で塗り固めて全線をたつた一本の長い棒にしてしまつて……とあたかも自分が技師であるかのごとき自慢である。内地から来たものはなる

ほど田舎いなかもの取扱にされても仕方がない。そいつは感心だと、全く感心すると、技師を信任して、少しも口を出さずに、どうでも自分の思つた通りをやらせるから、そんな仕事もできるのさと云つた。内地では何でもやかましく干渉する奴がたくさん出て来るものと見える。

馬車が岡の上へ出た。そこはまだ道路が完成してないので、満洲特有の黄土こうどが、見るうちに靴の先から洋袴ズボンの膝ひざの上まで細かに積もつた。この辺ももう少しすると、ホテルの前のように、カンカンした路に変化する事だろうが、そんな事を口外すれば、是公がますます得意になるばかりだから、わざと黙つていた。

九

これが豆油まめあぶらの精製しない方で、こつちが精製した方です。色が違うばかりじゃない、香においも少し變つています。嗅かいで御覽なさいと技師が注意するので嗅いで見た。

用もちいる途ですか、まあ料理用ですね。外国では動物性の油が高価ですから、こう云うのができたら便利でしょう。第一大変安いのです。これでオリーブ油の何分の一にしか当ら

ないんだから。そうして効用は両方共ほぼ同じです。その点から見てもはなはだ重宝ちようほうです。それにこの油の特色は他の植物性のもののように不消化でないです。動物性と同じくらいに消化こなれますと云われたので急に豆油がありがなくなつた。やはり天麩羅てんぷらなどにできすかと聞くと、無論できますと答えたので、近き将来において一つ豆油の天麩羅を食つてみようと思つてその室を出た。

出がけに御邪魔でもこれをお持ちなさいと云つて細長い箱をくれたから、何だろうと思つて、即座に開けて見ると、石鹼シヤボンが三つ並んでいた。これがやっぱり同じ材料から製造した石鹼ですと説明されたが、普通の石鹼と別に変つたところもないようだから、ただなるほどと云つたなり眺めていた。すると、この石鹼に面白いところは、塩水に溶解するから奇体ですよとの追加があつたので、急に貰つて行く氣になつて蓋ふたをした。

柞蚕さくさんから取つた糸を並べて、これが従来の奴ですと云うのを見ると、なるほど色が黒い。こつちは精製した方そばでと、傍に出されると全く白い。かつ節ふしなしにでき上つている。

これで織つたのがありますかと聞いて見ると、あいにく有りませんと云う答である。しかしもし織つたらどんなものができるでしょうと聞くと、羽二重はふたえのようなものができるつもりですと云う。その上価段ねだんが半分だと云う。柞蚕さくさんから羽二重はふたえが織れて、それが内地の半

額で買えたらさぞ善^よかろう。

高粱酒^{こうりやうしゆ}を出して洋盃^{コップ}に注ぎながら、こつちが普通の方で、こつちが精製した方だと、

またやりだしたから、いや御酒はたくさんですと断った。さすが酒好きの是公も高粱酒の比較飲みは、思わしくないと見えて、並製も上製も同じく謝絶した。是公の話によると、この間高峯^{たかみね}議吉^{じようきち}さんが来て、高粱からウイスキーを採^とるとか採らないとかしきりに研究していたそうである。ウイスキーがこの試験場でできるようになったら是公がさぞ喜んで飲む事だろう。

陶器を作っている部屋もあつたようだが、これはほんの試験中で、並製も上製もないようであつた。

中央試験所を出て、五六町来ると、馬車を下りて草の中に迷い込んだ。路のない谷へ下りたり、足場のない岡へ上^{のぼ}つたりするので、汗が出て、顔の皮がひりひりして来た。その上胃がしきりに痛む。是公に聞いて見ると、射撃場へ連れて行ってやるんだと云うから、例の連れて行ってやると云う厚意^{めん}に免じて、腹の痛いのを我慢して目的の家まで行ってすぐ椅子^{いす}の上へ腰をかけてしまった。是公がしきりに鉄砲の話をするようであつたが、とんと頭に響かない。何でもこの家だけは会社から寄附してやった。これでも二千円とか三千

円とかかかったという事だけがようやく耳に這入った。

そこへ汚ない支那人が二三人、奇麗な鳥籠を提げてやって来た。支那人て奴は風雅なものだよ。着るものもない貧乏人のくせに、ああやって、鳥をぶら下げて、山の中をまごついて、鳥籠を樹の枝に釣るして、その下に坐つて、食うものも食わずにおとなしく聞いているんだよ。それがもし二人集まれば鳴き競をするからね。ああ実に風雅なものだよ。としきりに支那人を賞めている。余はポケットからゼムを出して呑んだ。

十

政樹公が大連の税関長になつてしていると聞いてちよつと驚いた。政樹公には十年前上海で出逢つたきりである。その時政樹公は、サー・ロバート・ハートの子分になつて、やはりその税関に勤務していた。政樹公の大学を卒業したのは余より二年前で、二人共同じ英文科の出身だから、職業違いであるにかかわらず、比較的縁が近いのである。

政樹公の姓は立花と云つて柳川藩だから、立派な御侍に違ない。それをなぜ立花さんと云わないで、政樹公と呼ぶかと云うに、同じ頃同じ文科に同藩から出た同姓の男

がいた。しかも双方共寄宿舎に這入^{はい}つていたものだから、立花君や立花さんでは紛れ^{まぎ}やすくていけない。で一方は政樹という名だから政樹公と呼び、一方は銑^{せん}三郎という俗称だから銑^{せん}さん銑^{せん}さんと云った。なぜ片^{ひと}つ方が公^{こう}なのに、片^{ひと}つ方はさんづけにされてしまったのか、ちよつと分らない。銑^{せん}さんの方は、余と前後して洋行したが、不幸にして肺病^かに罹^かつて、帰り路に香港^{ホンコン}で死んでしまった。そこで残るは政樹公ばかりになった。したがって政樹公をやめて立花君と云ったつて、少しも混雜はしないのだが、つい立花よりは政樹公の方が先へ出る。やっぱり中村とも総裁とも云わないで是^ぜ公^{こう}と云^いい馴^なれたようなものだろう。

ここだと云うので、二人馬車を下りて税関に這入^{はい}つて見ると、あいにく政樹公は先刻^{さつ}具^き合^あが悪いとかで家^{うち}へ歸^{かへ}つた後であつた。こつちの都合もあるし、所^{しよ}勞^{ろう}の人に迷惑^{めいわく}をかけるのも本意でないから、他日を期して税関を出た。すると今度は馬車が満鉄の本社へ横^{よこ}づけになった。広い階^{はし}子^こ段^{だん}を二階へ上がつて、右へ折れて、突き当りをまた左へ行くと、取^と付^{つき}が重役の部屋である。重役は東京に行つてゐるもののほかは皆出ていた。それに一々紹介^{うち}された。その中で昔^{むかし}見た田中君の顔を覚えていた。どうです始めて大連に御着^ごきになつた時の感想はと聞かれるから、そうです船から上がつてこつちへ来る所は、まるで焼^{やけ}あ

迹とのようじゃありませんかと、正直な事を答えると、あすこはね、軍用地だから建物を拵こしらえる訳に行かないんで、誰もそう云う感じがするんですと教えられた。

しばらく椅子に腰を掛けて、おとなしく執務の様子を見ていると、じき午ひるになった。さあ飯を食おうと、食堂へ案内された。ここへと云う席へ坐つて、サーヴィエツトを取り上げると、給仕が来て、それは国沢さんのですから、ただいま新しいのを持つて参りますと云つた。食堂は社の表二階にあたる大広間で、晩になれば、それが舞踏室に変化するほどの大きなものであつた。これは社員全体に向つて公開してあるのだそうだが、同じ食卓に着いた人の数を云うと、約三十人に過ぎなかつた。この人数にんずから推して、あるいは制限でもありはせぬのかと思つたのは余の想像に過ぎなかつた。

料理は大和ホテルから持つて来るのだそうで、同席の三十余人が、みな一様の皿を平らげていた。胃が痛いので肉刀ナイフと肉匙フォークは人並ひとなみに動かしたようなものの、その実じつは肉も野菜も咽喉のどの奥へ詰め込んだ姿である。一つどうですと向う側の田中君から瓢箪ひょうたん形の西せ洋梨いようなしを勧められた時は、手を出す勇氣すらなかつた。

河村調査課長の前へ行つて挨拶あいさつをすると、河村さんは、まあおかけなさいと椅子を勧めながら、何を御調べになりますかと叮嚀ていねいに聞かれる。何を調べるほどの人間でもないんだから、この間に逢あつた時は実は弱つた。先刻重役室へ河村さんが這入はいつて来たとき、是公ぜこうが余を紹介して、河村さん満鉄の事業の種類その他について、あとでこの男にすっかり説明してやつて下さいと云つたのが本で、とうとう余は調査課へ来るような訳になつたものの、その実世間の知るごとき人間なんだから、こう真面目まじめに、どう云う方面の研究をやる気かと尋ねられるとはなはだ迷まじつてしまふ。そうかと云つて、けつして悪気があつて冷かしに來た次第でない事もまた、世間の知る通りなんだから、河村さんに対して敬意を失するような冗談は云えた義理のものでない。やむをえず、しかつめらしい顔をして、満鉄のやつているいろいろな事業一般について知識を得たいと述べた。——何でも述べたつもりである。固もとより内心に確乎かつこたる覚悟があつて述べる事でないんだから、顔だけはいしつかめらしいが、述べる事の内容は、すこぶる赤毛布式あかげつとしきに縹緲ひょうびょうとふわついていたに違ない。ただ今から顧みて、少し得意なのは、その時余の態度挙動は非常に落ちついて、魂がさも丹田たんてんに膠着こうちやくしているかのごとく河村さんには見えたらうという自覚である。

人を欺^{だま}し終^おせて知らん顔をしているのは善^よくない事だから、ここで全く懺^{ざんげ}悔^{かい}してしまうが、実を云うと、その時は胃がしくしく痛んで、言葉に抑揚をつけようにも、声に張りを見せようにも、身体^{からだ}に活氣^{みな}を漲^{みな}ぎらせようにも、とうてい自己が自己以上に沈着してしまつて、一寸もあがきが取れなかつたのである。

そこへ大きな印刷ものが五六冊出て来た。一番上には第一回營業報告とある。二冊目は第二回で、三冊目は第三回で、四冊目は第四回の營業報告に違ない。この大冊子を机の上に置いて、たいていこれで分りますがねと河村さんが云い出した時は、さあ大変だと思つた。今この胃の痛い最中にこの大部の營業報告を研究しなければすまない事になつては、とうてい持ち切れる訳のものではない。余はまだ營業報告を開^あけないうちに、早速一工^{ひとくふ}夫^うしてこう云つた。——私は専門家でないですから、そう詳^{くわ}しい事を調査しても、とても分りますまいと思ひますので、ただ諸君がいろいろな方面でどんな風に働いていられるか、ざあつとその状況を目撃さしていただけばたくさんですから、縦^{じゆう}覧^{らん}すべき箇所を御面倒でもちよつと書いて下さいませんか。

河村さんははあそうですかと、気軽にすぐ筆を執^とつてくれた。ところへどこからか突然妙な小さな男があらわれて、やあと声をかけた。見ると股野義郎^{またのよしろう}である。昔「猫」を書

いた時、その中に筑後の国は久留米の住人に、多々羅三平という崎人がいると吹聴した事がある。当時股野は三池の炭坑に在勤していたが、どう云う間違か、多々羅三平はすなわち股野義郎であると云う評判がぱつと立って、しまいには股野を捕まえて、お多々羅君などと云うものがたくさん出て来たそうである。そこで股野は大いに憤慨して、至急親展の書面を余に寄せて、是非取り消してくれと請求に及んだ。余も気の毒に思ったが、多々羅三平の件をことごとく削除しては、全巻を改板する事になるから、簡潔明瞭に多々羅三平は股野義郎にあらずと新聞に広告しちやいけないかと照会したら、いけないと云つて来た。それから三度も四度も猛烈な手紙を寄こしたあとで、とうとうこう云う条件を出した。自分が三平と誤られるのは、双方とも筑後久留米の住人だからである。幸い、肥前唐津に多々羅の浜と云う名所があるから、せめて三平の戸籍だけでもそつちへ移してくれ。これだけは是非御願するとあつたんで、余はどうとう三平の方を肥前唐津の住人に改めてしまった。今でも「猫」を御読みになれば分る。肥前の国は唐津の住人多々羅三平とちやんと訂正してある。

こう云う訳で余と因縁の浅からざる股野に、ここでひょつくり出逢うとは全く思いがけなかった。しかも、その家へ呼ばれて御馳走になったり、二三日間朝から晩まで懇切に

連れて歩いて貰ったり、昔日の紛議を忘れて、旧歡を暖める事ができたのは望外ぼうがいの仕合である。実を云うと、余は股野がまだ撫順ぶじゆんにいる事とばかり思っていた。

余は大連で見物すべき満鉄の事業その他を、ここで河村さんと股野に、表ひようのような形にこしらえ貰もらった。

十二

腹がしきりに痛むので、寢室へ退いて、長椅子の上に横になっていると、窓を撲うつ雨の音がしだいに繁しげくなつた。これじや舞踏会に行く連中も、だいぶ御苦労様な事になつたものだと思つて、ポツケツトから招待状を出して寝ながら、また眺めて見た。絵葉書ぐらいの大きさの厚紙の一面には、歌麿うたまろの美人が好い色に印刷されている。一面には中村是公同夫人連名で、夏目金之助を招待している。よくこんなものを拵しらえる時間があつたなど感心して、うとうとしかけたところへ、ボーイ頭がしちが来て、ただいま総裁からの電話で、今夜舞踏会へおいでになるか伺うかがえと云う事でございますがと云うから、行かないと返事をしてくれと頼んで、本当に寝てしまった。眼が覺さめたら雨はいつの間にか歇やんで、奇麗きれいな空が

磨き上げたように一色^{ひといろ}に広く見える中に、明かな月が出ていた。余は硝子^{ガラス}越にこの大きな色^{のぞ}を覗いて、思わず是公のために、舞踏会の成功を祝した。

後で本人に聞いて見ると、是公はその夜舞踏の済んだ後で、多数の亜米利加^{アメリカ}士官と共に倶楽部^{クラブ}のバーに繰り込んだのだそうだ。そこで、士官連が是公に向って、今夜の会は大成功であるとか、非常に盛^{さかん}であつたとか、口々に賛辞^{てい}を呈したものだから、是公はやむをえず、大声^{たいせい}を振り絞^{しぼ}つて gentlemen 《ゼントルメン》一と叫んだ。すると今までがやがや云つていた連中が、総裁の演説でも始まる事と思つて、一度に口を閉^とじて、満場は水を打つたように静かになつた。是公は固^{もと}よりゼントルメンの後^{あと}を何とかつけなければならぬ。ところがゼントルメン以外の英語があいにく一言^{ひとこと}も出て来なかつた。英語と云う英語は頭の底^{らがえ}からことごとく酒で洗い去られてしまつてゐるので、仕方なしに、急に日本語に鞍^く換^かをして、ゼントルメンの次へもつてきて、すぐ大いに飲みましよう^{どな}と怒鳴^{どな}つた。ゼントルメン大いに飲みましようは、たいていの亜米利加^{アメリカ}人に通じる訳のものではないが、そこがバーのバーたるところで、ゼントルメン大いに飲みましよう^{どうあげ}とやるや否や、士官連がわあつと云つて主人公を胴^{どう}上^{あげ}にしたそうである。

明治二十年の頃だつたと思う。同じ下宿にごろごろしてゐた連中が七人ほど、江の島ま

で日着^{ひづきひがえ}日歸りの遠足をやつた事がある。赤毛布^{あかげつと}を背負^{しよ}つて弁当をぶら下げて、懷中にはおのおの二十錢ずつ持つて、そうして夜の十時頃までかかつて、ようやく江の島のこつち側^{がわ}まで着いた事は着いたが、思い切つて海を渡るものは誰もなかった。申し合せたように毛布^{けつと}に包^{くる}まつて砂浜の上に寝た。夜中に眼が覺めると、ぽつりぽつりと雨が顔へあたつていた。その上犬が来て真水英夫^{まみずひでお}の脚絆^{きやはん}を啣^{くわ}えて行つた。夜が白んで物の色が灰^{ほのか}に明るくなつた頃、御互^{ほじ}の顔を見渡すと、誰も彼も奇麗^{きれい}に砂だらけになっている。眼を擦^{こす}ると砂が出る。耳を掘^{ほじ}くると砂が出る。頭を搔^かいても砂が出る。七人はそれで江の島へ渡つた。その時夜明けの風が島を繞^{めぐ}つて、山にはびこる樹^きがさあと靡^{なび}いた。すると余の傍^{そば}に立つていた是公が何と思つたものか、急にどうだ、あの樹を見ろ、戦々^{せんせんきようきよう}兢々^{けいけい}としてゐじやないかと云つた。

草木の風に靡^{なび}く様を戦々兢々と真面目^{まじめ}に形容したのは是公が嚆矢^{はしめ}なので、それから当分の間は是公の事を、みんなが戦々兢々と号してゐた。当人だけは、いまだに戦々兢々で差^さ支^しえないと信じてゐるかも知れないんだから、ゼントルメン大いに飲みましようも、この際亜米利加語として士官側に通用したと心得てゐるんだろう。通じた証^{しょうこ}拠^こには胴上にしたじやないかくらい、酔^ようと云いかねない男である。

十三

昨夕は川崎造船所の須田君すだくんからいっしょに晩食ばんめしでも食おうと云う案内があつたが、例のごとく腹が痛むので、残念ながら辞退して、寢室で肉汁ソップを飲んで寝てしまった。朝起きるや否や、もう好かろうと思つて、腹の近所へ神経をやつて、探りを入れて見ると、やツぱり変だ。何だか自分の胃が朝から自分を裏切ろうと工たくんでいるような不安がある。さてどこが不安だろうと、局所を押えにかかると、どこも応じない。ただ曇つた空のように、鈍痛どんつうが薄く一面に広がっている。苦い顔にがをして食堂へ下りて飯をすましてまた室へやへ歸つてぼんやりしていると、河村さんが戸口まで来て、今夜満鉄のものが主人役になつてあなたがた二三名を扇芳亭せんほうていへ招待したいからと云う叮嚀ていねいな御挨拶ごあいさつである。どうもせっかくだが、実はこれこれだと断ると、そうですか、実は総裁も今夜は所労で出られませんと答えて歸られた。

河村君が歸るや否や股野が案内もなくやつて来た。今日は襟えりの開いた着物を着て、ちゃんと白い襯衣シャツと白い襟えりをかけているから感心した。股野と少し話しているところへ、また

御客があらわれた。ボーイの持つて来た名刺には東北大学教授 橋本左五郎^{はしもとさごろう}とあったので、おやと思つた。

橋本左五郎とは、明治十七年の頃、小石川の極樂水^{ごくらくみず}の傍^{そば}で御寺の二階を借りていっしょに自炊^{じすい}をしていた事がある。その時は間代^{まだい}を払つて、隔日に牛肉を食つて、一等米を焚^たいて、それで月々二円ですんだ。もつとも牛肉は大きな鍋^{なべ}へ汁をいっぱい拵^{こしら}えて、その中に浮かして食つた。十銭の牛^{ぎゅう}を七人で食うのだから、こうしなければ食いようがなかったのである。飯^{かま}は釜^{かま}から杓^{しゃく}つて食つた。高い二階へ大きな釜^{かま}を揚^あげるのは難義であつた。余はここで橋本といつしよに予備門^{はい}へ這^{はい}入る準備をした。橋本は余よりも英語や数字において先輩であつた。入学試験のとき代数がむずかしくて途方に暮れたから、そつと隣席の橋本から教えて貰つて、その御蔭^{おかげ}でやつと入学した。ところが教えた方の橋本は見事に落第^{しるこ}した。入学をした余もすぐ盲腸炎^{かか}に罹^{かか}つた。これは毎晩寺の門前へ売りに来る汁粉^{しるこ}を、規則のごとく毎晩食つたからである。汁粉屋は門前まで来た合図に、きつと団扇^{うちわ}をばたばたと鳴らした。そのばたばた云う音を聞くと、どうしても汁粉を食わずにはいられなかつた。したがつて、余はこの汁粉屋の爺^{おやじ}のために盲腸炎にされたと同然である。

その後左五^{のちさご}は——当時余等は橋本を呼んで、左五左五と云つていた。實際彼は岡山の農

家の生れであつた。——左五はその後追試験に及第したにはしたが、するかと思つとまた落第した。そうして、何だ下らないと云つて北海道へ行つて農学校へ這入^{はい}つてしまった。それから独逸^{ドイツ}へ行つた。独逸へ行つて、いつまで経^たつても歸らない。とうとう五年か六年かいた。つまり留学期限の倍か倍以上も向うで暮した事になる、その費用はどうして拵えたものかとんと分らない。

この橋本が不思議にも余より二三月前に満鉄の依頼に応じて、蒙古^{もうこ}の畜産事状を調査に来て、その調査が済んで今大連に歸つたばかりのところへ出つ食わしたのである。顔を見ると、昔から慄^{ひよう}悍^{かん}の相^{そう}があつたのだが、その慄悍^{ひようかん}が今蒙古と新しい關係がついたため、すこぶる活躍している。闖^{ドア}を排^{はい}して這入つて来るや否や、どうだ相變らず頑健^{がんけん}かねと聞かざるを得なかつたくらいである。

十四

ええまあ相變らずでと、橋本は案に相違した落ちつき方である。昔予備門に這入つて及第だとか落第だとか騒いでいた時分にはけつしてこう穏かじゃなかった。彼の鼻の先が反^そ

返^{りかえ}っているごとく、彼は剽^{ひょう}軽^{きん}でかつ苛^{から}辣^{らつ}であつた。余はこの鼻のためによく凹^{へこ}まされた事を記憶している。

その頃は、大勢で猿^{ざる}楽^{がく}町の末^{すえ}富^{とみ}屋^やという下宿に陣取っていた。この同勢は前後を通じると約十人近くあつたが、みんな揃^{そろ}いも揃^{そろ}つた馬鹿の腕白^{わんぱく}で、勉強^{けんきょう}を軽^{けい}蔑^{べつ}するのが自己の天職であるかのごとくに心得^{こころえ}ていた。下読^{かよみ}などはほとんどやらずに、一学期から一学期へ辛^{から}うじて綱渡^{から}りをしていた。英語は教場であてられた時に、分らない訳^{やく}を好い加減につけるだけであつた。数学はできるまで塗^{ボールド}板^ドの前に立っているのを常としていた。余のごときは毎々一時間ぶつ通しに立往生をしたものだ。みんなが代数書を抱えて今日も脚^か氣^けになるかなど云つては出かけた。

こう云う連中だから、大概は級^{しり}の尻^{しり}の方に塊^{かた}まつて、いつでも雑然^{ちんれつ}と陳^{ちん}列^{れつ}されていた。余のごときは、入学の当時こそ芳^は賀^が矢^や一^{いち}の隣に坐っていたが、試験のあるたんびに下落して、しまいには土^ど俵^{ひょう}際^{ざわ}からあまり遠くない所でやつと踏^ふみ込^こんでいた。それでも、みんな得意であつた。級の上にいるものを見て、なんだ点取^{とんしゅ}かと云つて威張^{いば}っていたくらいである。そうして、稍^{やや}ともすると、我々はポテンシャル・エナジーを養うんだと云つて、むやみに牛肉を喰^くつて端^{ポート}艇^こを漕^こいだ。試験が済むとその晩から机を重ねて縁^{えん}側^{がわ}の隅^{すみ}へ積

み上げて、誰も勉強のできないような工夫をして、比較的広くなつた座敷へ集つて腕押をやつた。岡野という男はどこからか、玩具の大砲を買つて来て、それをポンポン座敷の壁へ向つて発射した。壁には穴がたくさん開いた。試験の成績が出ると、一人では恐いからみんなを駆り催して揃つて見に行つた。するとことごとく六十代で際どく引つ掛つてゐる。橋本は威勢の好い男だから、ある時詩を作つて連中一同に示した。韻も平仄もない長い詩であつたが、その中に、何ぞ憂えん席序下算の便と云う句が出て来たので、誰にも分らなくなつた。だんだん聞いて見ると席序下算の便とは、席順を上から勘定しないで、下から計算する方が早分りだと云う意味であつた。まるで御籤みたような文句である。我々はみんなこの御籤にあたつてひやひやしていた。

そのうち下算にも上算にもまるで勘定に這入らないものが、ぽつぽつできて来た。一人消え、二人消えるうちに橋本がいた。是公がいた。こう云う自分もいた。大連では公に逢つて、この落第の話が出た時、是公は、やあ、あの時貴様も落第したのかな。そいつは頼母しいやと大いに嬉しがるから、落第だつて、落第の質が違わあ。おれのは名誉の負傷だと答えておいた。

是公だの、余だの、今の旅順の警視総長だのが落ちながら、ぶら下がっている間に、

左五だけは決然として北海道へ落ち延びたのである。その落第の張本ちようほんとも云うべき彼が、いくら年を取ったって、かほどに慇懃いんぎんになろうとは思ひも寄らぬ事であつた。今日は午後から満鉄の社へ行つて、蒙古旅行に関する話をするんだと云つてゐる。

十五

河村さんの書いてくれた表ひようを見ると、娯楽機関という題目のもとに、倶楽部クラブとか会とか名のつくものが十ばかり並べてある。中にはゴルフ会だの、ヨット倶楽部だのと、名前からして洒落たしゃれのさえ、ちらほら見える。ヨット倶楽部の下に（ただし一艘そう）と括弧かっこで註がついているのは、新設だからまだ一艘しかないという意味なんだろう。

参観すべき場所と云う標題みだしのもとには、山城町やまぎちようの大連医院だの、児玉町こだまちようの従業員養成所だの、近江町おうみちようの合宿所だの、浜町はまちようの発電所だの、何だのかだのみんなで十五六ほどある。なるほどこれでは大連に一週間ぐらいいなければ、満鉄の事業も一通り観みる訳に行かないと云われるはずだ。しかも是公ぜこうは是非共万遍まんべんなくよく観て行かなくっちゃいけないよと命令的に注意するんだから、容易じやない。その上よく観て、何でも気がついた

事があるなら、そう云いなさいと、あたかも余を視察家扱にするんだからなおさら痛み入る。余は手に持った表に一通り眼を通しながら、傍そばにいる股野に、おい少し出て見るかなと云った。股野は固もとより余を連れて、大連中ぐるぐる引き廻す気で来ている。もつとも別段社からつけてくれたという訳じやないんだが、本人の特志で社の用事をすつぽかすりよう了り見けんらしい。そうしていつの間にか、ホテルへ馬車を云いつけている。

余は股野と相乗りで立派な馬車を走らして北公園に行つた。と云うと大層だが、車の輪が五六度回転すると、もう公園で、公園に這入はいつたかと思うと、もう突き抜けてしまった。それから社員倶楽部と云うのに連れて行かれて、謡うたいの先生の月給が百五十円だと云う事を聞いて、また馬車へ乗つて、今度は川崎造船所の須田君の所の工場を外から覗のぞき込んで、すぐ隣の事務所に入つて、須田君に昨日きのうの御礼を述べた。事務所の前がすぐ海で、船渠ドックの中が蒼あおく澄あんでいる。あれで何噸なんトンぐらいの船が這入りますかと聞いたら、三千噸ぐらいまでは入れる事ができますという須田君の答であつた。船渠の入口は四十二尺だとか云つた。余は高い日がともに水の中に差し込んで、動きたがる波を、じつと締めつけているように静かな船渠の中を、窓から見下みおろしながら、夏の盛りに、この大きな石で畳んだ風呂へ這入つて泳ぎ回つたらさぞ結構だろうと思つた。

今度はどこだと股野に聞いて見ると、今度は電気の工場へ行きましようという事である。鉄嶺丸^{てつれいまる}が大連の港へ這入ったときまず第一に余の眼に、高く赤く真直^{まつすぐ}に映じたものはこの工場の煙突であつた。船のものはあれが東洋第一の煙突だと云つていた。なるほど東洋第一の煙突を持つてゐるだけに、中へ這入ると、凄じいものである。その一部分では、天^{てん}井^{じよう}を突き抜いて、青空が見えるようにして、四方の壁を高く積み上げていた。屋根の高さを増す必要があつての事だろうが、青空が煉瓦^{れんが}の上に遠く見えるばかりか、尋常の会話はとうてい聞えないくらいに、恐ろしい音が響いてゐる中に、塵^{ちり}を浴びて立つた時は、妙な心持がした。ある所は足の下も掘り下げて、暗い所にさまさまの仕掛^{しかけ}が猛烈に活動していた。工業世界にも、文学者の頭以上に崇高なものがあるなど感心して、すぐその棟^{むね}を飛び出したくらいである。詮^{せん}ずるに要領はただ凄まじい音を聞いて、同じく凄まじい運動を見たのみである。

股野はその間を馳^かけ回^{まわ}つて、おい誰さんはいないかねと、しきりに技師を探していた。技師は股野に捕^{つか}まるほど閑^{ひま}でなかつたと見えて、とうとう見当らなかつた。

今日は化物屋敷を見て来たと云うと、田中君が笑いながら、夏目さん、なぜ化物屋敷というんだか訳を知っていますかと聞いた。余は固より下級社員合宿所の標本として、化物屋敷の中を一覧したままで、化物の因縁はまだ詮議していなかった。けれども化物屋敷はこれだと云われた時には、うんそうかと云つて、少しも躊躇なく足を踏込んだ。なぜそんな恐ろしい名が、この建物に付纏っているのかと、立ちどまって疑つて見る暇も何もなかった。いわゆる化物屋敷はそれほど陰気にでき上がっていた。でき上つたというと新規に拵えた意味を含んでいるから、この建築の形容としては、むしろ不適當であるかも知れない。化物屋敷はそのくらい古い色をしている。壁は煉瓦だろが、外部は一面の灰色で、中には日の透りそうもない、薄暗い空氣を湛えるごとくに思われた。

余はこの屋敷の長い廊下を一階二階三階と幾返か往來した。歩けば固い音がする。階段を上るときはなおさらこつこつ鳴った。階段は鉄でできていた。廊下の左右はこつこつと部屋で、部屋という部屋は皆締め切つてあつた。その戸の上に、室の所有者の標札がかかっている。烈しい光線に慣れた眼で、すぐその標札を読もうとすると、判然読めないくらい廊下は暗かつた。余はちよつと立ちどまって室の中を見る訳には行かないの

かなと股野に聞いて見た。股野はすぐ持つていた洋杖ステッキで右手の戸をとんと叩たたいた。しかしはいとも、這入はいれとも応こたえるものはなかった。股野はまた二番目の戸をとんと叩いた。これも中はしんとしている。股野は毫げうも辟易へきえきした気色けしきなく無遠慮にそこいら中こつこつ叩いて歩いたが、しまいまで人氣ひとけのする室には打ぶつからなかった。あたかも立ち退たいた町の中を歩いているような感じがした。三階に來た時、細い廊下の曲り角で一人の女が鍋なべで御菜おさいを煮ているのに出逢であった。そこには台所があつた。化物屋敷では五六軒寄つて一つの台所を持つているのだそうだ。御神おかみさん水は上にありますかと尋ねたら、いえ下から汲くんで揚げますと答えた。余はこの暗い町内に、便所がどこにいくつあるか不審に思ったが、つい聞きもせず、女の前を行き過ぎて通ろうとすると、そつちは行きどまりでございまして注意された。道理で真闇まつくらであつた。

田中君の話によると、この建物は日露戦争の当時の病院だとか云う事である。戦争が烈はげしくなつて、負傷者の数が増して来るに従つて、収容した人間に充分の手当ができないばかりでなく、氣の毒ながら見殺しにしなければならない兵士がたくさんにできて、それらの創口きずぐちから出る怨みうらの聲が大連中に響き渡るほど凄すさまじかつたので、その以後はこの一廊ひとつくを化物屋敷と呼ぶようになった。しかし本当だか嘘うそだか実は僕も保証しないと、田中

君自身が笑っていたから、余はなおさら保証しない。

ただ満鉄の重役が始めて大連に渡ったとき、この化物屋敷に陣を構えた事だけは事実である。その時この建物は化物さえ住みかねるほどに荒れ果てて、残焼家屋として、骸骨のごとくに突つ立っていたそうである。陣取った連中は死物狂で、天候と欠乏と不便に対して戦後の戦争を開始した。汽車の中で炭を焚いて死に損なったり、貨車へ乗って、カンテラを点けて用を足そうとすると、そのカンテラが揺ぶれてすぐ消えてしまったり、サイホンを呑むと二三滴口へ這入るだけであとはすぐ氷の棒に変化したり、すべてが探險と同様であつた。

「清野が毛織の襯衣を半ダース重ねて着たのは彼時だよ」

「清野は驚いて、あれつきりやつて来ない」

余は田中君と是公がこんな話をするのを聞いて、つい化物屋敷の事を忘れてしまった。

十七

三階へ上つて見ると豆ばかりである。ただ窓際だけが人の通る幅ぐらの床になつて

いる。余は静かに豆と壁の間をぐるぐる廻つて歩いた。氣をつけないと、足の裏で豆を踏み潰す恐れがある上に、人のいない天井裏を無益に響かすのが苦になったからである。豆は砂山のごとく脚下に起伏している。こちらの端から向うの端まで眺めて見ると、随分と長い豆の山脈ができ上つていた。その真中を通して三力所ほどに井桁に似た恰好の穴が掘つてある。豆はそこから断えず下へ落ちて行つて、平たく引割られるのだそう。時々どさつと音がして、三階の一隅に新しい砂山ができる。これはクーリーが下から豆の袋を背負つて来て、加減の好い場所を見計らつて、袋の口から、ばらに打ち撒けて行くのである。その時はぼうと咽るような煙が立つて、数え切れぬほどの豆と豆の間に潜んでいる塵が一度に踊り上る。

クーリーはおとなしくて、丈夫で、力があつて、よく働いて、ただ見物するのでさえ心持が好い。彼等の背中に担いでいる豆の袋は、米俵のように軽いものではないそうである。それを遥の下から、のそのそ背負つて来ては三階の上へ空けて行く。空けて行つたかと思ふとまた空けに来る。何人がかりで順々に運んでくるのか知れないが、その歩調から態度から時間から、間隔からことごとく一樣である。通り路は長い厚板を坂に渡して、下から三階までを、普請の足場のように拵えてある。彼等はこの坂の一つを登つて来て、その一

つをまた下りて行く。上るものと下りるものが左右の坂の途中で顔を見合せてもほとんど口を利いた事がない。彼等は舌のない人間のように黙々として、朝から晩まで、この重い豆の袋を担ぎ続けに担いで、三階へ上つては、また三階を下るのである。その沈黙と、その規則ずくな運動と、その忍耐とその精力とはほとんど運命の影のごとくに見える。実際立つて彼等を観察していると、しばらくするうちに妙に考えなくなるくらいである。

三階から落ちた豆が下へ回るや否や、大きな麻風呂敷が受取つて、たちまち釜の中に運び込む。釜の中で豆を蒸すのは実に早いものである。入れるかと思うと、すぐ出している。出すときには、風呂敷の四隅を攫んで、濛々と湯気の立つやつを床の上に放り出す。赤銅のような肉の色が煙の間から、汗で光々するのが勇ましく見える。この素裸なクリーリーの体格を眺めたとき、余はふと漢楚軍談を思い出した。昔韓信に股を潜らした豪傑はきつとこんな連中に違いない。彼等は胴から上の筋肉を逞しく露わして、大きな足に牛の生皮を縫合せた堅い靴を穿いている。蒸した豆を藺で囲んで、丸い杵を上から穿めて、二尺ばかりの高さになった時、クリーリーはたちまちこの靴のまま杵の中に這入つて、ぐんぐん豆を踏み固める。そうして、それを螺旋の締棒の下に押込んで、把をぐるぐると廻し始める。油は同時に搾られて床下の溝にどろどろに流れ込む。豆は全くの糟だけ

になつてしまふ。すべてが約二三分の仕事である。

この油が唧筒ポンプの力で一丈四方もあろうという大きな鉄おけの桶に吸上げられて、静しずかに深そうに淀よどんでいるところを、二階へ上がつて三つも四つも覗のぞき込んだときには、恐ろしくなつた。この中に落ちて死ぬ事がありますかと、案内に聞いたら、案内は平氣な顔をして、まあ滅多めったに落ちるような事はありませんねと答えたが、余はどうしても落ちそうな氣がしてならなかつた。

クーリーは實にみごとに働きますね、かつ非常に静肅だ。と出がけに感心すると、案内は、とても日本人には真似まねもできません。あれで一日五六錢で食っているんですからね。どうしてああ強いのか全く分りませんと、さも呆あきれたように云つて聞かせた。

十八

股野が先生私の宅うちへ来なさらんか、八畳の間が空あいています、夜具も蒲団ふとんもあります。ホテルにいるより呑氣のんきで好いでしょうと親切に云つてくれる。何でも股野の家の座敷からは、大連が一目に見渡されるのみならず、海が手に取るように眺められるのみならず、海

の向うに連なる突兀極まる山脈さえ、坐っていると、窓の中に向うから這入つて来てくれるという重宝な家なんだそうである。

始めのうちは股野の自慢を好加減に聞き流して、そうかそうかと答えていたが、せつかくの好意ではあるし、もともと気の多い男だから、都合によつては少し厄介になつても好いぐらいに思つて、ついでの時は公にこの話をする、そんな所へ行つちやいかんとたちまち叱られてしまった。もしホテルが厭なら、おれの宅へ来い、あの部屋へ入れてやるからと云うんで、書齋の次の畳の敷いてある間を見せてくれるんだが、別に西洋流の宿屋に愛想をつかした訳でもないんだから、じゃ厄介になろうとも云わなかつた。

是公は書齋の大きな椅子の上に胡坐をかいて、河豚の干物を嚙つて酒を呑んでいる。どうして、あんな堅いものが胃に収容できるかと思うと、実に恐ろしくなる。そうこうする内に、おいぜムを持つているなら少しくれ、何だかおれも胃が悪くなったようだと言を出した。そうして、胃が悪いときは、河豚の干物でも何でも、ぐんぐん喰つて、胃病を驚かしてやらなければ駄目だ。そうすればきつと癒ると云つた。酔つていたに違ない。

余はポケットから注文の薬を出して相手にあてがった。これは二三日前は公といつしよに馬車に乗つて、市中を乗り廻した時、是公の御者から二十錢借りて大連の薬屋で買

ったものである。その時は是公の御者に対する態度のすこぶる叮嚀ていねいなのに気がついて少しく驚かされた。君ちよつとそこいらの薬屋へ寄つて、ゼムを買つてやつて下さいと云うんだから非凡である。

君は御者に対して叮嚀過ぎるよと忠告してやつたら、うんあの時の二十銭をまだ払わなかつたつけないと思ひ出したように河豚の干物をまた嚙かつていた。

是公の御者には廿銭かり借があるだけだが、その別当べつとうに至つては全く奇抜である。第一日本人じやない。辮べんぱつ髪を自慢そうに垂らして、黄色の洋袴ズボンに羅紗ろしゃの長靴はを穿はいて、手に三尺ほどの払子ほうすをぶら下げている。そうして馬の先へ立つて駆かける。よくあんな紳士的な服な装りをして汗も出さずに走かけられる事だと思ふくらいに早く走ける。もつとも足も長かつた。身の丈たけは六尺近くある。

別当と御者はこのくらいにしてまた股野にかえるが、余は是公に叱られたため、とうとう股野の家へは移らなかつた。けれども遊びには行つた。なるほど小山の上に建てられた好い杜宅である。もつとも一軒立いっけんだてではない。長い棟むねがいくつも灰色に並んでいるうちの一番はずれの棟の、一番最後の番号のその二階が彼の家族の領分であつた。岡の下から見ると、まるで英国の避暑地へ行つたようだとある西洋人が評したほど、外部は厚い壁で洋

式にできているが、中には日本の香においがする奇麗きれいな畳が敷いてあつた。なるほど景色けしきが好い。大連の市街が見える、大連の海が見える、大連の向うの山が見える。股野の家にはもつたないくらいである。余はそこで村井君に逢あつて、股野の細君に逢つて、手厚い御馳走ごちそうになつて歸つた。

十九

支那の宿屋を一つ見ましようと言いながら、股野は路の左側にある戸を開けて中へ這入はいつた。そこには日本人が三人ほど机を並べて事務を執とつていた。股野はそのうちの紺こんの洋服を着た人を捕つかまえて、話を始めた。君ここは宿屋だろうと聞いている。宿屋じゃないよと立ちながら返事をしている。何だか様子が変になつて来た。やがて余はこの紺服の人に紹介された。紹介されて見ると、これは商業学校出の谷村君で、無論旅屋やどやの亭主ではなかつた。谷村君はこの地で支那人と組んで豆の商売を営んでいる。したがつて取引上の必要があつて、奥の方から大連へ出て来る豆の荷主にぬしと接触しなければならぬのだが、こつちの習慣として、こう云う荷主はけつして普通の旅籠はたごを取らない。出て来ればきつと取引先

へ宿^{とま}つて、用の済むまではいつまでもそこに滞在している。しかもその数は一人や二人ではない。したがって谷村君の奥座敷は一種の宿屋みたような組織にできている。

じゃその奥座敷をちよつと拝見できますかと云うと、谷村君はさあさあと自分から席を離れて、快よく案内に立たれる。余は谷村君の後^{うしろ}へ追^ついて事務室の裏へ出た。股野も食付^{くつつ}いて出た。裏は真四角な庭になっている。無論樹^きも草も花も見当らない、ただの平たい場所である。そこを突き抜けた正面の座敷が応接間であつた。応接間の入口は低い板間^{いたま}で、突当りの高い所に蒲団^{ふとん}が敷いてある。その上に腰をかけて談判をするのだそうだが、横着な事には大きな括^{くくり}枕^{まくら}さえ備えつけてある。しかし肱^{ひじ}を突くためか、頭を載^のせるためかは聞き糺^{ただ}して見なかつた。彼等は談判をしながら阿片^{あへん}を飲む。でなければ煙草^{たばこ}を吸う。その煙管^{きせる}は煙管と云うよりも一種の器械と評した方が好いくらいである。錫^{すず}の胴^{どう}に水を盛つて雁^{がん}首^{くび}から洩^もれる煙がこの水の中を通して吸口まで登ってくる仕掛なのだから、慣れないうちは水を吸い上げて口中へ入れる恐れがある。一服やって御覧なさいと勧められたから、やって見たが、ごぼごぼ音がしてまるで脂^{やに}を呑むような心持がした。

二階が荷主^{へや}の室^{むろ}だと云うんで、二階へ上^あつて見ると、なるほど室がたくさん並んでいる。その中^{うち}の一つでは四人で博奕^{ばくち}を打っていた。博奕の道具はすこぶる雅^がなものであつた。

厚みも大きさも将棋しょうぎの飛車角ひしゃかくぐらいに当る札を五六十枚ほど四人で分けて、それをいろいろに並べかえて勝負を決していた。その札は磨いた竹と薄い象牙ぞうげとを背中合せに接ついだもので、その象牙の方にはいろいろの模様が彫刻してあった。この模様の揃った札を何枚か並べて出すと勝になるようにも思われたが、要するに、竹と象牙がぱちぱち触れて鳴るばかりで、どこが博奕なんだか、実はいつこう解らなかつた。ただこの象牙と竹を接ぎ合あわした札を二三枚貰もらつて来たかつた。

一つの室では五六人寄つて、そのうちの一人が笛ふえを吹くのを聞いていた。幕を開けて首を出したら、ぱたりと笛を歇やめてしまった。また吹き始めるかと思つて、しばらく室の中に立たつていたが、とうとう吹かなかつた。室の中には妙な書が麗々と壁に貼はりつけてある。いずれも下手まずいものののに、何々先生のために何々書すと云つたようにもったいぶつたのばかりであつた。股野が何か云うと、向うの支那人も何か云う。しかし両方の云う事は両方へ通とじないようである。

波止場はとばから上あがつて真直まつすぐに行くと、大連の町へ出る。それを真直に行かずに、すぐ左へ折れて長い上屋うわやの影を向うへ、三四町通り越した所に相あい生おいさんの家がある。西洋館の二階を客間にして古い仏像やら鏡やら銅器陶器の類たぐいを奇麗きれいに飾っているから、客間を見ただけではただ一通りの風流人としか見えない。相生さんは満鉄の社員として埠頭ふとう事務所じむしょの取締である。

もつと卑近な言葉で云うと、荷物の揚あげ卸おろしに使われる仲仕なかしの親方をやっている。かつて門司の労働者が三井に対してストライキをやったときに、相生さんが進んでその衝に当たったため、手際てぎわよく解決が着いたとか云うので、満鉄から仲仕の親分として招しょう聘へいされたようなものである。実際相生さんは親分おやぶん氣質かたぎにでき上っている。満鉄から任用の話があつたとき、子供が病気で危篤きしこくであつたのに、相生さんはさつきと大連へ来てしまった。来て一週間すると子供が死んだと云う便りたよがあつた。相生さんは内地を去る時、すでにこの悲報を手にする覚悟をしていたのだそうだ。

相生さんは大連に来るや否や、仲仕その他すべて埠頭に関する事務を取り扱う連中を集めてここに一部落を築き上げた。相生さんの家を通り越すと、左右に並んでいる建物は皆自分の経営になつたものばかりである。その中には図書館がある。倶楽部クラブがある。運動場

がある。演武場がある。部下の住宅は無論ある。

倶楽部では玉を突いていた。図書館には沙翁全集があつた。ポルグレーヴの経済字彙があつた。余の著書も二三冊あつた。

ここは柔道の道場に使つていますが、時によると講談をやったり演説をやったりしますと云う相生さん自身の説明について、中を覗き込むと、なるほど道場にはちようど好い建物がある。その奥に高座ができていて、いつでも寄席もしくは講演を開くような設備もある。講演でどんな講演ですかと聞き返したら、相生さんは、まあ内地から来られた人だと何とかいうのを頼んでやりますと答えられた。ことによると、遠からぬうちに捕まつて、ここへ引つ張り出されはしまいかと、その時すぐ気がついたが、真逆私はどうぞ廃しにして下さいと、頼まれもしないうちに断るのも失礼だと思つて、はあなるほどと首肯して通り過ぎた。

最後にもつとも長い二階建の一棟の前に出た。これが共同生活をやらしている所で、相生さんが先へ這入る。中は勸工場のように真中を往来にして、同く勸工場の見世に当る所を長屋の上り口にしてある。だから長屋と長屋とは壁一重で仕切られながら、約一

丁も並んでいるばかりか、三尺の往来を越すとすぐ向うの家になる。上り口を枕にして寝れば、吸付^{すいつけたばこ}蓆^{しじ}のやり取りぐらいはできるほど近い。相生さんが先へ立って、この狭い往来を通ると、裁縫^{しじと}をしたり、子供を寝かしたりしている神さん達が、みんな叮嚀^{ていねい}に挨拶^{あいさつ}をする。しかし中には気がつかずに何か話しているのも見える。

この部落に住んでいる人間が総^{そう}がかりになった上に、その何十倍か何百倍のクーリーを使つても、豆の出盛り^{でさか}には持て余すほど荷が後から後からと出てくる。相生さんの話によると、多い時は着荷^{ちやくに}の量が一日ならし五千噸^{トン}あるそうである。これがため去年雨期^{うき}を持ち越した噸数は四万噸で、今年^{こんねん}はそれが十五万噸に上^{のぼ}ったとか聞いた。

南北千五百尺東西四千二百尺の埠頭^{ふとう}の側^{そば}にこのくらい豆を積んだらういぶん盛^{さかん}なものだろう。

二十一

旅順から電話がかかってこつちへはいつ来るかという問合わせである。おい誰がかけてくれるんだろうなと橋本に聞いて見ると、橋本はそうだなあと云うだけで要領を得ない。

おい名前は分らないのかとやむをえずボイに尋ね返したら、ボイは依然として、ただ民政署だいしよと云つてかけて参りましたと同じ事を繰返している。おかた友熊ともくまだろうぐらいに橋本と二人で見当をつけて返事をさせた。これが白仁長しらにちようかん官の好意から出た聞き合せであつた事は旅順に着いて後始のちめて知つた。

旅順には佐藤友熊と云う旧友があつて、警視総長と云う厳いかめしい役を勤めている。これは友熊の名前が広告する通りの薩州さつしゅうじん人で、顔も氣質も看板のごとく精悍せいかんにでき上がっている。始めて彼を知つたのは駿河台するがだいの成立学舎という汚きたない学校で、その学校へは佐藤も余も予備門に這入はいる準備のために通学したのであるからよほど古い事になる。佐藤はその頃筒袖つつそでに、脛すねの出る袴はかまを穿はいてやつて来た。余のごとく東京に生れたものの眼には、この姿がすこぶる異様に感ぜられた。ちやうど白虎隊びやつこたいの一人が、腹を切り損なつて、入学試験を受けに東京に出たとしか思われなかつた。教場へは無論下駄げたを穿はいたまま上つた。もつともこれは佐藤ばかりじやない。我等もことごとく下駄げだのままあがつた。上草履うわぞうりや素足すあしで歩くような学校じやないのだから仕方がない。床ゆかに穴が開あいていて、気をつけないと、縁の下へ落ちる拍子ひょうしに、向脛むこうすねを摺剥すりむくだけが、普通の往来より悪いぐらゐのものである。

古い屋敷をそのまま学校に用いているので玄関からがすでに教場であつた。ある雨の降る日余はこの玄関に上つて時間の来るのを待つてしていると、黒い桐油とうゆを着て、饅頭まんじゅう笠がさを被つた郵便脚夫が門から這入つて来た。不思議な事にこの郵便屋が鉄瓶てつびんを提さげている。しかも全くの素足である。足袋たびは無論の事、草鞋わらじさえ穿はいていない。そうして、普通なら玄関の前へ来て、郵便と大きな声を出すべきところを、無言のまますたすた敷台から教場の中へ這入はいつて来た。この郵便屋がすなわち佐藤であつたので大いに感心した。なぜ鉄瓶を提さげていたものかその理由わけは今日こんにちまでついに聞く機会がない。

その後佐藤は成立学舎の寄宿へ這入ごつた。そこで賄征伐まかないをやつた時、どうした機勢はすみか額きんに創きずをして、しばらくの間白布しろぬので頭を巻まいていたが、それが、後鉢巻うしろはちまきのようにいかにも勇ましく見えた。賄なぐに擲なられたなど調戯からかつて苛ひどい目に逢あつたので今にその颯爽さつそうたる姿を覚えている。

佐藤はその頃頭に毛とほしの乏はげい男であつた。無論老朽した禿はげではないのだが、まあ土質どしつの悪い草原のように、一面に青々とは茂らなかつたのである。漢語でいうと短髮たんぱつしやうしやう種々とも形容したら好いのかも知れない。風が吹けば毛の方で一本一本に靡なびく傾かたむがあつた。この頭は予備門へ這入つても黒くならなかつた。それで皆みんなして佐藤の事を寒雀かんすずめ寒雀はやと囀はや

していた。当時余は寒雀とはどんなものか知らなかった。けれども佐藤の頭のようなものが寒雀なんだろうと思つて、いっしょになつてやつぱり寒雀寒雀と調戯^{からか}つた。この渾名^{あだな}を發明した男はその後技師になつて今は北海道にいる。

話が前後するようだが、旅順に来て十何年ぶりに佐藤に逢つて、例の頭を注意して見ると、不思議な事に、その頭には万遍^{まんべん}なく綿密に毛が生えていた。もつとも黒いのばかりではなかった。近頃は正当防禦^{ぼうぎよ}のために、こう短く刈つているんだと云つて、三分刈の濃い頭を笑いながら搔^かいて見せた。

旅順から二度目の電話がかかつた翌日の朝、橋本と余は、この旧友に逢うため、また日露の戦跡を觀^みるため、大連から汽車に乗つた。乗る時、是公^{ともくま}が友熊^{ともくま}によろしくと云つた。是公は何か用事があつたと見えて、国沢君と二人で停車場^{ステーション}の構内を横切つて妙な方角へ向いて歩いて行つた。やがて二人の影は物に遮^{さへ}ぎられて、汽車の窓から見えなくなった。そうして満洲に有名な高梁^{こうりょう}の色が始めて眼底に映じ出した。汽車は広い野の中に出たのである。

おい旅順に着いたら久しぶりに日本流の宿屋へ泊ろうかと橋本に相談を掛けるとそうだな浴衣ゆかたを着てごろごろするのも好いねという同意である。橋本は新しく蒙古から帰ったので、しきりに支那宿に降参した話を始めた。その支那宿には、名は塞北さいほくに馳せは、味は江南を圧すなどという広告の文字がべたべた壁に貼はりつけてあるそうだ。橋本はこう云う文句をたくさん手帳に控えている。ほかに使い路のない文句だものだから、汽車の中で、それを残らず余に読んで聞かせてしまった。二人は笑いながら日本流の奇麗きれいな宿屋を想像して旅順のプラットフォームに降りた。降りるとそこに馬車がある。我々の名前を聞くものがある。

この馬車が民政署の馬車で、我々を尋ねてくれた人が、渡辺わたなべ秘書ひしょであるという事を発見した時は兩人ともだいぶ恐縮した。橋本を振り返ると相変らず鼻の先を反そらして、台湾パナマだか何だかペコペコになった帽子を被かぶっている。おい宿屋はどうするんだいと小さな声で聞くと、うんそうさなと云ったが、そのうち二人とも馬車へ乗らなければならぬ段になった。いったい橋本といつしよにあるくときは、何でも橋本が進んで始末をつけてくれる事に昔からきまつているんだからこの際もどうかするだろうと思つて放つておいた。

すると予想通、日本流の宿屋へ行くつもりで来たんですがと渡辺さんに相談し始めた。ところが渡辺さんはどうも御泊りになられるような日本の宿屋は一軒ありませんから、やっぱり大和ホテルになさった方が好いでしょうと忠告している。

やがて馬車は新市街の方へ向いて動き出した。二人は十五分の後ホテルの二階に導かれて、行き通いのできる室を二つ並べて取った。そこで革靴の中から刷毛を出して塵だらけの服を払ったあとで、しばらく休息のため安楽椅子に腰をおろして見ると、急に気がついたように四辺が森閑としている。ホテルの中には一人も客がいないように見える。ホテルの外にもいつさい人が住んでいるようには思われない。開廊へ出て往来を眺めると、往来はだいぶ広い。手摺の真下にある人道の石の中から草が生えて、茎の長さが一尺余りになったのが二三本見える。日中だけれども虫の音が微かに聞える。隣は主のない家と見えて、締め切った門やら戸やらに蔦が一面に絡んでいる。往来を隔てて向うを見ると、ホテルよりは広い赤煉瓦の家が一棟ある。けれども煉瓦が積んであるだけで屋根も葺いてなければ窓硝子もついてない。足場に使った材木さえ処々に残っているくらいのは半建である。淋しい事には、工事を中止してから何年になるか知らないが、何年になって

もこのままの姿で、とうてい変る事はあるまいと云う感じが起る。そうしてその感じが家

にも往来にも、美しい空にも、一面に充ちている。余は開廊の手摺を掌で抑えながら、奥にいる橋本に、淋しいなあと云った。旅順の港は鏡のごとく暗緑に光った。港を囲む山はことごとく坊主であつた。

まるで廃^{ルインズ}墟だと思ひながら、また室の中に這入ると、寢床には雪のような敷布がかかつてゐる。床には柔かい絨毯が敷いてある。豊かな安樂椅子が据えてある。器物はことごとく新式である。いっさいが整つてゐる。外と内とは全く反対である。満鉄の経営にかかるこのホテルは、固より算盤を取つての儲け仕事でないと云う事を思い出すまでは、どうしても矛盾の念が頭を離れなかつた。

食堂に下りて、窓の外に簇がる草花の香を嗅ぎながら、橋本と二人静かに午餐の卓に着いたときは、機会があつたら、ここへ来て一夏気楽に暮したいと思つた。

二十三

旅順に着いた時汽車の窓から首を出したら、つい鼻の先の山の上に、円柱のような高い塔が見えた。それがあまり高過ぎるので、肩から先を前の方へ突き出して、窮屈に仰向か

なくては頂^{てっぺん}点^{てん}まで見上げる訳に行かなかつた。

馬車が新市街を通り越してまたこの塔の真下に出た時に、これが白^{はく}玉^{ぎよく}山^{さん}で、あの上の高い塔が表忠塔だと説明してくれた。よく見ると高い灯台のような恰^{かつ}好^{こう}である。二百何尺とかと云う話であつた。この山の麓^{ふもと}を通り越して、旧市街を抜けると、また山路にかかる。その登り口を少し右へ這^{はい}入^いつた所に、戦利品陳列所がある。佐藤は第一番にそれを見せるつもりで両^{ふたり}人を引張^ひつて來た。

陳列所は固^{もと}より山の上の一軒家で、その山には樹^きと名のつくほどの青いものが一本も茂^さつていないのだから、はなはだ淋^{さび}しい。当時の戦争に従事したと云う中尉のA君がただ独^{ひと}り番^{ばん}をしている。この尉官は陳列所に幾十種となく並べてある戦利品について、一々町^{ていね}嚙^いに説明の勞を取^とつてくれるのみならず、両人を鷄冠^{けいかん}山^{さん}の上まで連れて行^いつて、草も木もない高い所から、遙^{はるか}の麓^{ふもと}を指さしながら、自分の従軍当時の実^{じつ}歴^{れき}譚^{だん}をことごとく語^{かた}つて聞かせてくれた人である。始め佐藤から砲台案内を依頼したときには、今日はちと差^さ支^さえがあるから四時頃までならと云う条件であつたが、山の出鼻へ立つて洋^{サー}剣^{べル}を鞭^{むち}の代りにして、あちらこちらと方角を教える段になると、肝^{かん}心^{しん}の要事はまるでそつちのけにして、満洲の赤い日が、向うの山^いの頂^{ただき}に、大きくなつて近づくまで帰ろうとは云わな

った。もし忘れたんじや氣の毒だと思つて、こつちから注意すると、何ようございます、構いませんと断りながら、ますます講釈をしてくれる。あんまり不思議だから、全体何の御用事が御有りなのですかと、詮索^{せんさく}がましからぬ程度に聞いて見ると、実は妻^{さい}が病気でと云う返事である。さすが横着な兩人も、この際だけは、それじや御迷惑でもせつかくだからついでにもう少し案内を願おうと云う氣にもなれなかつた。言葉は無論出なかつた。長い日が山の途中で暮れて、電氣の力を借りなければ人の顔^{はつきり}が判然分らない頃になつて、我々の馬車がようやく旧市街まで戻つた時、中尉はある煉瓦^{れんが}塀^{べい}の所で、それじや私はここで失礼しますと挨拶^{あいさつ}して、馬車から下りて、門の中へ急いで這入つて行かれた。この煉瓦^{れんが}の塀^{べい}を回^{めぐ}らした一構^{ひとかまえ}は病院であつた。そうして中尉の妻君はこの病院の一室に寝ていたのである。

これほど世話になり、面倒を掛けた人の名前を忘れるのははなはだすまん事だが、どうしても思ひ出せない。佐藤に、よろしくと伝言を頼んだ時は、ただ、あの中尉君と書いたここに某中尉^{ぼうちゆうい}などとよそよそしく取り扱うのはあまり失礼だから、やむをえずA君としておいた。

A君の親切に説明してくれた戦利品の一々を叙述したら、この陳列所だけの記載でも、

二十枚や三十枚の紙数では足るまいと思うが、残念な事にたいてい忘れてしまった。しかしたった一つ覚えているものがある。それは女の穿いた靴の片足である。地が縹子で、色は薄鼠であつた。その他の手投弾や、鉄条網や、魚形水雷や、偽造の大砲は、ただ単なる言葉になつて、今は頭の底に判然残っていないが、この一足の靴だけは色と云い、形と云い、いつなん時でも意志の起り次第鮮に思い浮べる事ができる。

戦争後ある露西亞の士官がこの陳列所一覽のためわざわざ旅順まで来た事がある。その時彼はこの靴を一目観て非常に驚いたそうだ。そうしてA君に、これは自分の妻の穿いたものであると云つて聞かしたそうだ。この小さな白い華奢な靴の所有者は、戦争の際に死んでしまったのか、またはいまだに生存しているものか、その点はい聞き洩らした。

二十四

今までは白馬を着けた佐藤の馬車に澄まして乗っていたが、山へかかるや否や、例の泥だらけの掘出しものの中へ放り込まれてしまった。とうてい普通の馬車では上がれない

と云うんだからやむをえない。それでも露西亞人^{ロシアじん}だけあって、眼にあまる山のことごとくに砲台を構えて、その砲台のことごとくに、馬車を駆^かつて頂^{てつ}辺^{べん}まで登れるような広い路^{みち}をつけたのは感心ですとA君が語られる。實際その当時は奇麗^{きれい}な馬車を傷^{いた}めずに、心持よく砲台のある地点まで乗りつけられたものと見える。ところが戦争がすんで往復の必要がなくなつたので、せっかくできた山路に手を入れる機会を失つたため、我々ごとき物数^{ものずき}奇は、かように零落^{れいらく}した馬車をさえ、時々復活させる始末になるのである。元来旅順ほど小山^{よも}が四方^{かつきよ}に割^き拠^よして、禿頭^{さくら}を炎天^あに曝^{さら}し合っている所はない。樹^きが乏^{どしつ}しい土質^{どしつ}へ、遠慮^{ごうりう}のない強雨^{ごうりう}がどつと突き通ると、傾斜^{けいさ}の多い山路の側面^{かてん}が、すぐ往来^{かうらい}へ崩^{くず}れ出す。その崩れるものがけつして尋常^{じんじょう}の土じやない。堅^{かた}い石である。しかも頑固^{がんこ}に角張^{かくは}っている。ある所などは、五寸から一尺ほどもあろうと云う火打石のために、累々^{るいり}と往来^{かうらい}を塞^{ふさ}がれてゐる。零落^{れいらく}した馬車は容赦^{めいじょう}なく鳴^{めい}動^{どう}してその上を通るのだから、凸凹^{でこぼこ}の多い川床^{かわどこ}を渡るよりも危険である。二百三高地^{にひやくさんこうち}へ行く途中などでは、とうとうこの火打石に降参して、馬車から下りてしまった。そうして痛い腹^{あがき}を抱^{かか}えながら、膏汗^{あぶらあせ}になつて歩いたくらいである。鷄冠^{けいかん}山を下りるとき、馬の足搔^{あがき}が何だか変になつたので、気をつけて見ると、左の前足の爪の中に大きな石がいつぱいに詰^{はま}つていた。よほど厚い石と見えて爪から

余った先が一寸^{いっすん}ほどもある。したがって馬は一寸^{ちんぱ}がた跛を引いて車体を前へ運んで行く訳になる。席から首を延ばして、この様子を見た時は、安んじて車に乗っているのが気の毒なくらい、馬に対して痛わしい心持がした。御者^{ぎよしゃ}に注意してやると、御者は支那語で何とか云いながら、鞭^{むち}を棄^すてて下へ下りたが、非常に固く詰^{つま}っていたと見えて、叩^{たた}いても引つ張つても石が取れないので、またのそのそ御者台へ上がった。そうして、後^{うしろ}にいる余の方をふりむいて、にやにや笑いながら、また鞭を鳴らし出した。馬も存外平気なもので、そのままとうとう大和^{やまと}ホテルまで帰つて来た。

橋本と余はこう云う馬車の中で、こう云う路の上に揺振^{ゆすぶ}られべく旧市街から出立した。あれがステッセル將軍の家でと云うのを遠くから見ると、なかなか立派にできている。戦争^{はげ}の烈しくならない時は、將軍がみごとな馬車を駆^かつてそこいらを乗り廻しているのが遙^{はるか}の先から見えたそうである。A君の指^{ゆびさ}して教えられた中で、ただ一つ質素な板^{いたがこい}囲^いの小さい家があった。それがまるで日本の内地で見る普通の木造なのだから珍らしかった。何とか云う有名な將軍の住宅だと説明されたが、不幸にしてその有名な將軍の名を忘れてしまった。何でも非常に人望のある人で、戦争のときも一番先に打^{うちしに}死をしたのだそうである。ああ云う質素の家に住んでおられたのも、一つは人望のあった原因になっているので

ありましようとA君は丁寧^{ていねい}に敬慕^{けいぼ}の意を表^{ひょう}される。この將軍は戦争だけには熱心で、ほかの事にはよほど無頓着^{むとんじやく}であつた人らしい。この辺にある露国の將軍などの住宅は皆それが、もとは誰のいた所ですかと聞いたたら、何でもある大佐の家だそうですと答えられた。こう云う家に住んで、こういう景色^{けしき}を眼の下に見れば、内地を離れる賠償^{ばいしょう}には充分なりますねと云つたら、白仁君も笑いながら、日本じやとても這入れ^{はい}ませんと云われたくらいである。

そのうち馬車は無鉄砲^{やまみち}に山路を上つて、旅順の市街を遙の下にうちやるようになった。A君は坂の途中で車を留めて、私は近路を歩いて、御先へ行つて御待ち申しますと云いながら、左手の急な岨路^{そばみち}をずんずん登つて行つた。我々の車はまたのそのそ動き出した。

二十五

下を見下すと、山の側面はそれほど急でないが、樹^きと名のつくような青いものはまるで眸^{ひとみ}を遮^{さへぎ}らない。一眼に麓^{ふもと}まで透^すかされるのみならず、麓からさき一里余の畠^{はたけ}が真直^{まっすぐ}に眉^{まゆ}

の下に集まつて来る。この辺の空氣は内地よりも遙に澄んでいるから、遠くのもの、つい鼻の先にあるように鮮である。そのうちで高粱の色が一番多く眼を染めた。

あの先に、小指の頭のような小さい白いものが見えるでしょう、あすこからこつちの方へ向いて対溝を掘出したのですとA君が遠くの方を指さしながら云った。この辺に穴を掘るのは石を割ると一般なのだから一町掘るのだって容易な事ではない。現に外濠から窖道へ通ずる路をつけるときなどは、朝から晩まで一日働いて四十五サンチ掘ったのが一番の手柄であつたそうだ。

余は余の立つている高い山の鼻と、遠くの先にある白いものを見較べて、その中間に横わる距離を胸算用で割り出して見て、軍人の根気の好いのにごとく敬服した。全体どこまで掘つて来たのですかと聞き返すと、ついそこですと洋剣を向けて教えてくれた。何でも九月二日から十月二十日とかまで掘つていたと云うのだから恐るべき忍耐である。その時敵も砲台の方から反對窖道と云うのを掘つて来た。日本の兵卒が例のごとく工事をしているところでかかん石を割る音が聞えたので、敵も暗い中を一寸二寸と近寄つて来た事が知れたのだと云う。爆発薬の御蔭で外濠を潰したのはこの時の事でありますと、中尉はその潰れた土山の上に立つて我々を顧みた。我々も無論その上に立つて

いる。この下を掘ればいくらでも死骸^{しがい}が出て来るのだと云う。

土山^{ひとすみ}の一隅^{ひとすみ}が少し欠けて、下の方に暗い穴が半分見える。その天^{てん}井^{じょう}が厚さ六尺もあろうと云うセメントででき上っている。身を横にして、その穴に這い込みながら、だらと石の廻廊^{かいろう}に降りた時に、仰向^{あおむ}いて見て始めてその堅固なのに気がついた。外濠^{くす}を崩した上に、この厚い壁を破壊しなければ、砲台をどうする事もできないのは攻手に取つて非常な困難である。しかもこの小さな裂け目から無理に割り込んで、一寸二寸とじりじりにセメントで築上げた窖道^{せんによう}を専^{せん}領^{りょう}するに至つては、全く人間以上の辛抱^{しんぼう}比べに違^{ちが}ない。その時両軍の兵士は、この暗い中で、わずかの仕切りを界^{さかい}に、ただ一尺ほどの距離を取つて戦^{いくさ}をした。仕切は土囊^{どのおう}を積んで作つたとかA君から聞いたように覚えている。上から頭を出せばすぐ撃^うたれるから身体^{からだ}を隠して乱射したそうだ。それに疲れると鉄砲をやめて、両側で話をやつた事もあると云つた。酒があるならくれと強請^{ねだ}ったり、死体の収容をやるから少し待てと頼んだり、あんまり下らんから、もう喧嘩^{けんか}はやめにしようと相談したり、いろいろの事を云い合つたと云う話である。

三人は暗い廻廊を這い出して、また土山の上に立つた。日は透^すき徹^とるように明かるく坊^ぼ主^{うずやま}山を照らしている。野菊に似た小さな花が処々に見える。じつと日を浴びて佇^{たたず}んでい

ると、微かに虫の音がする。草の裏で鳴いているのか、崩れ掛った窖内で鳴いているのか分らなかつた。向うの方に支那人の影が二人見えたが、我々の姿を認めるや否や、草の中に隠れた。ああやって、何か掘りに来るんです。捕まると怖いものだから、すぐに逃げます、なかなか取り抑えるのが困難ですとA君が苦笑した。

後側 うしろがわ

側へ回ると広い空堀の中に立派な二階建の兵舎がある。もとは橋をかけて渡つたものと思われるが、今では下りる事もできない。兵舎の背はもとより、山に囲われて、外からは見えなくなっている。三人は空濠を横に通り越してなお高く上つた。とうとう四方にあるものは山の頭ばかりになった。そうしてそれが一つ残らず昔の砲台であつた。中尉はそれらの名前をことごとく諳んじていた。余は遮るもののない高い空の真下に立つて、数限りもない山の背を見渡しながら、砲台巡りも容易な事ではないと思つた。

二十六

大連に着いてから二三日すると、満洲日々の伊藤君から滞留中に是非一度講演をやつて貰いたいという依頼であつた。ええ都合ができればと受合つたようなまた断つ

たような軽い挨拶あいさつをして旅順に來た。するとその伊藤君が我々より一日前に同じ大和ホ
 テルに泊つていたので、ただ、やあ來ているねぐらいでは事がすまなくなつた。伊藤君の
 話によると、余の承諾を得て講演を開くと云う事を、もう自分の新聞に広告してしまつた
 と云うんだから、たちまち弱つた。どうしてもやらなければならぬように伊藤君は頼む
 し、何だかやれそうもない気分ではあるし、かたがた安樂椅子に尻しりを埋めて、苦にがく渋り出
 した。すると橋本がにやにや笑いながら、まあやつてやるさと傍はたから余計な事を云う。実
 を云うと、講演は馬車でホテルに着くや否や、ここの和木君わきくんからも頼まれてゐる。もつと
 もこの方は暇ぼうがないので、頼たのまれ放ばなしの体ていであるが、大連に帰ればそう多忙らしく見せる
 訳には行かない。橋本はそこをよく見破つてゐるので、君そう云うときには快よく承諾す
 るものだよとか君のような人はやる義務があるさとかいろいろな口を出す。余の大連でし
 やべらせられたのは全くこの男の御蔭おかげである。しかも短い時日のうちに二遍もやらせられ
 た。その内の一遍では、云う事が無くつて仕方がなかつたから、私は今晚、なぜ講演とい
 うものが、そう容易にできるものでないか、すなわち講演ができない訳を講演致しますと
 云つて、妙な事を弁じてしまつた。それを是公ぜこうが聞きに來ていて、うん貴様はなかなか旨うま
 い、これからどこへ出て演説しようと勝手だ、おれが許してやると評したからありがたい。

けれども勧告の本人たる橋本は、平氣な顔をして、どこか遊んで歩いていて聞きに来なかった。そのくせ營口でまた頼まれると早速、君やるさ、せっかく頼むんだものと例の通りやり出したので、やむをえず痛い腹の上にかけていた蒲団ふとんを跳ね退はけて、演説をしに行った。その代りおれが先へやるよと断つて、橋本のは聞かずに、すぐ宿屋へ歸つて来て、また腹の上に蒲団を掛けていた。橋本はこう云うところを見ると、君演説をやつてゐる間は苦しいかなどと氣樂な質問をする。もつとも招待を断つたり何かするときには、いや實際この男は胃病でいつでも証人に立つてくれた。して見ると、橋本はただ演説に對してだけ冷刻れいこくなのかも知れない。奉天でも危うく高い所へ乗せられるところを、一日日取ひとりが狂つたため、いかな橋本にも、君頼まれたときにはやつてやるべきだよを繰返す余地がなかった。京城では発着が前後した上に、宿屋さえ違つたものだから、泰然と講演を謝絶する余裕があった。これは偏ひとえに橋本のいなかった御蔭である。

面白い事に、この演説の勧誘家はその後札ごさつぱら幌へ歸るや否や、自身と烈はげしい胃病に罹かかつて、急に苦しみ出した。それで普通ならば毎週十時間余も講義を持たせられるところを、わずか一時間に減らして貰つて、その一時間が済むとすぐに藥を吞むそうだ。旅行中は君の病氣である事を知りながら、無理に講演を勧めて大いに悪かった。何事も自分で経験し

ないうちは分らぬもので、こうして胃病に悩まされて始めて気がついたが、痛いときに演説などができる訳のものでは、けつしてない。君があの際奮ふるって演壇に立ったのは實際感心である、と大いに褒めたり詫あやまつたりして来た。實際橋本の云う通りである。しかしはたして橋本の推察するほど胃が痛かったら、いかな余も、いくらせつかくだから君出るが好いよを繰返されたつて、ついに講演を断つてしまつたろう。

二十七

白しらに仁さんから正せい餐さんの御馳走ごちそうになつたときは、民政部内の諸君がだいぶ見えた。みんな揃そろつてカーキー色の制服を着ていた。食事が済んで別室へ戻つて話していると佐藤が、あしたは朝のうち二百三高地にひやくさんこうちの方を見たら好かろう、案内を出すからと云つてくれる。余も好かろうと答えた。すると、大した案内にも及ぶまいと笑いながら相談を掛けた。我々は一私人で、ただ遊覧に来たのだから、公おおやけの職務を帯びている人を使つてはすまないが、せつかく案内をつけてくれると云うなら、小使でも何でも構わぬ。非番ひばんか閑散の人を一人世話してくれと頼んだ。これは正直恐れ入った本当の謙遜けんそんである。その時佐藤は懷中

から自分の名刺を出して、端の方に鉛筆で何か書いて、じや明日あしたの朝八時にこの人が来るから、来たらいつしよに行くが好いと云つて分れた。

明日の朝の八時は例いつもの通り強い日が空にも山にも港にも一面に輝いていた。馬車を棄すて山にかかったときなどは、その強い日の光が毛孔けあなから総身そうしんに浸しみこ込むように空氣ちようが澄す徹てつしていた。相変らず樹きのない山で、山の上には日があるばかりだから、眼の向く所は、左右ともに、また前後ともに、どこまでも朗らかである。その明かな足元から、ぱつと音がして、何物だか飛び出した。案内の市川君うずつが鶺鴒うずつですと云つたので始めてそうかと気がついたくらい早く、鶺鴒うずつは眼を掠かすめて、空濶くうかつの中に消えてしまった。その迹あとを見上げると、遙はるかなる大きい鏡である。

その時我々はもう頂いただき近くにいた。ここいらへも砲丸たまが飛んで来たんでしようかと聞くと、ここでやられたものは、多く味方の砲丸自身のためです。それも砲丸自身のためと云うより、砲丸が山へ当って、石の碎けたのを跳ね返かえしたためです。こう云う傾斜かたのはなはだし所ですから、いざと云う時に、すぐ遠くから駆かけ寄せて敵を追おい退のける訳に行きませんので、みんなこう云うところへ平たくなつて嚙かじりついてるのであります。そうして味方の砲丸が眼の前へ落ちて、一度に砂煙すなけむりが揚あがるとその虚きよに乗じて一間か二間ずつ這はい

上がるのですから、勢い砂煙に交る石のために身体中創だらけになるのです。と市川君は詳しい説明を与えられた。

味方の砲弾でやられなければ、勝負のつかないような烈しい戦は苛過ぎると思ひながら、天辺まで上った。そこには道標に似た御影の角柱が立っていた。その右を少しだらだらと降りたところが新に土を掘返したごとく白茶けて見える。不思議な事にはところどころが黒ずんで色が変わっている。これが石油を檻樓に浸み込まして、火を着けて、下から放り抛げたところだと、市川君はわざわざ崩れた土饅頭の上まで降りて来た。その時遙下の方を見渡して、山やら、谷やら、畠やら、一々実地の地形について、当時の日本軍がどう云う径路をとつて、ここへじりじり攻め寄せたかをついでながら物語られた。不幸にして、二百三高地の上までは来たようなものの、どっちが東でどっちが西か、方角がまるで分らない。ただ広々として、山の頭がいくつとなく起伏している一角に、藍色の海が二カ処ほど平たく見えるだけである。余はただ朗かな空の下に立って、市川君の指さす方を眺めていた。

自分でここへ攻め寄せて来た経験をもっている市川君の話は、はなはだ詳しいものであった。市川君の云うところによると、六月から十二月まで屋根の下に寝た事は一度もなか

つたそうである。あるときは水の溜^{たま}った溝^{みぞ}の中に腰^{こし}から下^{しも}を濡^ぬらして何時間でも唇^{くちびる}の色を
変^かえて疎^{すく}んでいた。食事は鉄砲^{てつぽう}を打^うたない時^{とき}を見計^{みは}って、いつでも構^{かま}わず口^{くち}中に運^{うん}んだ。
その食事さえ雨^{あめ}が降^ふって車^{くるま}の輪^{りん}が泥^{どろ}の中に埋^{うま}って、馬^{うま}の力^{ちから}ではどうしても運^{うん}搬^{ぱん}がで
きなかつた事もある。今^{いま}あんな真似^{まね}をすれば一週^{いっしゅう}間^{かん}経^たたないうちに大病^{だいびょう}人^{にん}になるにきまつて
います、医^い者に聞^きいて見^みると、戦^{いくさ}争^{そう}のときは身^{からだ}体^{たい}の組^{くみ}織^{しよく}がしばらくの間^{かん}に變^かつて、全^{ぜん}く
犬^{いぬ}や猫^{ねこ}と同^{どう}様^{よう}になるんだそうですと笑^{わら}っていた。市川^{いちがわ}君^{くん}は今^{いま}旅順^{りょじゅん}の巡査^{じゅんさ}部^ぶ長^{ちやう}を勤^こめてい

二十八

旅順^{りょじゅん}の港^{みなと}は袋^{ふくろ}の口^{くち}を括^{くく}つたように狭^{せま}くなつて外洋^{がいやう}に続^{つづ}いている。袋^{ふくろ}の中^{うち}はいつ見^みても油^{あぶら}
を注^さしたと思^{おも}われるほど平^へらかである。始^はめてこの色^{いろ}を遠^{とほ}くから眺^{なが}めたときは嬉^{うれ}しかった。
しかし水^{みづ}の光^{ひかり}が強^{つよ}く照^てり返^{かへ}して、湾^{わん}内^{ない}がただ一枚^{まい}に堅^{かた}く見^みえたので、あの上^{うへ}を舟^{ふね}で漕^こぎ廻^{まわ}
つて見^みたいと云^いう氣^きは少しも起^おらなかつた。魚^{うしよ}を捕^とる料^{りやう}簡^{けん}は無^む論^{ろん}無^むかつた。露^{ロシ}西^{シア}亜^アの
軍艦^{くわんかん}がどこで沈^{しず}没^{ぼつ}したろうかなどと思^{おも}い浮^うかべる暇^{ひま}も出^でなかつた。ただ頭^{あたま}へぴかぴかと、
平^へたい研^とぎ澄^{すま}したものが映^{うつ}つた。

余は大和ホテルの二階からもこの晴やかな色を眺めた。ホテルの玄関を出たり這入ったりするときにもこの鋭い光の断片に眼を何度となく射られた。それでも単に烈しい奇麗な色と光だなど感ずるだけであつた。佐藤から港内を見せてやるからと案内されるまでは、とうてい港内は人間の這入るところではないくらいに、頭の底で、無意識ながら分別していたらしい。

さあ行くんだと催促された時は、なるほど旅順に来る以上、催促されなければならぬはずの場合へ行くんだと思つた。今日の同勢は朝大連から来た田中君を入れて五人である。港務部を這入るときに水兵がこの五人に礼をした。兵隊に礼をされたのは生れてこれが初めてであつた。佐藤が真先に中へ這入つて、やがて出て来たから、もう舟に乗れるのかと思つたら、おい這入れ這入れという。我々は石垣の上に立っていた。足元にはすぐ小蒸氣が繋いである。我々の足は、家の方より、むしろ水の方に向いていた。

十分の後五人はまた河野中佐といつしよに家を出てすぐ小蒸氣に移つた。海軍の将校が下士や水兵を使うのは実に簡潔明瞭である。船は河野中佐の云いなり次第の速力で、思う通りの方角へ出た。港の入口ではここかしこの潜水器へ船の上から空気を送っている。船の数は十艘近くあつた。みんな波に揺られて上つたり下つたりしている。我々五人のも

固より平ではない。鏡のように見えた湾の入口がこうまで動いているとは思いがけなかった。波で身体の調子が浮いたり沈んだりする上に、強い日が頭から射りつけるので、少し胸が悪くなった。河野さんは軍人だから、そんな事に氣のつくはずがない。ああ云う唧筒で空気を送るのは旧式でね、時々潜水夫を殺してしまいますよと講釈をしている。田中君はふうんとさも感心したらしく聞いている。

河野さんの話によると、日露戦争の当時、この附近に沈んだ船は何艘あるかわからない。日本人が好んで自分で沈めに來た船だけでもよほどの数になる。戦争後何年かの今日いまだに引揚げ切れないところを見てもおおよその見当はつく。器械水雷などになるとこの近海に三千も装置したのだそうだ。

じゃ今でも危険ですねと聞くと、危険ですともと答えられたのであるほどそんなものかと思つた。沈んだ船を引揚げする方法も聞いて見たが、これは委しく覚えてゐる、百キロぐらいな爆発薬で船体を部分部分に切り壊して、それを六時の針金で結えて、そうして六百噸のブイアンシーのある船を、水で重くした上、干潮に乗じて作事をしておいて、それから満潮の勢いと唧筒の力で引き揚げのだそうだ。しかし我々が眺めていた時は、いつまで立つても、何も揚つて來そうになかった。

港の入口は左右から続いた山を掘り割ったように岸が聳^{そび}えていて、その上に砲台がある。あすこから探^{たん}海^{かい}灯^{とう}で照らされると、一番困る。まるで方角も何も分らなくなってしまうと河野さんが高い処を指さした。

やがて小蒸気は煙りを逆に吐いて港内に引返した。戦闘艦が並んで撃沈されたという前を横に曲つてまた元の石垣^{もと}の下へ着いた。向う岸には戦利品のブイや錨^{いかり}がたくさん並んでいる。あれで約三十万円の価格ですと河野さんが云った。門の出口には防^{ぼう}材^{ざい}の標本が一本寝かしてあった。その先から尖^{とが}った剣^{けん}のようなものが出ていた。

二十九

風呂を注文しておいたら、用意ができたと見えて、向うの部屋で、湯の迸^{ほと}びしる音が盛^{さかん}にする。靴を脱いで、スリッパをつつかけて、戸を開けに掛ると、まだ廊下に出ないうちに給仕がやって来た。田中さんがいっしょにスキ焼を食べにいらつしやいませんかと云う案内である。スキ焼の名はこの際兩人に取って珍らしい響がした。けれども白状すると、毫^{ごう}も食う気にはならなかった。スキ焼って家^{うち}で拵^{こしら}えるのかいと尋ねると、いえ近所の料理

屋ですと云う。近所の料理屋はスキ焼よりも一層不思議な言葉である。ホテルの窓から往来を一日眺めていたって、通行人は滅多に眼に触れないところである。外へ出て広い路を岡の上まで見通すと、左右の家は数えるほどしか並んでいない。そうしてそれがごとごとく西洋館である。しかも三分の一は半建のまゝ雨露に曝されている。他の三分の一は空家である。残る三分の一には無論人が住んでいる。けれどもその主人はたいてい月給を取って衣食するものとしか受け取れない構である。新市街という名はあるにしても、その実は閑静な寂れた屋敷町に過ぎない。その屋敷のどこにスキ焼を食わす家があるかと思うと、一種小説に近い心持が起る。

ただ、昼の疲れを忘れるため、胃の不安を逃れるため、早く湯に入って、レースの蚊帳の中で、穩かに寝たかった。そこで給仕に、今湯に這入りかけているからね、少し時間が取れるかも知れないから、田中さんに、どうか御先へと云ってくれと頼んだ。すると傍にいる橋本が例のごとく、そりやいかんよと云い出した。せっかく誘ってくれるものを、そんな挨拶をする法はないぜと、また長い説教が始まりそうで恐ろしくなつたので、仕方がないからうんよしよし、それじゃあね、今湯に這入っていますから、すぐ行きますってそう云ってくれ、よく云うんだよ、分つたかねと念を押してすぐ風呂に飛込んだ。

そうして、少しも弱った顔を見せずにみんなと連れ立って、ホテルを出た。空はよく晴れて、星が遠くに見える晩であつたが、月がないので往来は暗かつた。危あぶのうございますから御案内を致しましょうと云つて、ホテルの小僧がついて来た。草の生えた四角な空地あきちを横切つて、瓦斯ガスも電気もない所を、茫漠ぼうばくと二丁ほど来ると、門の奥から急に強い光が射した。玄関に女が二三人出ている。我々の来るのを待つていたような挨拶をした。座敷は畳が敷いて胡坐あぐらがかけるようになっていた。窓を見ると、壁の厚さが一尺ほどあつたので、始めて普通の日本家屋でないと云う事が解つた。窓の高さは畳から一尺に足りないから、足をかけると厚い壁の上に乗る事ができる。女が危のうございますと云つた。外を覗のぞいたら真闇まつくらに静かであつた。

女は三四人で、いずれも東京の言葉を使わなかつた。田中君はわざと名古屋訛なごやなまりを真似まねて調戯からかつていた。女は御上手だ事とか、御上手やなとか、何とか云つて賞めていた。ところが前触まえふれのスキ焼はなかなか出て来ない。酒を飲まないで、肴さかなを突つて手持無沙汰てもちぶさたであつた。スキ焼があらわれても、胃の加減で旨うまくも何ともなかつた。天下に何が旨いってスキ焼ほど旨いものは無いと思うがねと田中君が云つた。田中君はスキ焼の主唱者だけであつて、大變食はたべた。傍うらやで見ていて羨ましいほど食べた。余はしようがないから畳の上に仰あ

向^{おもむき}に寝ていた。すると女の一人が枕を御貸し申しましようかと云いながら、自分の膝^{ひざ}を余の頭の傍^{そば}へ持つて来た。この枕では御氣に入りますまいとか何とか弁じている。結構だから、もう少しこつちの方へ出してくれと頼んで、その女の膝の上に頭を乗せて寝ていた。不思議な事に、橋本も活動の余地がないものと見えて、余と同様の真似^{まね}をして、向うの方に長くなっている。枕元では田中君が女を相手に碁石^{ごいし}でキシヤゴ弾^{はじ}きをやつて大騒ぎをしている。余があまり静^{しずか}だものだから、膝を貸した女は眠つたのだと思つて、顚^{あべ}の下をくすぐった。

帰るときには、神^{かみ}さんらしいものが、しきりに泊つて行けと勧めた。門を出るとまた急に暗くなつた。森閑^{しんかん}として人の気合^{けわい}のない往来をホテルまで、影のように歩いて来て、今までの派出^{はで}なスキ焼を眼前^{がんぜん}に浮かべると、やはり小説じみた心持がした。

三十

朝食^{うずら}に鶉^{うずら}を食わすから来いという案内である。朝飯^{あさめし}の御馳走^{ごちそう}には、ケムブリジに行つたときたしか浜口君に呼ばれた事があると云う記憶がぼんやり残っているだけだから、大

変珍らしかった。もつとも午前十一時に立つ客に晩餐ばんさんを振舞う方法は、世界にないんだから仕方がない。鶉に至つては生れてからあんまり食つた事がない。昔正岡子規まさおかしきに、手紙をもつてわざわざ大宮公園おおみやこうえんに呼び寄せられたとき、鶉だよと云つて喰わせられたのが初めてぐらいなものである。その鶉の朝飯を拵こしらえるからと云つて、特に招待するんだから、佐藤は物数奇ものずきに違いない。そうして、好いかほかに何にもない、鶉ばかりだよと念を押した。いったい鶉を何羽喰わせるつもりか知らんと思つて、どこから貰つたのかと聞くと、いや鶉は旅順の名物だ、もう出る時分だからちようど好かろうとすでに鶉を捕とつたような事を云つていた。

白仁さんのところへ暇いとま乞こに行つたので少し後おくれて着くと、スキ焼を推挙した田中君がもう来ていた。田中君も鶉の御相伴おしよばんと見える。佐藤は食卓の準備を見るために、出たはいり這入はいつたりする。立派な仙台平せんたいひらの袴はかまを着けてはいるが、腰板こしいたの所が妙に口を開あいて、まるで蛤はまぐりを割つたようである。そうして、それを後うしろ下さりに引き摺ずつてゐる。それでもつて、さあ食おうと云つて、次の間の食堂へ案内した。西洋流の食卓の上に、会席膳かいせきぜんを四つ並べて、いよいよ鶉の朝飯となつた。

まず御碗おわんの蓋ふたを取ると、鶉がいる。いわゆる鶉の御碗だから不思議もなく食べてしまつ

た。皿の上にもいるが、これはたしか醤油で焼かれたようだ。これも旨く食べた。第三は何でも芋いもか何かといつしよに煮られたように記憶している。しかし遺憾いかんながら、判然はつきりとその味を覚えていない。これらを漸次ぜんじに平たいげると、佐藤はまだあるよと云つて、次の皿を取り寄せた。それも無論鶉うには相違ちがひがなかつた。けれどもただ西洋流の油あぶら揚げにしてあるばかりで、ややともすると前の附焼つけやきと紛れまぎれやすかつた。しかもこの紛れやすい油揚げはだ**いぶ**仕込んで有つたと見えて、まだ喰い切らない先に御代りが出て来た。

かくのごとく鶉が豊富であつたため、つい食べ過ぎた。余の胃の中に這入つた骨だけの分量でもずいぶんある。大連へ歸つて胃の痛みが増したとき、あまり鶉の骨を喰つたせいじやなからうかと橋本に相談したら、橋本は全くそうだろうと答えた。食事が終つてから応接間へ歸つて来ると、佐藤が突然、時に君は何かやるそうじやないかと聞いた。是公ぜこうに東京で逢あつたとき、是公はにやにや笑いながら、いったい貴様は新聞社員だつて、何か書いてるのかと聞いた。こう云う質問になると、是公も友熊も同程度のものである。

何かやるなら一つ書いて行くが好いと云つて、妙な短冊を出した。それを傍そばへ置いて話をしていると、一つ書こうじやないかと催促する。今考えているところだと弁解すると、ああそうかと云つて、また話をする。しまいに墨を磨つて、とうとう手てを分わかつ古ふるき都みやこや鶉うずら

鳴く^なと書いた。佐藤の事だから何を書いたって解るまいと思つたが、佐藤は短冊を取上げて、何だ年^{とし}を分つ古き都やと読んでいた。

鶉^{うずらはら}の腹を抱えたなり、ホテルへ歸つて勘定^{かんじょう}を済まして、停車場^{ステーション}へ駆^{かけ}つけると、プラットフォームに大きな網籠^{あみかご}があつた。その中に鶉の生きたのがいっぱい這入^{はい}つて雛^{ひよっ}鳥^こを詰めたようにむくむく動いている。発車の時間に少し間があつたので、田中君は籠^{そば}の傍へ行つて所有主と談判を始めた。余が近寄つたときは、一羽が三錢だとか四錢だとか云つていた。ところへ駅員が来て、宜し^{よろ}ゆうございます、この汽車へ積込んで御届け申しますと受合つた。三人はどうとう鶉と別れて汽車へ乗つた。

三十一

いよいよ腹が痛んだ。ゼムを嚙^かんだり、宝丹^{ほうたん}を呑^{のん}んだり、通じ薬をやつたり、内地から持つて来た散薬を用いたりする。毎日飯を食つて呑氣^{のんき}に出歩いているようなものの、内心ではこりやたまらないと思うくらいであつた。大連の病院を見に行つたとき、苦し^{くる}紛れ^{まぎ}に、案内をしてくれた院長の河西君^{かさいくん}に向つて、僕も一つ診察を願おうかなと云つたら、

河西君はとんだお客様だというような顔もせず、明日の十時頃いらつしやいと親切に引き受けてくれた。ところが明日の十時頃になると、診察の事はまるで忘れてしまつて、相変らず鳥打帽子を被つて、強い日の下を焦げながら、駆け廻つた。

橋本が、全体どこまで行くつもりなんだいと聞くから、そうさまあハルビン（ハルビン）ぐらいまで行かなくつちや義理が悪いようだと答えたが、その橋本はどうする料簡（りょうけん）かちつとも分らない。考えて見ると、内地ではもう九月の学期が始つて、教授連がそろそろ講義に取りかかる頃である。君はこれからどうするんだと反問して見た。さあ僕もハルビンぐらいまで行つて見たいのだが、何しろ六月から学校を空けて（あ）いるんだからねと決心しかねている。かように義務心の強い男を唆（そそ）かして見当違の方角へ連れて行つたのは、全く余の力である。その代り哈爾賓を見て奉天へ帰るや否や、橋本は札幌（さっぽろ）から電報をかけられた。いよいよ催促を受けたと電報を見ながら苦笑しているので、いいや、急ぎ帰りつつありとかけておくさと、他の事（ひと）だから（は）なはだ洒落（しゃらく）な助言（じょごん）をした。

橋本がいよいよいつしよに北へ行くと云う事になつてから、余はすべてのプログラムを橋本に委任してぶらぶらしていた。橋本は汽車の時間表を見たり、宿泊地の里程を計算（うま）したり二三日の間はしきりに手帳へ鉛筆で何か付け込んでいた。ときどき、おいどうも旨く

行かんよ、ここを火曜の急行で出るとするとなどと相談を掛けるから、いいさ火曜がいけなければ水曜の急行にしようと、まるで無学な事を云っているの、橋本も呆あきれていた。よく聞いて見て始めて了解したが、実は哈爾賓ハルビンへ接続する急行は、一週にたった二回しかないのだそうである。普通の客車かくしゃでも、京浜間のようにむやみには出ない。一日にわずか二度か三度らしい。だから君のように呑気のんきな事を云ったって駄目だめだよと橋本から叱られた。なるほど駄目である。しかも余の駄目は汽車にとどまらない。地理道程みちのりに至つても悉皆真闇しつかい まつくらであつた。さすが遼陽りょうようだの奉天だのと云う名前は覚えているが、それがどの辺にあつて、どっちが近いのだからいさゝか知らない。その上、これから先どこどこへ泊つて、どことどこを通り抜けるのかに至るまで、全く無頓着むとんじやくであつたのだから橋本も呆れるはずである。しかし、おい鉄嶺てつれいへは降りるのかと聞いて、いや降りないと答えられれば、はあ、そうかと云つたなりで済ましていた。別に降りて見たい気にもならなかつたからである。したがつて橋本は実に順良みちづれな道伴を得た訳で、同時に余は結構な御供を雇つた事になる。

いよいよプログラムがきまつたので、是公に出立の事を持ち出すと、奉天へ行つて、それから北京ペキンへ出て、上海シャンハイへ来て、上海から満鉄の船で大連まで帰つて、それからまた

奉天へ行つて、今度は安奉線あんほうせんを通つて、朝鮮へ抜けたら好いだろうとすこぶる大袈裟おおげさな助言じょげんを与える。その上、銭ぜにが無ければやるよと註釈を付けた。銭が無くなれば無論貰う氣でいた。しかし余つても困るから、むやみには手を出さなかつた。

余は銭問題を離れて、単に時間の点から、この大袈裟な旅行の計画を、実行しなかつた。そのくせ奉天を去つていよいよ朝鮮に移るとき、紙入の内容の充実していないのに氣がついて、少々是公に無心をした。もとより返す氣があつての無心でないから、今もつて使い放しである。

立つ時には、是公はもとより、新たに近づきになつた満鉄の社員諸氏に至るまで、ことごとく停車場ステーションまで送られた。貴様が生れてから、まだ乗つた事のない汽車に乘せてやると云つて、是公は橋本と余を小さい部屋へ案内してくれた。汽車が動き出してから、橋本が時間表を眺めながら、おいこの部屋は上等切符を買つた上に、ほかに二十五弗ドル払わなければ這入はいれない所だよと云つた。なるほど表ひょうにちゃんとそう書いてある。専有の便所、洗面所、化粧室が附属した立派な室へやであつた。余は痛い腹を忘れてその中に横になつた。

トロと云うものに始めて乗つて見た。停車場へ降りた時は、柵さくの外に五六軒長屋のような低い家が見えるばかりなので、何だか汽車から置き去りにされたような気持であつたが、これからトロで十五分かかるんだと聞いて、やつと納得なつとくした。

トロは昔軍人の拵こしらえたのを、手入もせず、そのまま利用しているらしい。軌道レールの間から草が生えている。軌道の外にも草が生えている。先まで見渡すと、鉄色の筋が二本栄はえない草の中を真直まつすぐに貫ぬつらいている。しかし細い筋が草に隠れて、行方知れずゆきがたしになるまで眺め尽しても、建物らしいものは一軒も見当らなかつた。そうして軌道の両側はことごとく高梁こうりやうであつた。その大きな穂先は、眼の届く限り代赭たいしやで染めたように日の光を吸っている。橋本と余と荷物とは、この広漠こうばくな畠はたけの中を、トロに揺られながら、眩まぶしうに動いた。トロは頑丈がんじやうな細長い涼み台に、鉄の車を着けたものと思えば差支さしつかえない。軌道の上を転ころがす所を、よそから見ていると、はなはだ滑なめらかで軽快に走るが、実地に乗れば、胃に響けるほど揺れる。押すものは無論支那人である。勢いよく二三十間突いておいて、ひよいと腰をかける。汗臭あせくさい浅黄あさぎいろ色の股引ももひきが背広せびろの裾すそに触さわるので気味が悪い事がある。すると、速力の鈍つた頃を見計みはからつて、また素足すあしのまま飛び下りて、肩と

手をいっしょにして、うんうん押す。押さなければいいと思うぐらい、車が早く廻るので、乗ってる人の臓器ぞうきは少からず振盪しんとうする。余はこのト口に運搬されたため、悪い胃を著るしく悪くした。車の上では始終しじゅうゼムを含んで早く目的地へ着けば好いと思っていた。勢いよく駆けかられれば、駆けられるほどなお辛つらかった。それでも台からぶら下げた足を折らなかつたのが、まだ仕合せである。實際酒に酔つて腰をかけたまま脛すねを折つぺしよつた人があるそうだ。見ると橋本の帽子の鍔つばが風に吹かれてひらひらと靡なびいている。余は鳥打のまえまへびさし前廂まえを深く下げてなるべく日に背せを向けるようにしていた。

苦しい十五分か廿分の後車のちはようやく留まつた。軌道の左側だけが、畠はたを切り開いて平らにしてある。眼を蔽おほう高粱の色を、百坪余り刈り取つて、黒い砂地にした迹あとへ、左右に長い平屋を建てた。壁の色もまだ新しかった。玄関を這入つて座敷へ通ると、窓の前は二間ほどしかない。その縁ふちに朝顔のような草が繁しげっているが、絡からまる竹も杖つえもないので、蔓つると云わず、葉と云わず、花を包んで雑然と簇むらがるばかりである。朝顔の下はすぐ崖がけで、崖の向うは広い河原かわらになる。水は崖の真下を少し流れるだけであつた。

橋本と余は、申し合せたように立つて窓から外を眺めていた。首を出すと、崖下にも家が一軒ある。しかし屋根瓦やねがわらしか見えない。支那流の古い建物で、廻廊のような段々を藉か

りて、余のいる部分に続いているらしく思われる。あれは何だいと聞いて見た。料理場と子供を置く所になっていますと答えた。子供とは酌婦芸妓の類を指すものだろうと推察した。眼の下に橋が渡してある。厚くはあるが幅一尺足らずの板を八つ橋に継いだものに過ぎない。水はただ砂を洗うほどに流れている。足の甲を濡らしさえすれば徒歩渉るのは容易である。橋本の後に食付いて手拭をぶら下げて、この橋を渡った時、板の真中で立ち留まつて、下を覗き込んで見たら、砂が動くばかりで水の色はまるでなかった。十里ほど上に遡ぼると鮎が漁れるそうだ。余は汽車の中で鮎のフライを食つて満洲には珍らしい肴だと思つた。おそらくこの上流からクーリーが売りに来たものだろう。

三十三

足駄を踏むとぎぐりと這入る。踵を上げるとばらばらと散る。渚よりも恐ろしい砂地である。冷たくさえなければ、跣足になつて歩いた方が心持が好い。俎を引摺つていては一足ごとに後しぎるようで齒痒くなる。それを一町ほど行つて板囲の小屋の中を覗き込むと、温泉があつた。大きい四角な桶を縁まで地の中に埋け込んだと同じような槽であ

る。温泉はいつぱい溜^{たま}っていたが、澄み切つて底まで見える。いつの間に附着したもののやら底も縁も青い苔^{こけ}で色取られている。橋本と余は容赦なく湯の穴へ飛び込んだ。そうして遠くから見ると、砂の中へ生埋^{いきうめ}にされた人間のように、頭だけ地平線の上に出していた。支那人の中には、實際生埋になつて湯治^{とうじ}をやるものがある。この河原^{かわら}の幅は、向うに見える高梁^{こうりょう}の畠^{はたけ}まで行きつめた事がないからどのくらいか分らないが、とにかく眼^{たい}が平になるほど広いものである。その平^{たい}らなどこを、どう掘つても、湯が湧^わいて来るのだから、裸^{はだか}体になつて、手で砂を搔^かき分けて、凹^{くぼ}んだ処へ横になれば、一文も使わな^いで事は済む。その上寝ながら腹の上へ砂を掛ければ、温泉の搔^かいまき巻ができる訳である。ただ砂の中を潜^{もぐ}つて出る湯がいかに熱い。じくじく湧^わいたものを、大きな湯槽^{ゆぶね}に溜めて見ると、色だけは非常に奇麗^{きれい}だが、それに騙^{だま}されてうっかり飛び込もうものなら苛^{ひど}い目に逢^あう。橋本と余は、勢いよく浴衣^{ゆかた}を抛^なげて、競争的に毛脛^{けすね}を突^つ込んで、急に顔を見合せながら縮^{ちぢ}んだ事がある。大の男がわざわざ裸になつて、その裸の始末をつけかねるのはきまりが好いものじやないから、両人^{ふたり}は顔を見合せて苦笑しながら小屋を飛び出して、四半^{しはん}丁^{ちよう}ほど先の共同風呂まで行つて、平氣な風にどぼりと浸^{つか}つた。

風呂から出て砂の中に立ちながら、河の上流を見渡すと、河がぐるりと緩^{ゆる}く折れ曲つて

いる。その向う側に五六本の大きな柳が見える。奥には村があるらしい。牛と馬が五六頭
 水を渉わたつて来た。距離が遠いので小さく動いているが、色だけは判はつきり然分る。皆茶褐色を
 して柳の下に近づいて行く。牛追は牛よりもなお小さかった。すべてが世間で云う南画なんがと
 称するものに髣髴ほうふつとして面白かった。中にも高い柳が細い葉をことごとく枝に収めて、
 静まり返っているところは、全く支那めいていた。遠くから望んでも日本の柳とは趣おもむきが違
 うように思われた。水は柳の茂るところで見えなくなっているが、なおその先を辿たどつて行
 くと、たちまち眼にぶつかるような大きな山脈がある。巒ひだが鋭く刻まれているせいか、あ
 る部分は雪が積つたほど白く映る。そのくらいに周囲はどす黒かった。漢語には崔嵬さいかいと
 かさんがんとか云つて、こう云う山を形容する言葉がたくさんあるが、日本には一つも見当
 らない。あれは何と云う山だろうと傍そばにいる大重君おおしげくんに尋ねたら、大重君も知らなかった。
 大重君は支那語の通訳として橋本に随ついて蒙古もうこまで行った男である。余の質問を受けるや
 否やどこかへ消えて無くなつたが、やがて歸つて来て、高麗城子こまじょうしと云うんだそうですと教
 えてくれた。土人を捕つかまえて聞いて来たのだそうである。固もとより支那音しなおんで教わつたのだが、
 それは忘れてしまった。

濡ぬれ手拭てぬぐいを下げて、砂の中をぼくぼく橋の傍そばまで歸つて来ると、崖がけの上から若い女が

跣足で降りて来た。橋は一尺に足らぬ幅だからどつちかで待ち合せなければなるまいと思つたが、向うはまだ土堤を下りきらないので、こつちは躊躇せず橋板に足をかけた。下駄を二三度鳴らして、一間ほど来たとき、女も余と同じ平面に立った。そこで留まると思ひのほか、ひらひらと板の上を舞うように進んで余に近づいた。余と女とは板と板の継ぎ目の所で行き合つた。危ないよと注意すると、女は笑いながら軽い御辞儀をして、余の肩を擦つて行き過ぎた。

三十四

明日は梨畑を見に行くんだと橋本から申し渡されたので、宜しいと受合つた上、床についたようなものの実を云うと例のトコで揺られるのが内心苦になった。そのせいでもなからうが、容易に寝つかれない。橋本はもう軒をかいている。しかも豪宕な軒である。緞子の夜具の中から出るべき声じやない。まして裾の方には金屏風が立て回してある。明日になると、空が曇つて小雨が落ちてゐる。窓から首を出して、一面に濡れた河原の色を眺めながら、おれは梨畑をやめて休養しようかしらと云い出した。橋本は合羽ももつ

ているし、オヴアーシユーも用意して来ているのでなかなか景気が好い。ことに農科の教授だけあって、梨を見たがったり、栗を見たがったり、豚や牛を見たがる事人一倍である。早速用意をして大重君を伴^つれて出て行つた。余はただつくねんとして、窓の中に映る山と水と河原と高^{こうりよう}梁とを眼の底に陳列さしていた。薄く流れる河の厚さは昨日と同じようにほとんど二三寸しかないが、その真中に鉄の樋^{といだけ}竹が、砂^{うも}に埋れながら首を出しているのに気がついたので、あれは何だいと下女に聞いて見た。あれはボアリングをやつた迹^{あと}ですと下女が答えた。満洲の下女だけあって、述^{じゆつご}語を知っている。ついこの間雨が降つて、上^{かみ}の方から砂を押し流して来るまでは、河の流れがまるで違つた見当を通つていたので、あすこへ湯場^{ゆば}を新築するつもりであつたのだと云う。河の流れが一^{ひとあめ}雨ごとに変るようでは、滅^{めつた}多^たなところへ風呂を建てる訳にも行くまい。現に窓の前の崖^{がけ}なども水にだいぶん喰^くわれている。

そのうち雨が歇^やんだ。退屈だから横になつた。約十分も立つたと思う頃、下女がまたやつて来て、ただいま駅から電話がかかりまして、これから梨畑へおいでになるなら、駅からト口を仕立てますがと云う問い合せである。雨が歇^やんだので、座敷に寝ている口実^{くみ}はもう消滅してしまつたが、この上ト口を仕立てられては敵^{かな}わないと思つて、わざわざ晴かか

った空を見上げて、八の字を寄せた。

今から行つて間に合うのかなと尋ねると、器械ト口だから汽車と同じぐらい早いんだと云う話である。胃は固^{もと}より切^{せつ}ないほど不安であるが、汽車と同じ速度の器械ト口なるものにも、心得のためちよつと乗つて見たいような気がしたので、つい手輕^{したく}に仕度^{したく}を始めた。すると隣の部屋に泊つていた御客さんが三四人、十一時の汽車で大連へ行くと云つて、同じように仕度を始めた。それを送る下女も仕度を始めた。したがつて同勢はだいぶんになつた。その中に昨日^{きのう}橋の途中で行き合つた女がいた。それが余と尻^{しり}合せ^{あわ}に同じ車に乗る事になつた。互に尻を向けているので、別段口も利^きかなかつた。顔もよくは見なかつた。が、その言葉だけはたしかに聞いた。しかも支那語である。固^{もと}より意味は通じない。しかし盛んにクーリーをきめつけていた。その達弁なのはまた驚くばかりである。昨日微笑しながら御辞儀^{おじぎ}をして、余の傍^{わき}を摺^すり抜^ぬけた女とはどうしても思えなかつた。この女は我々の立つ前の晩に、始めて御給仕に出て来た。洋灯^{ランブ}の影で御白粉^{おしろい}をつけている事は分つたが、依然として口は利かなかつた。

苦しい十五分の後車^{のち}はまた停車場^{ステーション}に着いた。御客はすぐ汽車に乗つて大連の方へ去つた。下女はみんな温泉宿へ歸つた。余は独り^{ひと}構内^{かい}を徘徊^{はいかい}した。いわゆる器械ト口なるも

のは姿さえ見せない。そこへ駅員が来て、今松山を出たそうですからと断った。その松山は遥向うにある。余は軌道の上に立つて、一直線の平たい路を視力のつづく限り眺めた。しかしトロの来る気色はまるでなかった。

三十五

宿屋の者ともつかず、駅の者ともつかない洋服を着た男がついて来た。この男の案内で村へ這入ると、路は全く砂である。深さは五六寸もあらうと思われた。土で造った門の外に女が立っていたが、我々の影を見るや否や逃げ込んだ。手に持った長い煙管が眼について。犬が門の奥でしきりに吠える。そのうちに村は尽きて松山にかかった。と云うと大層だが、実は飛鳥山の大きいのに、桜を抜いて松を植替えたようなものだから、心持の好い平庭を歩くと同じである。松も三四十年の若い木ばかり芝の上に並んでいる。春先弁当でも持って遊に来るには至極結構だが、ところが満洲だけになお珍らしい。余は痛い腹を抑えて、とうとう天辺まで登った。するとそこに小さな廟があった。正面に向つて、聯などを讀んでいると、すぐ傍で梭の音がする。廟守でもおりそうなので、白

壁を切り抜いた入口を潜^{くぐ}つて中へ這入った。暗い土間を通り越して、奥を覗^{のぞ}いて見たら、窓の傍^{そば}に機^{はた}を据^すえて、白い疎髯^{そぜん}を生やした爺^{じい}さんが、せっせと梭^なを抛^なげていた。織^おつていたものは粗^{あら}い白布^{しろぬの}である。案内の男が一言^{ふたこと}三言^{みこと}支那語で何か云うと、老人は手を休めて、暢^{のんき}気な大きい声で返事をする。七十だそうですねと案内が通訳してくれた。たつた一人でここにいて、飯はどうするのだろうと、ついでに通訳^{わづら}を煩^{わづら}わして見た。下の家から運んでくるものを食っているそうであつた。その下の家と云うのがすなわち梨^{なし}畠^{ばたけ}の主人のところだと案内は説明した。

やがて、山を降りて梨畠へ行こうとしたが、正門から這^{はい}入るのが面倒なので、どうです土堤^{どて}を乗り越そうじやありませんかと案内が云い出した。余はすぐ賛成して蒲^{かまぼ}鉾^{こがた}形の土^ど塀^{べい}を向^{むこう}側^{がわ}へ馳^はせ下^おりた。胃は実に痛^{いた}かつた。樹^きの下を潜^{くぐ}つて二十間も来ると、向うの方に橋本始め連中が床^{しょうぎ}几^ぎに腰をかけて梨を食っている。腕^{うで}に金筋^{きんすじ}を入れた駅長^{えきちやう}までいっしょである。余も同勢^{まじ}に交^{まじ}つて一つ二つ食つた。これは胃の中に何か入れると、一時痛^{いた}みが止むからである。そうしてまた畠の中をぐるぐる歩き出した。ここの梨はまるで林檎^{りんご}のように赤い色をしている。大きさは日本の梨の半分もない。しかし小さいだけあって、鈴なりに枝を撓^{しな}わして、累累^{るる}とぶら下つているところがいかにみごとに見える。主人

がその中で一番旨い奴を——何と云ったか名は思い出せないが、下男に云いつけて、ざる筈に一杯取り出さして、みんなに御馳走した。ごちそう主人は背の高い大きな男で、支那人らしく落ちつきはらつて立っている。案内の話では二千万とか二億万とかの財産家だそうだが、それは嘘だろう。うそ脂の強い亜米利加煙草を吹かしていた。

梨にも喰い飽きた頃、橋本が通訳の大重君に、いろいろ御世話になつてありがたいから、御礼のため梨を三十錢ほど買つて帰りたいと云うような事を話してくれと頼んでいる。それを大重君がすこぶる嚴肅な顔で支那語に訳していると、主人は中途で笑い出した。三十錢ぐらいなら上げるから持つて御帰りなさいと云うんだそうである。橋本はじゃ貰つて行こうとも云わず、また三十錢を三十円に改めようとしなかった。宿へ帰つたら、下女がある御客さんといつしよに梨畠へ行つて、梨を七円ほど御土産おみやげに買つて帰つた話をして聞かせた。その時橋本は、うんそうか、おれはまた三十錢がた買つて来ようと思つたら、三十錢ぐらいなら進上しんじょうすると云つたよと澄ましていた。

壁と云うと鑊こての力で塗り固めたような心持がするが、この壁は普通の泥どろが天日てんぴで干上ひあがつたものである。ただ大地と直ちよく角かくにでき上つてゐる所だけが泥でなくつて壁に似てゐる。その上部には西洋の御城のように、形儀ぎようぎよく四角な孔あなをいくつも開けて、一ぱし櫓やぐらの体て裁いさいを示している。しかし一番人の注意を惹ひくのは、この孔から見える赤い旗である。旗の数は孔の数だけあつて、孔の数は一つや二つではないから、ちよつと賑にぎやかに思われる。始めてこの景色けしきが眼に触れた時には、村のお祭りで、若いものが、面白半分に作り物でも拵こしらえたのじやなかうかと推測した。ところがこの櫓は馬賊の来襲に備えるために、梨なし畑たけの主人が、わざわざ家の四隅よすみに打ち建てたのだと聞いて、半分は驚いたが、半分はおかしかった。ただなぜあんな赤い旗を孔の間から一つずつ出しているかが、さっぱり分らなかった。裏側へ廻つて、段々のぼを上つて見て、始めてこの赤旗の一つが一挺の鉄砲を代表している事を知った。鉄砲は博物館にでもありそうな古風な大きいもので、どれもこれも錆さびを吹いていた。弾丸たまを込めても恐らく筒つつから先へ出る氣遣きづかいはあるまいと思われるほど、安全に立てかけられていた。もつとも赤い旗だけは丁寧ていねいに括くくりつけてある。そうしてちよつど壁孔かべあなから外に見えるくらいな所にぶら下げてある。番兵は汚きたない顔を揃そろえて、後うしろの小屋の中にごろごろしてゐた。馬賊の来襲に備えるために雇われたばこそ番兵だが、

その実は、日当三四十銭の苦力クリーである。櫓やぐらを下りて門を出る前に、家の内部を観みる訳に行きまいかと通訳をもつて頼んだら、主人はかぶりを振つて聞かなかつた。女のいる所は見せる訳に行かないと云うんだそうである。その代り客間へ案内してやろうと番頭を一人つけてくれた。その客間というのは往来を隔てて向う側にある一軒建の家であつた。外には大きな柳が、静な葉を細長く空に曳ひいていた。長屋門ながやもんを這入はいると鼠色ねずみいろの騾馬らばが木の株つなに繋つないである。余はこの騾馬を見るや否や、三国志さんごくしを思い出した。何だか玄德げんとくの乗つた馬に似ている。全体騾馬たぐまというのを満洲へ来て始めて見たが、腹が太くつて、背が低くつて、総体が丸く逞たくましくつて、万事邪氣ばんじのないような好い動物である。橋本に騾馬の講義を聞くと、まず騾けつていとの区別から始めるので、真率しんそつな頭腦をただいたずらに混乱させるばかりだから、黙つて鞍くらのない裸姿を眺めていた。騾馬は首を伏せてしきりに短い草を食つていた。

門の突き当りがいわゆる客間であるが、観音扉かんのんびらきを左右に開けて這入るところなどは御寺に似ている。中は汚きたないものであつた。客でも招待するときには、臨時に掃除をするのかと聞いたら、そうだと答えていた。主人に挨拶あいさつをしてまた松山を抜けたら、松の間に牛が放してあつた。駅長が行く行く初茸はつだけを取つた。どこから目付けめつけ出すか不思議なく

らい目付け出した。橋本も余も面白半分少し探して見たが、全く駄目であつた。山を下るとき、おい満洲を汽車で通ると、はなはだ不毛の地のようなのであるが、こうして高い所に登つて見ると、沃野千里という感があるねと、橋本に話しかけたが、橋本にはそんな感がなかつたと見えて、別に要領の好い返事をしなかつた。余の沃野千里は全く色から割り出した感じであつた。松山の上から見渡すと、高い日に映る、茶色や黄色が、縞になつたり、段になつたり、模様になつたり、霞で薄くされて、雲に接くまで、一面に平野を蔽うている。満洲は大きな所であつた。

宿へ帰つたら、御神さんが駅長の贈つて来た初茸を汁にして、晩に御膳の上へ乗せてくれた。それを食つて、梨畑や、馬賊や、土の櫓や、赤い旗の話しなぞをして寝た。

三十七

立つ用意をしているところへ御神さんが帳面を持って出て来た。これへ何か書いて行つて下さいと云う。御神さんは余を二つ接ぎ合せたように肥えている。それで病氣だそうだ。始めはどこのものだか分らなかつたが、御神さんと知って、調子の下女と違っているのに

驚いた。御神さんはその体格の示すごとき好い女であった。どうしてあんなすれっからし
の下女を使いこなすかが疑問になったくらいである。帳面を前へ置いて、どうぞと手を膝ひざ
の上に重ねた。その膝の厚さは八寸ぐらいある。

帳面を開けると、第一頁ページに林学博士のH君が「本邦ほんぽうの山水さんすいに似たり」と揮ふるつてしま

ったあとである。その次にはどこぞの聯隊れんたい長ちやう何のなにがしと書いてある。宿帳しゆくちやうだか、

書画帖しやがちやうだか判然しないものの、第三頁に記念を遺のこす事に差し逼せまつて来た。橋本は帳面を

見るや否や、向むこうを向いて澄あましている。余は仕方がないから、書くには書くが、少し待っ

てくれと頼たのんだ。すると御神おかみさんが、そうおっしゃらずに、どうぞどうぞと二遍も繰返し

て御辞儀ごしぎをする。無論嘘うそを吐く気は始めからないのだが、こう拝をむようにされて書いてや

るほどの名筆でもあるまいと思うと、困こんきやく却げと慚愧ざんきでほとほと持て余してしまう。時に

橋本が例のごとく口を利きいてくれた。この人は嘘を云う男じゃないから、大丈夫ですよ今

に何か書きますよと笑っている。余はまた世間話をしながら、その間に発句ほくくでも考え出さ

なければならなくなつた。

同情してくれる人はだいたいあると思うから白状するが、旅をして悪筆あくもつを懇望こんもうされるほ

ど厄介やつかいな事はない。それも句作に熱心で壁柱かべはしらへでも書き散らしかねぬ時代ならとに

かく、書く材料の払底ふってになつた今頃、何か記念のためにと、短冊たんじゃくでも出された日には、節季せつきに無心を申し込まれるよりも苛いつら。大連を立つとき、手荷物を悉しつ皆革靴かばんの中へ詰め込んでしまつて、さあ大丈夫だと立ち上つた時、ふと気がついて見ると、化粧台の鏡の下に、細長い紙包があつた。不思議に思つて、折目を返して中を改めると、短冊である。いつ誰が持つて来て載せたものか分らないが、その意味はたいてい推察ができる。俳句を書かせようと思つて来たところが、あいにく留守るすなので、また出直して頼む氣になつて、わざと短冊だけ置いて行つたに違ない。余はこの時化粧台から紙包を取りおろして、革靴の中へ押し込んで、ホテルを出た。この短冊はいまだに誰のものか分らない。数は五六枚で雲形くもがたの洒落しゃれたものであつたが、朝鮮へ来て、句を懇望されるたびに、それへ書いてやつてしまつたから今では一枚も残つていない。長春の宿屋でも御神さんに捕つかまつた。この御神さんは浜のものだとか云つて、意気な言葉使いをしていたが、新しい折手本おりてほんを二冊出して、これへどうぞ同なじものを二つ書いて下さいと云つた。同じでなければいけないのかと尋ねると、ええと答える。その理由は、夫婦別れをしたときに、夫婦が一冊ずつ持つている事ができるためだそうだ。

こう書いて行くと、朝鮮の宴会で統ぬめを持出された事まで云わなくてはならないから、好

い加減に切り上げて、話を元へ戻して、肥^{ふと}った御神さんの始末をつけるが、余は切ない思いをして、汽車の時間に間に合うように一句浮かんだ。浮かぶや否や、帳面の第三頁へ熊^{くま}岳^{うがくじょう}城^{まえばき}にてと前書^{まえがき}をして、黍^{きび}遠^{とお}し河原^{かわら}の風呂^{ふろ}へ渡る人^{わた}と認^{ひと}めて、ほっと一息吐いた。そうして御神さんの御礼も何も受ける暇のないほど急いでトロに乗った。電話の柱に柳の幹を使ったのが、いつの間にか根を張って、針金の傍^{そば}から青い葉を出しているのに気がついて、あれでも句にすればよかったと思つた。

三十八

窓^{のぞ}から覗いて見ると、いつの間にか高梁^{こうりょう}が無くなっている。先刻^{さつぎ}までは遠くの方に黄色い屋根が処々眺められたが、それもついに消えてしまった。この黄色い屋根は奇麗^{きれ}であつた。あれは玉蜀黍^{とうもろこし}が干してあるんだよと、橋本が説明してくれたので、ようやくそうかと想像し得たくらい、玉蜀黍を離れて余の頭に映つた。朝鮮では同じく屋根の上に唐^と辛子^{うがらし}を干していた。松の間から見える孤^{ひと}つ家^やが、秋の空の下で、燃え立つように赤かつた。しかしそれが唐辛子^{とうがらし}であると云う事だけは一目ですぐ分つた。満洲の屋根は距離が

遠いせい、ただ茫漠^{ぼうばく}たる単調を破るための色彩としか思われなかった。ところがその屋根も高粱もことごとく影を隠してしまつて、あるものはただの地面だけになった。その地面には赤黒い茨^{いばら}のような草が限りなく生えている。始めは蓼^{たて}の種類かと思つて、橋本に聞いて見たら橋本はすぐ冠^{かむり}を横に振つた。蓼^{たて}じゃない海草^{かいそう}だよと云う。なるほど平原の尽きる辺^{あた}りを、眼を細くして、見究^{みきわ}めると、暗くなつた奥の方に、一筋鈍く光るものがあるように思われる。海辺^{うみべ}かなと橋本に聞いて見た。その時日はもう暮れかかつていた。際限もなく蔓^{はびこ}つてゐる赤い草のあなたは薄い靄^{もや}に包まれて、幾らか蒼^{あお}くなりかけた頃である。あからさまに目に映るすぐ傍^{そば}をよくよく見つめると、乾いた土ではない。踏めば靴の底が濡^ぬれそうに水気^{みずけ}を含んでゐる。橋本は鹹^{しおけ}気があるから穀物の種がおろせないのだと云つた。豚も出ないようだねと余は橋本に聞き返した。汽車に乗つて始めて満洲の豚を見たときは、實際一種の怪物に出逢^{であ}つたような心持がした。あの黒い妙な動物は何だと真面目^{まじめ}に質問したくらい、異な感じに襲^いわれた。それ以来満洲の豚と怪物とは離せないようになった。この薄暗い、苔^{こけ}のように短い草ばかりの、不毛の沢地^{たくち}のどこかに、あの怪物はきつと点綴^{てんてつ}されるに違ないと云う気がなかなか抜けなかった。けれども一匹の怪物に出逢う前に、日は全く暮れてしまつた。目に余る赤黒い草の影はしだいに一色^{ひといろ}の夜^よに変化した。ただ北

の方の空に、夕日の名残なごりのような明るい所が残ったのである。そうしてその明るい雲の下が目立って黒く見える。あたかも高い城壁の影が空を遮さへぎつて長く続いているようである。余は高いこの影を眺めて、いつの間にか万里の長城に似た古迹こせきの傍そばでも通るんだらうぐらいの空想を逞たくましうしていた。すると誰だかこの城壁の上を駆けて行くものがある。はてなと思つてしばらくするうちに、また誰か駆けて行く。不思議だと覺さとつて瞬またたきもせず城壁の上を見つめていると、また誰か駆けて行く。どう考えても人が通るに違いない。無論夜の事だから、どんな顔のどんな身装みなりの人かは判然しないが、比較的明かな空を背景にして、黒い影法師が規則正しく壁の上を馳かけ抜ける事は確たしかである。余は橋本の意見を問う暇もないほど面白くなつて、一生懸命に、眼前を往来するこの黒い人間を眺めていた。同時に汽車は、刻々と城壁に向つて近寄つて来た。それが一定の距離まで来ると、俄然がぜんとして失笑した。今までたしかに人間だと思ひ込んでいたものは、急に電信柱の頭に変化した。城壁らしく横長に続いていたのは大きな雲であつた。汽車は容赦なく電信柱を追い越した。高い所で動くものがようやく眼底を払つた。

狭い小路こうじの左右は煉瓦れんがの塀へいで、ちよつと見ると屋敷町のように人通りが少い。それを二十間ほど来て左手の門を這入はいった。ただ偶然に這入ったのだから、家の名も主人あるじの名も知るはずがない。今から考えると、小路のうちには同じような家が何軒となく並んでいて、同じような門がまたいくつでも開あいているのだから、とくにここだけを覗くべきのぞ インデューズメント 致は少しもなかったのである。余はただ案内者の後あとに跟着何の気なしに這入った。その案内者もまた好い加減に這入った。案内者は青林館せいりんかんと云う宿の主人である。かつて二葉亭ふたばていといつしよに北の方を旅行して、露西亞人ロシアじんに苛ひどい目に逢あつたと話した。

門を這入ると、右も室へや、突き当りも室である。左りも隣の壁に隔てられなければ室であるべきはずなのだから、中の一筋だけが頭の上に空を仰ぐ訳になる。そこに立つて右手の部屋を覗くと、狭い路次ろじから浅草の仲店なかみせを看みるような趣おもむきがある。實際仲店よりも低く小さい部屋であつた。その一番目には幕が垂れていて、中は判然はつきりと分らなかつたが、次を覗いて見る段になつて驚いた。二畳敷ぐらいの土間の後うしろの方を、上り框あががまちのように、腰をかけるだけの高さに仕切つて、そこに若い女が三人いた。三人共腰をかけるでもなく、寝転ぶでもなく、互に靠もたれ合つて身体からだを支えるごとくに、後の壁をいっぱいにした。三人の着

物が隙間なく重なって、柔かい絹をしなやかに圧しつけるので、少し誇張して形容すると、三人が一枚の上衣を引き廻しているように見える。その間から小さな縹子の靴が出ていた。三人の身体が並んでいる通り、三人の顔も並んでいた。その左右が比較的尋常なのに引きかえて、真中のは不思議に美しかった。色が白いので、眉がいかにも判然していた。眼も朗かであった。頬から顎を包む弧線は春のように軟かった。余が驚きながら、見惚れているので、女は眼を反らして、空を見た。余が立っている間、三人は少しも口を利かなかった。

青林館の主人は自分ほどこの女に興味がなかったと見えて、好加減に歩を移して、突き当りの部屋に這入った。そこも狭い土間で、中央には普通の卓上が据えてあった。それを囲んで三人の男が食事をしている。皿小鉢から箸茶碗に至るまで汚ない事はなはだしい。卓に着いている男に至つてはなおさら汚なかった。まるで大連の埠頭で見る苦力と同様である。余はこの体裁を一見するや否や、台所で下男が飯を掻き込んでるんじゃないかと思うかと考えた。ところがつい隣の室でしきりに音楽をやっている。今見た美人のいる所とはつい三間とは離れていない。実に矛盾な感じである。

余は二歩ばかり洋卓を遠退いて、次の室の入口を覗いて見た。そうしてまた驚いた。

向の壁に倚添よりそえて一脚の机を置いて、その右に一人の男が腰をかけている。その左に女が三人立っている。その前には十二三の少女が男の方を向いて立ている。少し離れて室へやの入口には盲目めくらが床几しょうぎに腰をかけている。調子の高い胡弓こきゆうと歌の声はこの一団から出るのである。歌の意味も節も分らない余の耳にはこの音楽が一種異様に凄じすさまい響を伝えた。机の右にいる男が、右の手に筮ぜい竹ちくのような物を持って、時々机の上を敲たたくと同時に左の掌てのひらに八橋やつはしと云う菓子に似た竹の片きれを二つ入れて、それをかちかちと打合せながら、歌の調子を取る。趣向はスペインの女の用いるカスタネットに似ているが、その男の顔を見ると、アルハンブラの昔を思い出すところではない。蒼黒あおくろく土氣つちけづいた色を、一心不乱に少女の頭の上に乗のしかけるように翳かげして、腸はらわたを絞しぼるほど恐ろしい声を出す。少女はまた瞬またたきもせず、この男の方を見つめて、細い咽喉のどを合している。それが怖こわい魔物に魅入みいられて身動きのできない様子としか受取れない。盲目は彼の眼の暗いごとく、暗い顔をして、悲しい陰気な、しかも高い調子の胡弓こきゆうを擦すり続けに擦っている。左の方に立っている女の一人が余を見た。それが忌むいべき敷やぶにらみ睨にらみであつた。日の目の乏しくって暮やすい室のうちで、この怪しい団体はこの怪しい音楽を奏して夢中である。余は案内の袖そでを引いてすぐ外へ出た。

四十

橋本は遠い所へ豚を見に行つた。何でも市街^{まち}から一里余もあるとか云う話である。こんな痛い腹を抱^{かか}えて今更豚でもあるまいと思つて止^やめた。その代りにそこいらをぶらつくべく主人^{あるじ}といつしよに馬車で出た。主人がまあ遼^{りよう}河^がを御覧なさいと云う。馬車を乗り棄^すて河岸^{かし}へ出ると眼いっぱいに見えた。色は出水^{でみず}の後の大川に似ている。灰のように動くものが、空を呑^のむ勢^{いきおい}で遠くから流れて来る。哈爾賓^{ハルビン}に行く途中で、木戸さんに聞いた話だが、満洲の黄土はその昔中央亜細亞^{アジア}の方から風の力で吹き寄せたもので、それを年々河の流れが御町^{ごていねい}に海へ押出しているのだそうである。地質学者の計算によると、五万年の後に^{のち}は今の渤海湾^{ぼつかいわん}が全く埋^{うま}つてしまふ都合になつていきますと木戸君が語られた。河辺^{かわべ}に立つて岸と岸との間を眺めていると、水の量が泥の量より少いくらい濁つたものが際限なく押し寄せて来る。五万年は愚^{おろ}か、一二カ月で河口はすっかり塞^{ふさ}がつてしまひそうである。それでも三千噸^{トン}ぐらいな汽船は苦^くもなくのそのそ上^{のほ}つて来ると云うんだから支那の河は無神経である。人間に至つては固^{もと}より無神経で、古来からこの泥水を飲んで、悠然^{ゆうぜん}と子を

んで今日^{こんにち}まで榮えている。

サンパンと云う船がここかしこに浮かんで形に合しては大き過ぎるぐらいな帆^ほを上げて
いる。帆の裏には細い竹を何本となく横に渡してあるから、帆に角^{かど}が立つのみか、捲^まき上^あ
げる時にはがらがら鳴る。日本では見られない絵である。その間を横切つて向^む岸^{こう}へ着
いた。向岸には何にもない。ただ停車場^{ステーション}が一つある。北京^{ペキン}への急行が出るとか云うので、
客がたくさん列車に乗り込んでいる。下等室を覗^{のぞ}いたら、腰かけも何もない平土間^{ひらどま}に、み
んなごろごろ寝ころんでいた。帰りにはサンパンに乗つて、泥^なの流^{ながれ}を押し渡つた。風が出
ると難儀だそうである。春の初めには山のような氷が流れてくる。先が見えないので、氷
と氷の間に挟^{はさ}まれると命を取られる。ある時氷に路を塞^{ふさ}がれて仕方がないから、船を棄^すて
て氷の上へ上^あつて、乗り捨てた船を引き摺^ずつて向う側へ出て、ようやくまた船に乗つたと
云う話がある。これは主人^{あるじ}の実歴談^{じつれきだん}である。

サンパンは妙なところへ着いた。岸は芦^{あし}を畳んでできている。石垣^{いしがき}ではなくて
ある。こうしたなければ水の力で浚^{さらい}われる恐れがあると云う。芦はいくらでも水を吸い込
んで平気でいるから無難だと見える。細い小路^{こうじ}を突き抜けると、支那町の真中へ出た。妙な
臭^{におい}がする。先刻^{さつき}から胸が痛むのでポケットから、粉^{こな}薬^{ぐすり}を出して飲もうとするがあいに

く水がない。一滴の飲料も用いずに散薬を呑み下す方法は、その後苦し紛れに発見した分
 別だが、この時はまだそれほど老練な患者でないもので、拝むように主人を煩わした。主
 人はええ訳はありませんと云いつつも、ずいぶん烈しく引張り廻した上、ほとんど苦しく
 って道傍に竦みそうになった頃、ようやく一軒の店へ這入った。盆栽などの据えてあ
 る中庭を通り抜けて角の一部屋へ案内されたが、水はなかなか出る様子がない。そのうち、
 こちらへと云つてまた二階へ招ぜられた。虫のように段々を上つて廊下から室へ這入ると、
 日本人が二三人事務を執っている。さあどうぞと椅子を与えられたので、挨拶をして始
 めて解つたが、水を貰いに飛び込んだところは日清豆粕会社で、さあどうぞと迎えて
 くれたのは、社員の倉田君である。倉田君は固より日本から漫遊もしくは視察の目的を
 もつてわざわざ営口までやって来たものと余を信じている。服薬のために通りがかりの
 ついでながら、日清豆粕会社の奥二階へ水を貰いに立ち寄つたと判じようはずがない。そ
 こで水は容易に出ない。湯も出ない。今御茶を上げると云つて、ボーがしきりに支度をし
 ている。余は青林館の主人が恨めしくなった。けれども倉田君に対しては相応に体裁を
 具えた応対をしなければならぬ。豆が汽車で大連へ出るようになってから、河を下つて
 くる豆の量が減つたでしようかてような事を、真面目くさつて質問していた。

四十一

橋本が博士^{はかせ}になったり、ならなかったりした話がある。大連^{やまと}の大和ホテルにいる時分、満鉄から封書が届いた。その表に橋本農学博士殿と町^{てい}寧^{ねい}に書いてあったのを乙^{おつ}に眺めながら、これだから厭^{いや}になっちまうと云つて余の方を向いて苦笑したから、先生は学者ぶつて、むやみに博士^{よば}呼わりをされるのを苦にする意味なんだろうと鑑定して、取り合つてやらなかった。実際こんな事が苦になるくらいなら、始めから博士にならなければ好いと思つたからである。その時はそれですんだ。

余は橋本をもつて固^{もと}より農学博士と信じていた。是公^{ぜこう}もそう信じていた。現にある人に向つて橋本つて農学博士さと説明しているのを聞いた。余に至つては、いつかの新聞で、本人の博士になった事をたしかに承知した記憶がある。それで大連を立て北に行く時も、榮譽ある博士の同伴者だと云う自覚がちゃんとあつた。ところが毎日毎晩一つ鍋^{なべ}のものを突^つついて進行しているうちに、何かの拍^{ひょう}子^しだったが、いやおれは博士じゃないよと急に橋本が云い出した。その時はいくら本人が証明したつてなるほどと云う気になれないくら

い驚いた。第一、十年近くも大学の教授をしている男を、博士にしない法はないと考えてる上、どうしても新聞でその授与式を拝見したとしか思われないんだから、余もできるだけは抗弁したが、やつぱり博士じゃないと頑固^{がんこ}を張って云う事を聞かない。余もやむをえず、そうかと云つて我^がを折つた。この時から橋本は気の毒ながらとうとう、ただの人間になつてしまった。

けれども、世間には迂濶^{うかつ}ものが多いと見えて、どこへ行つても橋本博士、橋本博士と云う。新聞を折々読むときつと橋本博士と出ている。しまいにはおひまた博士だよと注意するのが面倒になつた。橋本も澄^{すま}し返^{かえ}つてゐる。もつとも澄まし返さなくなつたつて、一々博士じゃありませんと訂正して歩く訳に行くものじゃない。こう云う余にも覺^{おぼえ}がある。釜山^{ふさん}から馬関^{ばかん}へ渡る船中で、拓殖^{たくしよく}会社の峰八郎^{みねはちろうくん}君の妻君に逢^あつたとき、八郎君は真面目^{まじめ}な顔をして、これは夏目博士と引き合した。すると妻君が御名前はかねて伺つておりますと叮嚀^{ていねい}に御辞儀^{おじぎ}をされるから、余もやむをえず、はあと云つたなり博士らしく挨拶^{あいさつ}をした。だから橋本が博士に慣れ切つて満洲を朝鮮へ渡るに何も不思議はない。余もいつたんは彼の博士を撤回したようなものの、日を重ねるに従つてまた何だか博士らしい気持ちが出した。それで道中つつがなく安奉線^{あんぼうせん}を通つて、安東^{あんとう}県までやつて来た。ところ

がここで橋本の博士がちよつと気に食わなくなった。安東県の宿屋の番頭がどう云う不^{ふりよ}料簡^{うけん}か、橋本博士御手荷物のうちと云う札を余の革靴^{かばん}にぴたぴた結^いわつけてしまった。腹が立ったが面倒だからそのままにしておくのと次の宿屋で橋本と分れる事になって、向うの手荷物を停車場^{ステーション}へ運び出す際に、余の奇麗^{きれい}な革靴^{かばん}を橋本のものだと思ひ込んで、宿屋の小僧がずんずん停車場まで持つて行つてしまった。余は冗談じゃないぜと云つた。橋本は面白がつて笑つていた。それだから、また博士にならない。

四十二

ここだと云うので、降りたには降りたが、夜の事だから方角も見当もまるで分らない。頼りに思う停車場は縁日の夜店ほどに小さいものであつた。その軒を離れるとなおさら淋しい。空には星があるが、高い所に己^{おのれ}と光るのみで、足元の景気にはならなかつた。汽車路を通つて行くと、鉄軌^{レール}の色が前後五六尺ばかり、提^{ちようちん}灯^ひの灯に照らされて、露^{つゆ}のごとく映つてはまた消えて行く。そのほかに何も見えなかつた。やがて右へ切れて堤^ふのようなものをだらだらと下りる心持がしたが、それも六七歩を超^こえると、靴を置く土の感じが不

断だんに戻ったので、また平地ひらちへ出たなと気がついた。すると虫の音ねが聞えだした。足元で少しばかり鳴いてるような家庭的なものではない。虫の音ねだと云う分別ぶんべつが出た時には、その声こゑがもう左右前後に遠く続いていた。我々われわれは一つの提灯ちようちんを先にして、平原にはびこる無尽蔵の虫の音に包まれながら歩いた。

今考かんえると、なかなか風流である。筆とを執とつて書いていても、魏叔子ぎしゆくしの大鉄椎だいてつちの伝でんにある曠野こうやの景色が眼の前に浮んでくる。けれども歩いている途中は実に苦しかった。飯の菜さいに奴豆腐やつどうふを一丁食くつたところが、その豆腐が腹へ這入はいるや否や急に石灰いしばいの塊かたまりに変化して、胃の中を塞ふさいでいるような心持である。腮あごの奥から締めつけられて、やむをえない性質たちの唾液つばきが流れ出す。それに誘いざなわれるままにしておく、嘔はきたくなくなる。せめて口中の折おり合あいでもと思つて、少し抵抗しにかかる、足が竦すくんで動けなくなる。余は幾度いくたびか虫の音の中に苦しい尻しりを落ちつけようかと思つた。ただ橋本に心配させるのが、気の毒である。支那しなの荷持にもちに野糞のくそを垂たれてると誤解されたつて手柄てがらにもならない。そこで無理に歩いた。

遥向はるかうに灯ひが一つ見える。余が歩いている路は平らである。灯はその真正面に当る。あすこへ行くんだろうと推測して星の下を無言に辿たどつた。今日の午ひるは営口で正金銀行の杉原

君の御馳走を断つた。晩は天春君の幹旋ですでに準備のできてゐる宴会を断つた。そうして逃げるように汽車に乗つた。乗る時橋本にこの様子じゃ千山行は撤回だと云つた。實際撤回しなければならぬほど、容体が危しくなつて来た。ただ向うに見える一点の灯火が、今夜の運命を決する孤つ家であると覺悟して、寂寞たる原を真直に横切つた。原のなかには、この灯火よりほかに当になるものは一つも見つからないのだから心細かつた。宿屋はたつた一軒かと聞いたたら、案内がええと答えた。湯崗子は温泉場だと橋本のプログラムの中にちゃんと出てゐるのだから、温泉がこの茫々たる原の底から湧いて出るのだらうとは、始めから想像する事ができたが、これほど淋しい野の面に、ただ一軒の宿屋がひっそり立つてゐようとは思ひがけなかつた。

そのうちようやく灯のある所へ着いた。平家作の西洋館で、床の高さが地面とすれすれになるほど低い。板間ではあるが無論靴で出入をする。宿の女は草履を穿いてゐた。遠くから見たと同じように浮き立たない家であつた。造作のつかない広い空家へ洋灯を点して住つてゐるのかと思つた。這入るとすぐの大広間に置いてあつたオルガンさえ、先の手主が忘れて置いて行つたものとしか受取れなかつた。暗い廊下を突き当つて右へ折れた翼の端の室へ案内された。中を二つに仕切つてある。低い床には、椅子と洋卓と色の褪

めた長椅子とが置いてあつた。高い方は畳を敷いて、日本らしく取り繕つてあつた。ちやうど土間から座敷へ上るあがようにして、甲から乙に移る構造である。余はいきなり畳の上に倒れた。三四十分の後膳のきせんが出た。橋本がしきりに起きて食えと勧めたが、ついに起きなかつた。第一食卓に何が盛られたかをさえ見なかつた。眼を開ける勇氣すら無かつたのである。

四十三

朝起きると、馬が来たとか来ないとか云つて橋本の連中が騒いでいる。連中は三人だから、一人が一つの馬に乗るとすれば、三匹要るい訳になる。この茫漠ぼうばくたる原の中で、生きた馬を三匹生捕いけどるとなると、手数てすうのかかるのは一通りではあるまい。連中は格別早起きもしない癖に、今更苦情を並べたつて始まらないと思つて、同行を断念した余は、冷然と落ちついてゐた。本来を云うと、千山せんざんへ行くのが目的で、わざわざここに降りたには相違ないが、一旦自分が千山行を諦めたあきらとなると、ほかの連中が予定通よていどおりに行動するのが、いまいましくなる。第一橋本なんて農科の男は、千山を見る必要も何もないのである。千山

は唐の時代に開いた梵刹で、今だに残っているのは、牛でもなければ豚でもない、ただ山と谷と巖と御寺と坊主だけであるから、農科の教授がわざわざ馬に乗って見物に行くべきところではけつしてない。と云つてせつかく行くと云うものを、意見までして思い止まらせるほどの口実は無論考え出せないから、なすがままにさせて放つておいた。そのうち不思議な事に、注文通馬が三匹出て来た。どこから出て来たものか聞いても見なかったが、たしかに出て来た。三人は癪に障るほど勇んで外へ飛び出した。余は仕方がないから西洋間と日本間の唯一の主人として、この一日を物静かに休養すべく準備した。まず何よりも横になるのが薬だろうと思つて、狸だか狐だか分らない毛皮の上にごろりと転がった。すると窓の外から橋本の声で、おいおいちよつと出て見ろと呼んでいる。彼れまだそこいらを迷つてゐるなと思うと、少し面白くなつたから、請求通原の中へ草履のまま出た。すると広い牧場のようなところに、馬が三匹立っていた。それがいずれも小汚ない駄馬だったのでなほだ愉快であつた。のみならず、その中の一匹がどうしても大重君を乗せようと云わない。傍へ行くと、飛んだり蹴たりする。馬が怖がるからだと云つて、手拭で眼隠しをして、支那の小僧が両手で轡をしつかり抑えている。遠くから見ると、馬が鉢巻をしたようでおかしかつた。その傍へ大重君が苦笑いをしながら近寄つて行く

ところは、一層面白かった。しかも一度や二度ではない。よほど馬に遠慮する性質と見え、容易に埒を明けないから、みんながなほ喝采する。橋本は北海道の住人だから苦もなく鞍に跨った。もう一人——名前を忘れたから、もう一人というよりほかに仕方がないが——これは熊岳城の苗圃の長で、もと橋本に教わった事があると云うだけに、手綱を執る術を心得ている。余はこの時立ちながら心の中で、要するに千山行を撤回した方が、馬術家としての余の名誉を完うする所以ではなからうかと考えた。

けれども、そんな気色は顔にも出さず、ただ残り惜しげに三人の後姿を眺めていた。そうして大重君の腰つきから推測して、千山まであれで乗り通すのは、定めて心配な事だろうと同情した。橋本は今夜のうちに帰るんだとか号して、しきりに馬を急がせるらしい。苗圃長も負けずに、続いて行く。独り大重君だけが後れた。馬はまだ眼隠をしている。やがて二人の影が高粱に遮ぎられて、どっちへ向いて行くかちよつと分らなくなった。先刻からそこいらを徘徊していた背の高い支那人もまた高粱の裡に姿を隠した。この支那人は肩から背へかけて長い鉄砲を釣っていた。人数は二人であった。始めて気がついたときは咄嗟の際に馬賊という聯想が起った。橋本と前後して高粱の底に没して、しばらくすると、どんと云う砲声が聞えて、またしばらくすると、三人の馬の前にどこからかあ

の背の高い奴が現われて来たら大事件だと想像して、また室の中へ帰つて狸の皮の上に寝た。

四十四

手拭てぬぐいを下げて風呂に行く。一町ばかり原の中を歩かなければならない。四方を石で畳たた上げた中へ段々を三つほど床ゆかから下へ降りると湯泉ゆづに足が届く。軍政時代に軍人が建てたものだからかなり立派にできている代りにすこぶる殺風景さつぷうけいである。入浴時間は十五分を超こゆべからずなどと云う布告ふこくめいたものがまだ入口に貼付けてある通りの構造である。犯則を承知の上で、石段に腰をかけたり、腹這はらばいに身を浮かしたり、頬杖よを突いて倚りかかったり、いろいろの工夫を尽くした上、表へ出て風呂場の後へ廻ると、大きな池があつた。若い男が破舟やれぶねの中へ這入はいつてしきりに竿さおを動かしている。おいこの池は湯か水かと聞くと、若い男は類稀たぐいまれなる仏頂面ぶつちようづらをして湯だと答えた。あまり厭いやな奴だから、それぎり口を利きくのをやめにした。岸の上から底を覗のぞくと、時々泡のようなものが浮いて来る。少しは湯気が立つてゐるかとも思われる。実は魚がいないかと、念のため聞いて見たか

ったのだけれども、相手が相手だから歩を回らして宿の方へ帰った。後で、この池に魚が泳いでいる由を承知してはなはだ奇異の思いをなした。その上ここには水が一滴も出ないのだと教えられたときには全く驚いた。

驚いた事はまだある。湯から帰りがけに入口の大広間を通り抜けて、自分の室へ行こうとすると、そこに見慣れない女がいた。どこから来たものか分らないが、紫の袴を穿いて、深い靴を鳴らして、その辺を往たり来たりする様子が、どうしても学校の教師か、女生徒である。東京でこそ外へさえ出れば、向うから眼の中へ飛び込んでくる図だが、渺茫たる草原のいづくを物色したつて、斯様な文采は眸に落ちるべきはずでない。余はむしろ怪しい趣をもつて、この女の姿をしばらく見つめていた。

室に帰つてまた寝た。眼が覚めると窓の外で虫の声がする。淋しくなつたから、西洋間へ出て、長椅子の上に腰をかけて、謡をうたつた。無論出鱈目である。そこへ下女が来た。先刻の女の事を聞いたら、何でも宅で知つてゐる人なんでしょうと云つただけで、ちつとも要領を得ない。昨夕飯を済まして煙草を呑んでいると急に広間の方で、オルガンを弾く音がしたが、あの女がやつたんじゃないかと聞くと、いいえ昨夕のは宅の下女ですと云う。この原のなかに、それほどハイカラな下女がいようとは思いがけなかった。先刻の袴はも

う帰ったそうである。

余は一人長椅子の上に坐^{すわ}った。そうして永い日^{かたむ}が傾き尽して、原の色が寒く変るまでぽかんとしていた。すると静かな野の中でどうぞ、ちと御遊びに、私一人ですからと云う嬌^{なまめ}かしい声がした。その音調は全くの東京ものである。余は突然立って、窓の外を眺めた。あいにく窓には寒^{かん}冷^{れい}紗^{いしや}が張^はつてあつた。手早く硝子^{ガラス}を開けて首を外へ出すと、外はもう一面に夕暮れていて、蒼^{あお}い煙^{えん}が女の姿を包んでしまったので誰だか分らなかつた。

橋本の連中はその晩帰つて来た。下女のしらせで、暗い背戸^{せど}に出て見ると、豆のような灯^ひが一つ遠くに見えた。下女はあれが連中だと云う。いくら野^の広^{ひろ}いところだって、橋本以外にも灯が見える事もあるだろうと尋ねても、やっぱりあれだと云う。はたしてそうであつた。灯は夕方宿^{むかえ}から迎に出した支那人の持つて行つた提^{ちよう}灯^{ちん}である。背戸口に馬を乗り捨てた橋本は、そう骨を折つて見に行く所でもないよと云つた。大重君は馬から三度落ちたそうである。

奉天へ行つたら満鉄公所まんてつこうしょに泊るとまがいいと、立つ前まへに是公ぜこうが教えてくれた。満鉄公所には俳人肋骨ろっこつがいるはずだから、世話になつても構わないくらいのずるい腹は無論あつたのだが、橋本がいつしよなので、多少遠慮した方が紳士だろうという事に相談がいつか一決してしまった。停車場ステーションには宿屋の馬車が迎えに来ていた。やはり泥の中から掘出して、炎天で乾かしたように色が変わっている。荷物と人間をぐるに乘せて、構内を離れるや否や、御者ぎよしやが凄じく鞭むちを鳴らした。峠とうげを越す田舎いなかの乗合馬車よりも手荒な取扱方である。広い通りはそれほどでもないが、しだいに城内に近づくに従つて、今まで野原同然ぼうぼうに茫々もうろうとしていた往来おうらいが、左右の店の立込たてこんで来ると共に狭くなる上に、鉄道馬車がその真中を駆けつつあるにもかかわらず、烈しい鞭の影は一分に一度ぐらいはきつと頭の上で閃ひらめいた。馬は無理にも急がなければならない。けれども奉天だけあつて、往来の人は馬車の右にも左にも、前にも後にも、のべつに動いている。そこへ騾馬ろばを六頭も着けた荷車がくるのだから、牛を駆るようにのろく歩いたつて危ない。それだのに無人むにんの境さかいを行くがごとくに飛ばして見せる。我々のような平和を喜ぶ輩ともがらはこの車に乗っているのがすでに苦痛である。御者はもちろんチャンチャンで、油ほこりに埃の食い込んだ辮髪べんぱつを振り立てながら、時々満洲の声を出す。余は八の字を寄せて、馬の尻をすかしつつ眺めた。そうして、みだ

りに鞭を瘠せ骨に加えて、旅客の御機嫌を取るのは、女房を叱つて佳賓をもてなすの類だと思つた。

現に北陵から帰りがけに、宿近く乗りつけると、左り側に人が黒山のようにたかっている。その辺は支那の豆腐やら、肉饅頭やら、豆素麵などを売る汚ない店の隙間なく並んでいる所であつたが、黒い頭の塊まった下を覗くと、六十ばかりの爺さんが大地に腰を据えて、両脛を折つたなり前の方へ出していた。その右の膝と足の甲の間を二寸ほど、強い力で刮り抜いたように、脛の肉が骨の上を滑つて、下の方まで行つて、いっしよに縮れ上つてゐる。まるで柘榴を潰して叩きつけた風に見えた。こう云う光景には慣れているべきはずの案内も、少し寒くなつたと見えて、すぐに馬車を留めて、支那語で何か尋ね出した。余も分らないながら耳を立てて、何だ何だと繰返して聞いた。不思議な事に、黒くなつて集つた支那人はいずれも口も利かずに老人の創を眺めている。動きもしないから至つて静かなものである。なお感じたのは、地面の上に手を後へ突いて、創口をみんなの前に曝している老人の顔に、何らの表情もない事であつた。痛みも刻まれていない。苦しみも現れていない。と云つて、別に平然ともしていかない。気がついたのは、ただその眼である。老人は曇よりと地面の上を見ていた。

馬車に引かれたのだそうですと案内が云った。医者はいないのかな、早く呼んでやったらいいだろうにと間接ながら窘たしなめたら、ええ今にどうかするでしょうという答である。この時案内はもう本来の気分を回復していたと見える。鞭むちの影は間もなくまた閃ひらめいた。埃ほこりだらけの御者ぎよしやは人にも車にも往来にも遠慮なく、滅法めつぼう無頼ぶらいに馬を追った。帽も着物も黄色な粉こを浴びて、宿の玄関へ下りた時は、ようやく残酷な支那人と縁を切ったような心持がして嬉うれしかった。

四十六

支那の古家ふるいえをそのまま使つてゐるから、御寺の本堂を客間に仕切つたと同じようである。釣り廊下を渡つて正面の座敷のぞを覗くと、骨董こつとうがいっぱい並べてあつたので、何事かと思つたら、北京ペキンへ買出しに行つた道具屋が、帰り途にここで逗とまり留ゆう中の見世みせを張つたのだと分つたから、冷し半分這入はいつて見てゐるうちに、時間が来たので、外へ出た。今度は車だから好かろうと安心して、ちよつとハイカラに膝ひざ頭がしらを重ねて反そり返かえつて見たが、やはりけつして無難ではない。人力は日本人の発明したものであるけれども、引子ひきこが支那人

もしくは朝鮮人である間はけつして油断してはいけない。彼等はどうか他の拵ひとこしらえたものだという料簡りようけんで、毫も人力に對して尊敬を払わない引き方をする。海城かいじょうというところ

で高麗こまの古跡こせきを見に行つた時なぞは、尻が蒲団ふとんの上に落ちつく暇がないほど揺れた。一尺ばかり跳ね上げられる事は、一丁の間に一度は必ずあつた。しまいに朝鮮人の頭をこきんと張つけてやりたくなつたくらい残酷に取扱われた。奉天の道路は海城ほど凸凹でこぼこにでき上つていないから、むやみに車の上で踊をおどる苦痛はないが、その引き方のいかにも無技巧で、ただ見境みさかいなく走かけさえすれば車夫の能事のうじおわ畢ると心得ている点に至つては、全く朝鮮流である。余は車に揺られながら、乗客じようかくの神経に相應の注意を払わない車夫は、いかによく走かけたつて、ついに成功しない車夫だと考えた。

そのうち大きな門の下へ出た。奉天へ前後四泊した間に、この門を何度となく潜くぐつた覚おぼえがある。その名前も幾度いくたびとなく耳にした。ところがそれを忘れてしまった。その恰好かつこうもはなはだ曖昧あいまいに頭に映るだけである。しかし奉天の市街まちに入つて始めて埃ほこりだらけの屋根の上に、高くこの門を見上げた時は、はあと思つた。その時の印象はいまだに消えない。橋本といつしよにこの門の傍そばにある小さな店に筆と墨を買いに行つた折の事も、寂びた経験の一つとしてよく覚えてゐる。その時橋本は敷居を跨またいで、中へ這入はいつた。余も橋本に

続こうとして身体を半分廂ひさしから奥へ差し込んだが、支那の家に固有な一種の臭におが、たちまち鼻に感じたので、一二歩往來の方へ出て佇たたずんでいた。今云う門は十間ばかり先の四辻よつじにあるので、余は鳥打帽の廂に高い角度を与えてわざわざ仰あおむいて見た。時刻は暮に近い頃だったから、日の色は瓦かわらにも棟むねにも射さないで、眩まぼしい局部もなく、総体が肅しゆくぜん然ぜんと喧かまびすしい十字の街まちの上に超越していた。この門は色としては、古い心持を起す以外に、特別な采あやをいっこう具えていなかった。木も瓦も土もほぼ一色ひといろに映る中に、風鈴ふうりんだけが器用に緑を吹いていただけである。瓦の崩くずれた間から長い草が見えた。廂の暗い影かげを掠かすめて白い鳩が二羽飛んだ。余は久しぶりに漢詩というものが作りたくなつた。待つている間少し工夫して見たが、一句も纏まとまらないうちに、橋本が筆と墨を抱かかえて出て來たので興き趣ようしゆは破れてしまった。

このほかにこの門から得た経験は、暗い穴倉のなかで、車に突き当りはしまいかと云う心配と、煉瓦れんがに封じ込められた塵ちりほこり埃いを一度に頭から浴びると云う苦痛あくらつむそうだけであつた。余の車屋はこの暗い門の下を潜つて、城内の満鉄公所まで、悪辣無双あくらつむそうに引いて行つた。余は生きた風呂敷包のごとく車の上で浮沈ふちんした。

四十七

茶を飲むと、酸すいような塩はゆいような一種の味がする。少し妙だと思つて、茶碗を下へ置いてゆつくり橋本の講釈を聞いた。その講釈によると、奉天には昔から今日こんにちに至るまで下水と云うものがない。両便の始末は無論不完全である。そこで古来から何百年となぐ奉天の民が垂れ流した糞くそ小便しょうべんが歲月の力で自然じねんてんねん天然に地じの底に浸しみ込んで、いまだに飲料水に祟たたりをなしているんだと云う。一応はもつともだが、説明が少し科学的でないようである。第一それほど所なら穀類野菜ともに、もつとよくできなければならぬはずだと思つたが、馬鹿ばか氣げているから議論もしなかつた。橋本もこれは伝説だよと断つた。伝説と云えば日本武尊やまとだけのみことの東夷征伐と同種類に属すべきもので、真偽以外に、重く取扱わねばならぬ筋の来歴を有しているに違いない。いかにも汚きたない国民である。

湯を立てて貰はいつて這入はいつて見ると、濁にごつてゐる。別に黄色く濁にごつてゐる訳ではないが、御茶の味から演繹えんえきすればやつぱり酸すっぱい湯つかに浸つかつてゐるとよりほかに考えようがない。鹹しおみず水とにも溶けるとか云つて大連でくれた豆石鹼まめシャボンでも、行李こうりの底から出せばよかったと思つた。風呂場も風呂桶おけも小さいものである。その上下女が出て来て背中を流してくれる。

窮屈に身体を曲げながら、御前は日本人だろう。日本はこの生れだいななどと話をした。この下女は始めて宿へ着いた時、余を橋本の随行と間違えて、そら何とかさんもいっしょにいらしたと云った。その何とかさんは橋本が蒙古へ行くとき、彼と同じくここへ泊った事があるのだそう。顔が似ているから間違えたのか、様子が御供らしいから間違えたのかは、つい聞き糺して見なかった。窓の外に大きな甕が埋けてある。我々の汗や垢が例の酸っぱい水といっしょになって、朝に晩に流れ込んでいるのだから、時々汲み出さなければ溢れるほど溜ってしまう。それを支那の下男が石油缶へ移して天秤棒で担いで、どこかへ持つて行く。風呂に浸りながら、どこへ持つて行くんだろうなと考えた。余計な心配のようだが余はこの汚水が結局どう片づけられるかの処置を想像して見て、少しく恐ろしくなった。

これでいて御馳走がむやみに出る。胃の悪い余のごときものは、御膳の上を眺めただけで、腹がいっぱいになってしまう。夜は緞子の夜具に寝かしてくれる。店の方では電話が仕切なしにちりんちりと鳴っている。品の好い御神さんが、はあもしもしを乃別に繰返す。或る時チョコレート菓子食べたくなったから、下女に有るかいと聞いて見ると、すぐもしもしで取り寄せてくれた。のみならず満鉄公所へ御馳走を受けに行けば、三三

鞭^シが現れる。領事館へ挨拶に行けば、英吉利^{イギリス}の王様の写真などが恭^{うやうや}々しく飾つてあつて、まるで倫敦^{ロンドン}のような氣持になる。そうかと思うと、宿の座敷の廊下の向うが白壁で、高い窓から光線が横に這入^{はい}つて来るのは仕方がないが、その窓に嵌^はめてある障子^{しょうじ}は、北^ほ斎^{くさい}の画^かいた絵入^{えいり}の三^{さん}国^{こく}志^しに出^でてくるような唐^{から}めいたものである。しかもあまり綺麗^{きれ}ではない。その上室^{へや}の中が妙な臭^{にお}を放^はつ。支那人が執^{しゅう}拗^ねく置^おき去^{さり}にして行^いつた臭^{にお}だから、いくら綺麗好きの日本人が掃除をしたつて、依然として臭い。宿では近^{きん}々^{きん}停^ス車^テ場^ー附^ン近^ンへ新築をして引移るつもりだと云つていた。そうしたら、この臭だけは落ちるだろう。しかし酸っぱい御茶は奉天のあらん限り人畜^たに祟^たるものと覺悟しなければならぬ。

四十八

黒い柱が二本立っている。扉も黒く塗つてある。鋌^{びよう}は飯茶碗を伏せたように大きく見える。支那町の真中にこんな大名屋敷に似た門があるうとは思いがけなかった。門^はを這^{はい}入^りるとまた門がある。これは支那流にできていた。それを通り越すと幅一間ほどの三和土^たが真^ま直^つに正面まで通っている。もつとも左右共に家続きであるから、四角な箱の中をがらん

胴どうにして、その屋根のない真中を、三和土たたくを辿たどつて突き当る訳になる。肋骨君ろっこつくんの説明を聞いて知つたのだが、この突当りが正房せいぼうで、左右が廂房しょうぼうである。肋骨君はこの正房の一棟ひとむねに純粹の日本間さえ設けている。ちよつと見たまえと云つて案内するから、後に跟ついて行くと、思わざる所に玄關があつて、次の間が見えて、その奥の座敷には立派な掛物がかかつていた。かと思うと左の廂房の扉を開いてここが支那流の応接間だと云う。なるほど紫檀したんの椅子ばかり並んでいる。もつとも西洋の客間と違つて室の真中は塞ふさいでいない。周囲に行儀よく据えつけてある。これじゃ客が来ても向い合つて坐る事はできない訳だから、みんな隣同志で話をする男ばかりでなければならぬ。中にも正面の二脚は、玉座よんざとも云うべきほどに手数てすうの込んだもので、上に赤い角枕かくまくらが一つずつ乗せてあつた、支那人てえものは呑気のんきなものでね、こうして倚よつかかつて談判をするんですと肋骨君が教えてくれた。肋骨君は支那通だけあつて、支那の事は何でも心得ている。あるとき余に向つて、辮髪べんぱつまで弁護したくらいである。肋骨君の説によると、ああ云うぶくぶくの着物を着て、派出はでな色の背中へ細い髪を長く垂らしたところは、振ふるえ付つきたくなるほど好いだそうだから仕方がない。實際肋骨君が振え付きたくなると云う言葉を使つたには驚いた。今でもこの言葉を考え出しては驚いている。いっぺん汚きたない爺さんが泥鰌どじょうのような奴を

あたじけなく頸筋^{くびすじ}へ垂らしていたのを見て、ひどく興^{きょう}を覺したせいだろう。

これほどの肋骨君も正房の応接間は西洋流で我慢している。その隣の食堂では西洋料理を御馳走^{ごちそう}した。それから襯衣^{シャツ}一枚で玉を突く。その様子はけつして支那じゃない。万事橋本から聞いたより倍以上活潑^{かつぱつ}にできているところをもつて見ると、振え付きたいは少々言い過ぎたのかも知れない。肋骨君は戦争で右か左かどつちかの足を失^なくした。ところがそれがどつちだか分らないくらい、自由自在に起^たつたり坐^{すわ}つたりする。そうして軍人に似合わないような東京弁を使う。どこで生れたか聞いて見たら、神田だと云った。神田じゃそのはずである。要するに肋骨君は支那好であると同時に、もつとも支那に縁の遠い性質^{たて}の人である。

室^{へや}は空^あいてるから来たまえとしきりに云つてくれるので、じゃ帰りに厄介になるかも知れないと云うとすぐ宜^{よろ}しいと快諾したところだけは旨^{うま}かったが、帰りには夜半^{よなか}の汽車で奉天へ着く時間割だと橋本から聞くや否や、肋骨君はたちまち宿泊を断った。いや、あの汽車じゃ御免^{ごめん}だと云う。もう一つの汽車が好いじゃないかと勧めるんだが、プログラムの全権があいにくこつちにないので、やむをえず、そんなら、もし夜半の汽車でなかったら泊めて貰おうと云う条件をつけた。すると肋骨君はまた宜しいと答えた。ところが帰りには

やつぱり予定通夜^{やはんちやく}半着の汽車へ乗ったのでとうとう満鉄公所へは泊まらない事になった。満鉄公所で余の知らない所は寢室だけである。

四十九

右へ折れると往来とは云われないくらい広い所へ出たのでようやく安心した。これならば人を引殺す心配もなかうと思つて、案内をしてくれる、宿の番頭を相手に、行く行く話をした。満洲の日は例によつて秋^{しゅうごう}毫^ごの先を鮮^{あざや}かに照らすほどに思い切つたものである。眉深^{まぶか}に烏打帽^{かぶ}を被つても、三日月形^{みかづきがた}の廂^{ひさし}では頬から下をどうする事もできないので、直下^{じか}に射^いつけられる所は痛いくらいほてる。そこへ馬の蹄^{ひづめ}に掻^かき立てられた軽い埃^{ほこり}が、車の下から濛々^{もうもう}と飛んで来る。番頭は、結構な御日^{おひより}和です、少し風でも吹いたらこんなものじゃありませんと喜んでゐる。そのうち馬車が家を離れて広い原へ出た。原だから無論樹^きも草も見えないのは当然だが、遠く眺めると、季節だけに青いものが際限のない地の^{うわがわ}上^{うわ}皮^{かわ}に、幾色かの影になつて、一面に吹き出している。なぜこれほどの地面^{むな}を空しく明けておくかは、家屋の発展に忙殺^{ぼうさい}されつつある東京ものの眼には即時の疑問として起^{おこ}る。

訳であるが、この際はそれよりも窮屈な人間を通り抜けて晴々としたと云う意識の方が一度に余の頭を照らした。路は固よりついていない。東西南北共に天に作った路であるから、轍の迹は行く人の心任せに思い思いの見当に延びて行く。

支那人の馬車が来た。屋根に蒲鉾形の丸味を取った棺のようなもののなかに、髪を油で練固めた女が坐っている。長柄は短い、車の輪は厚く丈夫なものであった。云うまでもなく騾馬に引かしている。まず日本の昔に流行った牛車の小ぢんまりしたものと思えば差支えないが、見たところは牛車よりもかえって雅である。その代り乗つて人間は苦しいそうだ。余はこの車のごろごろ行くところを見て、輓たり※たりと形容したくなつた。輓の字も※の字も判然たる意味を知らないのだが、乗つてゐる人は定めて輓※たるものに相違なかうと思つたからである。実を云うと輓※たるものは支那の車ばかりではない。こう云う自分もはなはだ危しかった。一望して原だよと澄ましていればそれまでの事で、仰のごとく平らにも見えるが、いざ時間に制限を切つて、突切つて見ると云われると、恐ろしく凸凹ができてくる。おいここで馬車の引っくり返る事はあるまいと番頭に念を押すと、番頭はええ、まあたいてい大丈夫でしょうと云うだけで、けつして万一を受け合わない。どうも並んでいる番頭の座が急に高くなつて、番頭そのものが余の方に摺

落ちて来そうになつたり、またはあべこべに、余が番頭のシャツポの上に顛こころび落ちそうになるのは心こころ好よくないものである。余は神経質で臆病な性しょうぶん分だから、車が傾かくたんびに飛び降りたくなる。しかるに人の氣も知らないで、例の御ぎよ者しやが無敵に馬を馳かけさせる。いらぬ事だと冷や冷やしているうちに、一カ所路の悪い所へ出た。原因は解らないが、轍の迹きわだが際立きわだつて三四十本並んでいる。しかもその幅がいずれも五六寸ある。そうして見るからに深そうに、日影を遮さへぎつて、奥の方を黒くかつ暗くしている。我々の御者は平氣にそこへ乗り込んだ。順当に乗り込んだのならまだよかつたけれども、片方の輪だけが泥の中へぐしやぐしやと滅めり込こむと同時に、片方は依然として固い土に支えられている。余は泥ど側ろがわに席を占めていた。すると足が土と擦すれ擦すれになるまで車が濘ぬかるみ海みに沈んで来た。番頭は余の頭の上にあるごとく感ぜられた。余はたまらなくなつて、泥の中へ飛び下りた。

五十

原が急くさむらに叢くさむらに変化するのは不思議であつた。ここにこれだけの樹きが生えるなら、原の中ももう少し茂しかつて然しかるべきであると氣がついた時はすでに車の両側が塞ふさがつていた。竹こ

そないが、藪やぶと云うのが適當と思われるくらいな緑の高さだから、日本の田舎道いなかみちを歩くようなおとなしい感じである。ところどころ細い枝などが列を外れて往來へ差し出ているのを、通りながら潜り抜けたリ、撓しなわしたりして行き過ぎるのが何より愉快だった。路も先刻さきよりは平たくなつて、真白に草と木の間を貫つらぬいている。ある所には大きな松があつた。葉の長さが日本の倍もあつて色は海辺うみべのそれよりも黒い。ある所は荒れ果てた庭園ていの体に見えた。そう云う場所へ来ると、馬車の上から低い雑木ぞうきを一目に二丁も眺められる。向うに細長い石碑が立っていた。模様だけが薄く見えるが、刻字こくじは無論分らなかつた。

しばらくすると、路が尽きて高い門の下へ出た。門は石を畳たたんだ三つのアーチからでき上っているが、アーチの下まで行くにはだいぶ高い石段を登らなくてはならない。門の左右には大きな竜が壁に彫り込んであつた。これが正門ですがね、締切りだから壁へ添ついて廻るんですと云つて、馬を土堤どてのような高い所へ上げた。右は煉瓦れんがの壁である。それがところどころ崩れかかっている。左はだらだら谷で野葡萄のぶどうや雑木が隙間なく立て込んだ。路は馬車が辛うじて通れるぐらい狭い。そこを廻つて横手の門から車を捨てて這入はいると、眼がすつきりと静まつた。一抱ひとかかえもある松ばかりが遥はるかの向まで並んでいる下を、長方形の石で敷きつめた間から、短い草が物寂ものさびて生えている。靴の底が石に落ちて一歩ごとに

鳴った。一丁ばかり行つて正面に曲ると、左右に石の象がいた。大きくつて、鷹揚で、しかも石だからなはだ静かである。突き当りにある楼門のような所へ這入ったら、今度は大きな亀の背に頌徳碑しょうとくひが立ててあつた。亀も大きかったが、碑も高い。蒙古と満洲と支那の三国語で文章が刻つてある。後へ出ると隆恩門りゅうおんもんと云うのが空に聳そびえていた。積み上げたアーチの上を見ると三層あつた。左右に回めぐらしてある壁も尋常ではない。あの上を歩いて見たいと番頭に頼むと、ええ今乗つて見ましよう云つて中へ這入つた。中は真四角に仕切つてある。正面にある廟びやうの横から石段を登つて壁の上へ出ると、廟びやうの後だけが半月形はんげつけいになつていわゆる北陵ほくりやうを取り巻いている。

支那の小僧はだしが跣足で跟ついて来た。番頭を捕つかまえてしきりにこそそこ何か云つてゐる。番頭に聞くと、ええなにと曖昧あいまいな答をする。また聞き返したらこう云つた。——屋根ひさしの廂のの所に着けてある金の玉を、この間一つ落ちた時に、拾つておいたから、買つてくれと云うんです。表向おもてむきにすると厳きびしいものですから、こうして見物に來た時、そうつと売りつけようで、支那人は實じつに狡猾こうかつですからね。

支那の陵りやうもり守も無論狡猾だろうが、金の玉を安く買おうと云う番頭もあり正直な方じゃない。番頭はそつと錢ぜにをやつて金の玉をポケットへ入れたようである。

壁の上を歩くと太い樹が眼の下に見える。桑があんなに大きくなつてますと番頭が指した。なるほど一抱もある。この四角な壁の一側は長さどのくらいかねと尋ねると、へえ今勘定して見ましようと言いながら、一步二尺の割で、一二三四と歩いて行つた。余は壁の外を見下して、そこらを絡んでいる赤い木の実を眺めていた。せつかく番頭の勘定した壁の長さは忘れてしまった。

五十一

撫順は石炭の出る所である。その坑長を松田さんと云つて、橋本が満洲に来る時、船中で知己になつたとかで、その折の勧誘通り明日行くと云う電報を打つた。汽車に乗ると西洋人が二人いた。朝早いので、客車内で持参の弁当が何か食つていたが、撫順に着いたら我々といつしよに汽車を降りた。出迎えのものが挨拶しているところを聞いて見ると、そのうちの一人は奉天の英国領事であつた。我々もこの英人等といつしよに炭坑の事務室に行つて、二階で松田さんに逢つた。松田さんは縞の縮の襯衣の上に薄い背広を着ていた。背の低い気軽な人なので、とうてい坑長とは思えなかつた。我々と英国人を

ふたところ
一一所に置いて、双方へ向けて等分に話をした。橋本も余も英語はいつさい口にしなければならなかった。したがって英人とは言葉を交えなかった。

やがて松田さんが案内になつて表へ出た。貯水池の土堤へ上ると、市街が一目に見える。まだ完全にはでき上っていないけれども、ことごとく煉瓦作りである上に、スチュジオにでも載りそうな建築ばかりなので、全く日本人の経営したものとは思われない。しかもその洒落た家がほとんど一軒ごとに趣を異にして、十軒十色とも云うべき風に変化しているには驚いた。その中には教会がある、劇場がある、病院がある、学校がある、坑員の邸宅は無論あつたが、いずれも東京の山の手へでも持つて来て眺めたいものばかりであつた。松田さんに聞いたら皆日本の技師の拵えたものだと言われた。

市街から眼を放して反対の方角を眺めると、低い丘の起伏している向うに煙突の頭が二カ所ほど微かに見える。双方共距離はたしかに一里以上あるんだから広い炭坑に違ない。松田さんの話によると、どこをどう掘つても一面の石炭だから、それを掘尽くすには百年でも二百年でもかかるんだそうである。我々の立っているついでに、八百尺と九百尺のシャフトを抜いていた。

事務所へ帰つて午餐の御馳走になつたとき英国人は箸も持てず米も喰えず気の毒なもの

であつた。この領事は支那に十八年とかいたと云うのに、二本の箸を如何ともする事のできないのは案外である。その代り官話かんわは達者だそうだ。松田さんは用事が忙しいとかで、食卓へは出て来られなかつた。接待役として松田さんに代つた人は、英語で英国人に話したり、日本語で余等に話したりはなはだ多事であつた。けれども橋本氏も余もこの時まで英語はいつさい使わなかつた。元来英人と云うものはプラウドな氣風を帯びていて、紹介されない以上は、他ひとに向つて容易に口を利きかない。だから我々も英人に対しては同様にプラウドである。

食後は坑内を見物する事になつた。田島君という技師が案内をしてくれた。入口で安全灯を五つ点ともして、杖を五本用意して、それを各自めいめいに分けて、一間四方ぐらいの穴をだらだらと下りた。十四五間行くか行かないに坑あなのなかは真暗まつくらになつた。カンテラの灯ひは足元を照らすにさえ不足である。けれども路は存外平らで、天てん井じょうもかなり高かつた。右へ曲つて、探るようになりて行くと、余のすぐ前にいる田島君がびたりととまつた。余もとまつた。案内がとまつたから、あとから続いて来たものもことごとくとまつた。ここに腰かけがあります。坑へ這入はいるものはここで五六分休んで眼を慣らすんですと云つた。五人は休みながらカンテラの灯で互の顔を見合わした。みんな立つて黙っている。腰をおろ

すものは一人もない。静かな中で時の移るのは多少凄^{すこ}かった。そのうち暗い所が自然と明るくなって来た。田島君はやがて、もうよかろうと云つて、またすぐ右へ曲つて、奥へ奥へと下りて行つた。余も続いて下りた。あとの三人も続いて下りて来た。

ここまで新聞に書いて来ると、大晦日になった。二年に亘るのも変だからひとまずやめる事にした。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年4月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年6月20日公開

2004年2月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

満韓ところどころ

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>